

新原・奴山古墳群

福岡県宗像郡津屋崎町所在古墳群の調査報告

津屋崎町文化財調査報告書

第 6 集

1 9 8 9

津屋崎町教育委員会



a. 新原・奴山古墳群を東上空から望む 1988年11月撮影



b. 新原・奴山古墳群全景空中写真 1988年11月撮影



a. 新原・奴山古墳群を西上空から望む 1975年11月撮影



b. 新原・奴山古墳群を東上空から望む 1988年春撮影

a 津屋崎の古墳群を南上空から望む 一九八五年春撮影



b 新原・奴山古墳群を南上空から望む 一九八五年春撮影



c 新原・奴山古墳群を北上空から望む 一九八六年九月撮影



d 新原・奴山古墳群を東上空から望む 一九八六年九月撮影



a 22号墳を西上空から望む 一九八五年10月撮影



b 25・30号墳等を西上空から望む 一九八六年九月撮影



c 12号墳を西上空から望む 一九八八年九月撮影



d 24号墳を南上空から望む 一九八七年九月撮影



e 30号墳を西北上空から望む 一九八六年九月撮影



f 30号墳空中写真 一九八六年九月撮影



序

福岡県宗像郡津屋崎町は、玄界灘に面し南北に伸びる細長い地形で、現在は水田地帯となっている中央部の広い平野は、古代は有千潟（ありちがた）と呼ばれる広い入海でありました。つまり本町は外海に面しているために航海には好都合であり、入海をもっていたということは格好の船泊りに恵まれていたということでもあります。このことから当地が古くから海上交通の要衝となっていたことは容易に首肯できることであり、従って古代の多くの人々が定住していたことは各種の埋蔵文化財が町内から数多く発見されており、とりわけ約200にのぼる古墳群が存在することでその事実を裏付けていると考えられます。

古墳の築造には莫大な労力と長い年月と巨額の費用を必要としたであろうことは想像に難くありませんが、それを可能にした、おそらく文化的にも高度なものを持っていたであろう多くの古代人がこの地に居住していたという歴史を持っていることは、この地を伝承している私たちの大きな誇りであります。

町内の古墳群のうちでも、新原・奴山地区には貴重な大形円墳や前方後円墳が所在していることは早くから知られておりましたが、それらについて昭和60年度から本格的な調査を実施いたしました。言うまでもなくこの調査は国および県当局の物心両面にわたる御援助と御指導を得なければ到底実現できることではありませんでした。40ヶ所の古墳を4年間にわたり詳細に実測・調査して本年度をもって完了し、記録としてまとめられた訳であります。

このたびの調査結果をふまえ、町内の他の古墳群と併せて総合的に考察し、将来的には古墳公園を建設し広く世に公開すべきであり、それが私どもの責務であると考えております。

末尾となり甚だ恐縮に存じますがひと言お礼の言葉を申し上げます。

過去4年間、実地調査は毎年7月から9月の炎熱酷暑の期間に行なわれました。科学への旺盛な探求心と情熱、そして誠実さの持主でなければ到底果たすことのできない困難な事業を福岡県教育委員会福岡教育事務所技術主査橋口達也氏および同教育事務所技術主査池辺元明氏が見事に完遂されました。文字どおり献身的な御尽力に衷心から感謝申しあげております。同時に御協力を惜しまれなかった関係者各位に深甚な謝意を表するものであります

平成元年3月31日

福岡県宗像郡津屋崎町教育委員会

教育長 中野 新

例 言

1. 本書は1985年度から1988年度にかけて、津屋崎町が主体となって調査を行なった津屋崎町勝浦・奴山所在の新原・奴山古墳群の調査報告書である。
2. 本書の執筆分担は下記のとおりである。
- I

II - 1

2

III

橋口達也

池辺元明・橋口達也

橋口達也

橋口達也
3. 遺跡の航空写真は九州歴史資料館石丸洋撮影によるものの他、国際航業、「空中写真企画」からの提供も受けた。気球による空中写真は「空中写真 稲富」、「空中写真企画」に委託した。その他は橋口達也・池辺元明によるものの他、1～6号墳については各調査時の写真の提供を受けた。遺物写真は九州歴史資料館の須原悦子が撮影した。
4. 遺物の実測は橋口達也・大田育子が行なった。
5. 挿図・付図の製図は豊福弥生が行なった。
6. 本書の編集は橋口達也が行なった。

本 文 目 次

	頁
I. はじめに	1
1. 調査の経過	1
2. 新原・奴山古墳群の位置と環境	3
II. 調査の内容	5
1. はじめに	5
2. 調査の内容	8
A. 既調査の古墳	8
B. 今回調査の古墳	19
III. 新原・奴山古墳群の成立と変遷	42
1. 古墳群の開始期と大形古墳の築造の順位	42
2. 新原・奴山古墳群における大形古墳の規模	43
3. 周辺大形古墳との関係	
——特に勝浦古墳群との時間的対比	44
4. 前方後円墳・大形円墳を主体とする古墳群成立の背景	47

図 版 目 次

- 巻頭カラー図版 1 a. 新原・奴山古墳群を東上空から望む 1988年11月撮影
b. 新原・奴山古墳群全景空中写真 1988年11月撮影
- 2 a. 新原・奴山古墳群を西上空から望む 1975年11月撮影
b. 新原・奴山古墳群を東上空から望む 1988年春撮影
- 3 a. 津屋崎の古墳群を南上空から望む 1985年春撮影
b. 新原・奴山古墳群を南上空から望む 1985年春撮影
c. 新原・奴山古墳群を北上空から望む 1986年 9 月撮影
d. 新原・奴山古墳群を東上空から望む 1986年 9 月撮影
- 4 a. 22号墳を西上空から望む 1985年10月撮影
b. 25・30号墳等を西上空から望む 1986年 9 月撮影
c. 12号墳を西上空から望む 1988年 9 月撮影
d. 24号墳を南上空から望む 1987年 9 月撮影
e. 30号墳を西北上空から望む 1986年 9 月撮影
f. 30号墳空中写真 1986年 9 月撮影

図版 1. 新原・奴山古墳群全景空中写真（1982年 5 月 国際航業撮影）

2. a. 新原・奴山古墳群を西上空から望む 1975年11月撮影
b. 新原・奴山古墳群を西上空から望む 1975年11月撮影
3. a. 津屋崎の古墳群を宮司上空から望む 1975年11月撮影
b. 津屋崎の古墳群を在自上空から望む 1975年11月撮影
c. 生家、新原・奴山古墳群を南上空から望む 1975年11月撮影
d. 新原・奴山古墳群を北上空から望む 1975年11月撮影
4. a. 新原・奴山古墳群を南上空から望む 1975年11月撮影
b. 新原・奴山古墳群を西南上空から望む 1975年11月撮影
c. 新原・奴山古墳群を西上空から望む 1975年11月撮影
d. 新原・奴山古墳群を東上空から望む 1977年 9 月撮影
5. a. 1・2号墳全景（発掘前）
b. 1・2号墳全景（発掘後）
c. 1号墳後円部墳丘縦断面
d. 2号墳全景（発掘前）
6. a. 2号墳全景（発掘後）
b. 3号墳石室全景
c. 4号墳全景
d. 4号墳石室全景
7. a. 5・6号墳全景
b. 5号墳全景
c. 5号墳墳丘全景
d. 5号墳土器出土状態
8. a. 5号墳土器出土状態
b. 5号墳土器出土状態
c. 6号墳全景
d. 6号墳石室全景
9. a. 20・21・22号墳等を西から望む 1986
b. 15号墳周辺および21・22号墳を西から望む 1987
c. 24号墳を西南から望む 1986
d. 20・22・24号墳を西南から望む 1987
10. a. 20・22号墳を西から望む 1986

- b. 21号墳等を西から望む 1986
- c. 25・30号墳を北から望む 1986
- d. 25号墳を西北から望む 1986
- 11. a. 30号墳を北から望む 1986
- b. 35・36号墳を東北から望む 1986
- c. 40号墳を東北から望む 1986
- d. 新原・奴山古墳群を東南から望む 1986
- 12. a. 21号墳第1トレンチ
- b. 21号墳第1トレンチ
- c. 21号墳第3トレンチ
- d. 21号墳第4トレンチ
- 13. a. 22号墳第1トレンチ（前方部）墳丘の2段築成
- b. 22号墳第1トレンチ 墳丘の上段
- c. 22号墳第1トレンチ 墳丘の上段
- d. 22号墳第1トレンチ 墳丘の下段
- 14. a. 22号墳第1トレンチ墳丘下段
- b. 22号墳第4トレンチ
- c. 24号墳第1トレンチ
- d. 24号墳第2トレンチ
- 15. a. 25号墳第1トレンチ周溝検出状態
- b. 25号墳第1トレンチ（墳丘上から）
- c. 25号墳第1トレンチ 葺石の残存状態
- d. 25号墳第2トレンチ
- 16. a. 7・8号墳空中写真 1988
- b. 7号墳空中写真 1988
- c. 7・8・9・10号墳空中写真 1988
- d. 7号墳空中写真 1988
- e. 9・10・11号墳空中写真 1988
- f. 9・10・11号墳空中写真 1988
- 17. a. 12・13・14号墳空中写真 1988
- b. 12号墳空中写真 1988
- c. 12・13・14号墳空中写真 1988
- d. 12・13・14号墳空中写真 1988
- e. 12・13・14号墳空中写真 1988
- f. 13・14号墳空中写真 1988
- 18. a. 15・16・17・18・19・46号墳空中写真 1987
- b. 20・22号墳空中写真 1985
- c. 20号墳空中写真 1985
- d. 20号墳空中写真 1987
- e. 21・22号墳空中写真 1985
- f. 21・22号墳空中写真 1985
- 19. a. 20・21・22号墳空中写真 1985
- b. 新原・奴山古墳群を西北上空から望む 1987
- c. 24号墳空中写真 1987
- d. 24号墳空中写真 1987
- e. 22・25号墳空中写真 1985
- f. 25・30号墳周辺空中写真 1986
- 20. a. 25・30号墳周辺空中写真 1985
- b. 25・30号墳周辺空中写真 1986
- c. 25号墳空中写真 1986

- d. 新原・奴山古墳群を北上空から望む 1986
- e. 30号墳空中写真 1986
- f. 30号墳空中写真 1986
- 21. a. 30・34号墳周辺空中写真 1986
- b. 34・35・36号墳空中写真 1986
- c. 34号墳空中写真 1986
- d. 34号墳空中写真 1986
- e. 35・36号墳空中写真 1986
- f. 35・36号墳空中写真 1986
- 22. a. 37・38号墳空中写真 1986
- b. 40号墳周辺空中写真 1986
- c. 出土土器

挿 図 目 次

	頁
第 1 図 新原・奴山古墳群周辺遺跡分布図（縮尺1／25,000）	4
第 2 図 新原・奴山古墳群分布図（縮尺1／5,000）	7
第 3 図 1号墳石室実測図（縮尺1／60）	9
第 4 図 1号墳後円部墳丘出土の須恵器大甕実測図（縮尺1／6・1／3）	10
第 5 図 1号墳丘出土高坏実測図（縮尺1／3）	11
第 6 図 1号墳出土の鉄器実測図（縮尺1／3）	11
第 7 図 2号墳石室実測図（縮尺1／60）	12
第 8 図 2号墳出土土器実測図（縮尺1／3）	13
第 9 図 3号墳石室実測図（縮尺1／60）	14
第 10 図 3号墳出土土器実測図（縮尺1／3）	15
第 11 図 4号墳石室実測図（縮尺1／60）	16
第 12 図 4号墳出土土器実測図（縮尺1／3）	16
第 13 図 5号墳石室実測図（縮尺1／60）	17
第 14 図 6号墳石室実測図（縮尺1／60）	18
第 15 図 7号墳墳丘表採土器実測図（縮尺1／3）	20
第 16 図 7号墳墳丘表採鉄斧実測図（縮尺1／3）	20
第 17 図 12号墳墳丘表採土器実測図（縮尺1／3）	22
第 18 図 20号墳墳丘表採土器実測図（縮尺1／3）	25
第 19 図 21号墳トレンチ土層図（縮尺1／60）	26
第 20 図 21号墳周溝内出土土器実測図（縮尺1／3）	27
第 21 図 22号墳墳丘断面図（縮尺1／300）	29
第 22 図 22号墳トレンチ土層図（縮尺1／60）	30
第 23 図 22号墳出土埴輪実測図（縮尺1／4）	31
第 24 図 24号墳墳丘断面図（縮尺1／300）	33
第 25 図 25号墳南側トレンチ東壁土層図（縮尺1／60）	34
第 26 図 25号墳出土土器実測図（縮尺1／3）	35
第 27 図 30号墳墳丘断面図（縮尺1／300）	36
第 28 図 30号墳墳丘表採土器実測図（縮尺1／3）	37
第 29 図 34・35号墳墳丘表採土器実測図（縮尺1／3）	38
第 30 図 40号墳出土土器実測図（縮尺1／3）	40
第 31 図 前方後円墳および大形墳の変遷（縮尺1／5,000）	42
第 32 図 墳丘規模比較図（縮尺1／600）	44
第 33 図 勝浦所在・津屋崎10号墳・津屋崎41号墳石室実測図（縮尺1／60）	45

第 34 図	糸島郡前原町三雲周辺の前方後円墳の分布（縮尺1／25,000）	頁 48
第 35 図	八女丘陵における前方後円墳・大形古墳の分布（縮尺1／50,000）	48

付 図 目 次

付図 1	津屋崎町新原・奴山古墳群全体図（縮尺1／1,000）
2	1 号墳墳丘測量図（縮尺1／300）
3	2 ・ 4 号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
4	5 ・ 6 ・ 11号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
5	7 ・ 8 号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
6	9 ・ 10 ・ 11号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
7	12 ・ 13 ・ 14号墳墳丘測量図（縮尺1／300）
8	13 ・ 14号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
9	15 ・ 18 ・ 19 ・ 46号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
10	16 ・ 17 ・ 18号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
11	20号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
12	21号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
13	21 ・ 22 ・ 23号墳墳丘測量図（縮尺1／300）
14	24 ・ 47 ・ 48号墳墳丘測量図（縮尺1／300）
15	25号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
16	26～29号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
17	30 ・ 31号墳墳丘測量図（縮尺1／300）
18	31 ・ 32 ・ 33号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
19	34 ・ 35 ・ 36号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
20	36～39号墳墳丘測量図（縮尺1／200）
21	40～43号墳墳丘測量図（縮尺1／200）

I. はじめに

1. 調査の経過

津屋崎町内には煙滅した古墳も含めて現在約180基の古墳が存在し、県内でも有数の古墳密集地域として知られている。なかでも前方後円墳は10数基を数え、「筑紫君」一族の墓域とみなされている八女丘陵の前方後円墳が11基であるのに比し、その集中度はなかり高く、その重要性が指摘される。これらの古墳群とくに前方後円墳は古代「宗像氏」一族の墳墓として知られ、沖ノ島祭祀遺跡との関連からも又、その重要性が認識されてきた。津屋崎町におけるこれらの古墳群のなかで、新原・奴山古墳群は5基の前方後円墳をはじめとして48基余の古墳が水田地帯に突出した低丘陵上に屹立し、山野へ草木を分けて入らずとも平地上で古墳に接することができることから、古くから研究者の間では「奴山古墳群」と通称され、親しまれてきた。又、地元の人々からは大事にされ千数百年の年月を経てもなおほぼ原形に近い状態で保存されてきたといえよう。

このように学術上大きな意義をもち、かつ多くの人々に親しまれてきた古墳群であるにもかかわらず環境整備面ではたち遅れており、文化財を広く活用しているとはいえない状況であり、この点での積極的な取組みが望まれていた。又、1976年には県道改良工事によって1～4号墳が、1980年にはカントリーエレベータの建設によって5・6号墳が工事に伴って事前に緊急調査され消滅した。⁽¹⁾ 又1977年には特別養護老人ホームの建設に伴って隣接地の津屋崎13号墳が緊急調査され消滅のやむなきに至った。⁽²⁾

以上のような状況のなかでこの古墳群の保護・活用は急務となっていたが、昭和59年度になって津屋崎町当局が新原・奴山古墳群の重要性に着目し、古墳公園構想を立案し福岡県教育委員会文化課と協議するところとなった。時宜にかなった企画であり、福岡県教育委員会としてはその後積極的に協力していくこととなった。

とりあえずは基礎資料の作成として古墳群の墳丘測量を重点として調査を実施することとなり、昭和60年度から昭和63年度までの4ケ年間、重要遺跡確認調査として国庫補助を受けて調査を実施した。

調査は津屋崎町が事業主体となり経費を負担し、福岡県教育庁教育事務所から調査担当職員を派遣して行なわれている。昭和60年度は総額300万円、昭和61年度は総額400万円、昭和62年度は総額300万円、昭和63年度は総額500万円の国庫補助を受けて調査を実施した。

調査期間と調査組織は下記のとおりである。

第1次調査………昭和60年9月3日から昭和60年10月19日

総 括	津屋崎町教育委員会教育長	中野 新
	〃 教育庶務課長	川嶋 宏
庶 務	〃 社会教育係長	花田 章
	〃 社会教育係（文化財担当）	葛城秀人
	〃 社会教育係	島田安男
	〃 〃	徳永 章
	〃 派遣社会教育 主事	藤原富男
調査担当	福岡県教育庁福岡教育事務所 社会教育課	技術主査 橋口達也
	福岡県教育庁 管理部文化課	技術主査 大塚 健
調査補助員	九州大学学生	牟田慎郎
	〃	土井基司

I. はじめに

第 2 次調査……………昭和61年 7 月 8 日から昭和61年10月 1 日

総 括	津屋崎町教育委員会教育長	中野 新
〃	〃 教育庶務課長	川嶋 宏
庶 務	〃 社会教育係長	芹野 智
	〃 社会教育係（文化財担当）	葛城秀人
	〃 〃	魚住清次
	〃 〃	徳永 章
	〃 派遣社会教育主事	藤原富男
調査担当	福岡県教育庁福岡教育事務所 社会教育課 技術主査	橋口達也
	〃 〃 〃	池辺元明
調査補助員	九州大学大学院生	土井基司
	〃	古野徳久

第 3 次調査……………昭和62年 7 月 7 日から昭和62年10月 3 日

総 括	津屋崎町教育委員会教育長	中野 新
	〃 教育庶務課長	川嶋 宏
庶 務	〃 社会教育係長	芹野 智
	〃 社会教育係（文化財担当）	葛城秀人
	〃 〃	魚住清次
	〃 〃	古川浩二
	〃 派遣社会教育主事	藤原富雄
調査担当	福岡県教育庁福岡教育事務所 社会教育課 技術主査	橋口達也
	〃 〃 〃	池辺元明
調査補助員	九州大学大学院生	古野徳久

第 4 次調査 昭和63年 7 月12日から昭和63年 9 月17日

総 括	津屋崎町教育委員会教育長	中野 新
	〃 教育庶務課長	北野清海
庶 務	〃 教育庶務係（文化財担当）	葛城秀人
	〃 〃	桜井直子
調査担当	福岡県教育庁福岡教育事務所 社会教育課 技術主査	橋口達也
	〃 〃 〃	池辺元明
調査補助員	九州大学学生	高久健二

なお第 1 次調査の際には文化庁記念物課黒崎直調査官の、第 2 次調査の際には福岡県文化財保護審議会史跡部会長渡辺正気先生の現地指導をいただいた。又調査の全期間において福岡県文化財保護指導委員永島俊一先生からは物心両面の御協力を賜った。奴山・練原をはじめ地元の皆さまには猛暑の折りにもかかわらず多大な御協力をいただき調査が順調に進行した。特に高山達、花田克人、谷口祥、花田征次氏等の御協力には感謝の念がたえない。

又、津屋崎町中央公民館の山脇富樹館長、後藤申吾館長をはじめ公民館の職員の皆さまには調査期間中多大の御迷惑をかけたにもかかわらず、諸々の御協力をいただき感謝するものである。

註 1 福岡県教育委員会「新原・奴山古墳群」福岡県報 1977
津屋崎町教育委員会「奴山古墳群」津屋崎町文化財調査報告書 第 3 集 1981

2 津屋崎町教育委員会「奴山5号墳」1978

2. 新原・奴山古墳群の位置と環境

津屋崎町内における古墳は約180基が知られている。大石山・対馬見山、在自山、宮地嶽等の西側山麓部、およびこれらの山々から派生した低丘陵上に立地する勝浦、新原・奴山、生家、大石、須多田等の古墳群、西は渡半島の森山、大峰山等の山麓部を中心にして分布している。

勝浦、新原・奴山、生家、大石、須多田の古墳群は前方後円墳を含み、山麓部に存在する群集墳とは性格を異にしている。前方後円墳は現在13基が知られ、単位地域における集中度としては有数なものであることが理解されよう。又、これら前方後円墳を含む津屋崎の古墳群の形成は5世紀初頭頃から始まり、7世紀の宮地嶽神社奥の院の古墳まで継続されて営まれて来たと考えられている。

ところでこれらの古墳群形成前は津屋崎町内にはそれ以前の古墳あるいは集落等はなかったのであろうか。たしかに弥生時代～古墳時代頃には勝浦の西東の集落付近まで海がはいり、水田耕作に依拠できる部分は狭小な谷部しかなかったことがわかる。しかし勝浦の津屋崎10号墳の前方部墳丘下では方形住居跡が3棟分検出され、5世紀初頭頃のものと報告されている⁽¹⁾。土器の図が掲載されていないが、図版に高坏等の写真3点があり、又その他の土器を観察すると高坏の脚に円形すかし孔等があり、現在では報告当時の年代観より遡るものと考えられ、4世紀後半頃に位置付けるのがよからうと考える。いずれにしても古墳形成前に勝浦の低丘陵には集落が存在した事実は確認できる。このような状況は現在未だ調査例が皆無に等しいが、新原・奴山古墳、生家、大石、須多田の古墳群の周辺でも付近の谷水田に依拠した集落が存在していたことを想定させる。

ところが、在自、宮司等津屋崎町の南部になるとやや様相が異なって来る。一つは今川遺跡⁽²⁾で知られるように弥生前期初頭からの遺跡が存在し、現在調査中の在自地区の圃場整備計画地域内では集落跡が主体となっている。また在自地区の名呑^{なのみ}では箱式石棺を主体部とし仿製内行花文鏡・剣・勾玉・櫛・ガラス小玉等を副葬した方形周溝墓が、同じく在自の新堤では鉄斧等を副葬した石棺が調査されている⁽³⁾。又1989年度に調査を予定している宮司の宮地嶽神社の禊池南の古墳（第1図南西隅に図示）は径30m程の円墳で周溝を有する古式の古墳である。このようにみると西郷川・今川・在自川等の形成する津屋崎町南部から福岡町の一部にかけての地域は、小単位として一つの地域的まとまりが弥生以来の発展のなかで形成されていたといえる。

このように小規模ではあるが谷水田に依拠した集落があった地域が5世紀初頭頃になって古代「宗像氏」一族の墳墓の地として選定され、その後7世紀頃まで古墳造営が継続されたことには、何らかの強制力を感じざるを得ない。この点は考察で詳述することにしたい。

註1 川述昭人「V 周辺の古墳と遺物 1 第10号古墳」福岡県教育委員会『新原・奴山古墳群』福岡県報54 1977

2 津屋崎町教育委員会『今川遺跡』津屋崎町文化財調査報告 第4集 1981

3 1974年緊急調査 未報告

(番号は津屋崎町分布調査番号による)

II. 調査の内容

1. はじめに

新原・奴山古墳群は過去数回にわたる分布調査が行なわれ、その成果による報告書も刊行されている。前章で述べたように新原・奴山古墳群では6基の古墳が調査され、又北側に対峙する津屋崎13号墳も調査された。しかしながらその都度、古墳の番号等に混乱が生じてきていた(第1表にゴシックで示す)。そこでここではまず、順次その成果をふりかえりながら問題点をみていきたい。

まず昭和47(1972)年度に津屋崎町が県費補助を受けて福岡県遺跡等分布地図(宗像郡編)の基礎資料として作成した台帳と地図がある。これは勝浦から始まり、途中若干の異同はあるが順次宮司まで番号が付けられ、新原・奴山古墳群では17～29号、35～37号墳と番号が付されている。この調査成果は公刊されていない。

県道改良工事で4基の古墳を調査した「新原・奴山古墳群」福岡県報 第54集 1977では町の分布調査に依拠し、その古墳番号を踏襲しているが、町の分布調査によって番号が付されていなかったものについては、町の遺跡番号が122号までであったことから、その後につづき123・124号の番号が与えられている。この報告書で125号墳とされたものは津屋崎町の分布調査による35号墳の誤りである。

福岡県報 第54集と同時に刊行された「福岡県遺跡等分布地図(宗像郡編)」1977では6桁の数字を使用し、上2桁35を津屋崎町の番号とし、下4桁で遺跡の通し番号を付し、各古墳群での番号を付記している。奴山古墳群として350020～350026(奴山1～7号墳)、350029～350049(奴山8～28号墳)、350051～350052(奴山29・30号墳)、350054～350055(奴山31・32号墳)があげられている。ここで問題となるのは奴山古墳群として練原および生家の古墳群も加えられ範囲が広がったこと、ここで10号、18号とされた古墳はとくに混乱が生じていることである。

「奴山5号墳」津屋崎町報 第2集 1978では福岡県遺跡等分布地図に拠り、奴山5号墳として報告されているが、この古墳は津屋崎町の分布調査では13号墳とされているもので大字勝浦字練原荘園1,174番地に所在したもので、同一のグループに属する可能性を必ずしも否定はできないが、後に述べるように今回は新原・奴山古墳群からは除外した。

「奴山古墳群」津屋崎町報 第3集 1981では福岡県遺跡分布地図に依拠して番号を付し、番号の付されていなかった古墳で調査を行なった2基については奴山32号墳につづけて、33・34号とし、さきに福岡県報 第54集で123・124号墳とされたものについては35・36号としている。

以上の対称表は第1表に示している。今回も当初は津屋崎町の分布調査番号、福岡県遺跡等分布地図のいずれかに準拠しようと考え、諸々の検討を加えたが、番号の付されていない古墳が多く、津屋崎町の番号では30番代に続いて120番代から番号がつくこと、また1988年度より調査が開始された須多田・在自地区圃場整備計画地域内の発掘調査に伴ない各古墳群で番号の付されていない新たな古墳が発見されたりすると、番号が各所に飛び、さらに混乱をきたす恐れのあることから、各古墳群ごとに通し番号を付するのが適切であると考えた。

ところで「福岡県遺跡等分布地図」では各古墳群によって番号が付されているが上述のとおり奴山古墳群としては広範囲にわたっており、又若干の混乱・誤り等があり、そのまま踏襲するには又適切とは考えられなかった。

そこで第1表・第2図に示すとおり大字勝浦字新原・月花、大字奴山字原・沖田・伏原・墓ノ下の同一低丘陵上に所在する古墳群のみを「新原・奴山古墳群」とすることとし、既に調査され消滅した古墳を1～6号墳とし、7号墳からは原則として西から東へ順次番号を付して、新たな古墳番号とした。

「新原・奴山古墳群」中間報告 津屋崎町報 第5集 1987では45号墳まで番号を付しておいた。その後の調査で、中間報告で17号墳としたものは地形測量の結果古墳か否かの判断に苦慮したので除外し隣接の番号の付されていなか

II. 調査の内容

第 1 表 新原・奴山古墳群一覧表

番号	種 別	所 在 地	津 屋 崎 町 分布調査番号 1972	福岡県遺跡等分布地図 (宗像郡編)1977			新原・奴山古墳群 県報第54集 1977		奴 山 古 墳 群 町報第 3 集 1981		備 考
1号墳	前方後円墳	大字勝浦字新原3736－1	17号墳	350029	奴山 8 号墳	津17	津屋崎17号墳		津17号墳	奴山 8 号墳	1976年調査・一部残存
2号墳	円 墳	大字勝浦字新原3736－2					津屋崎123号墳		津123号墳	奴山35号墳	1976年調査・消滅
3号墳	円 墳	大字勝浦字新原3764－2					津屋崎124号墳		津124号墳	奴山36号墳	1976年調査・消滅
4号墳	円 墳	大字勝浦字新原3770	18号墳	350033	奴山12号墳	津18	津屋崎18号墳		津18号墳	奴山12号墳	1976年調査・消滅
5号墳	円 墳	大字勝浦字月花 ^{3835 3833}								奴山33号墳	1980年調査・消滅
6号墳	円 墳	大字勝浦字月花3835								奴山34号墳	1980年調査・消滅
7号墳	方 墳	大字勝浦字月花 ^{3862－1 3862－2}	37号墳	350031	奴山10号墳	津32	津屋崎37号墳		津37号墳	奴山10号墳	1988年測量調査及び墳裾確認 トレンチ調査
8号墳	円 墳	大字勝浦字月花3860									1988年測量調査
9号墳	円 墳	大字勝浦字月花3848									1988年測量調査
10号墳	円 墳	大字勝浦字月花3847									1988年測量調査
11号墳	円 墳	大字勝浦字月花3841	23号墳	350032	奴山11号墳	津23	津屋崎23号墳	350032	津23号墳	奴山11号墳	1988年測量調査
12号墳	前方後円墳	大字勝浦字新原3720	22号墳	350030	奴山 9 号墳	生家 2号墳	津屋崎22号墳	350039	津22号墳	奴山 9 号墳	1988年測量調査
13号墳	円 墳	大字勝浦字新原 ^{3710 3718}									1988年測量調査
14号墳	円 墳	大字勝浦字新原3718									1988年測量調査
15号墳	円 墳	大字勝浦字新原3790－2	36号墳	350036	奴山15号墳	津36	津屋崎36号墳				1987年測量調査
16号墳	円 墳	大字勝浦字新原3790－1									1987年測量調査
17号墳	円 墳	大字奴山字沖田1456－1 (1ノ2)									1987年測量調査
18号墳	円 墳	大字勝浦字新原3790－1									1987年測量調査
19号墳	円 墳	大字勝浦字新原3790－2									1987年測量調査
20号墳	円 墳	大字勝浦字新原3773	19号墳	350034	奴山13号墳	津19	津屋崎19号墳	350034		奴山13号墳	1987年測量調査及び墳裾確認 トレンチ調査
21号墳	円 墳	大字勝浦字新原3783	21号墳	350037	奴山16号墳	津21	津屋崎21号墳	350037			「新原の百塔」、1985年測量調査 及び墳裾確認トレンチ調査
22号墳	前方後円墳	大字勝浦字新原 ^{3776・ 3777・ 3780・ 3784・ 3785・ 5744}	20号墳	350038	奴山17号墳	津20	津屋崎20号墳	350038			1985～'86年測量調査及び墳 裾確認トレンチ調査
23号墳	円 墳	大字勝浦字新原3777									1986年測量調査
24号墳	前方後円墳	大字勝浦字新原 ^{3747・ 3748・ 3751・ 3752－2}	35号墳	350035	奴山14号墳		津屋崎125号墳	350035		奴山14号墳	1987年測量調査及び墳裾確認 トレンチ調査
25号墳	円 墳	大字奴山字原1321	24号墳	350040	奴山19号墳	津24	津屋崎24号墳	350040			1986年測量調査及び墳裾確認 トレンチ調査
26号墳	円 墳	大字奴山字沖田1436－1									1986年測量調査
27号墳	円 墳	大字奴山字沖田1436－1									1986年測量調査
28号墳	円 墳	大字奴山字沖田1436－1									1986年測量調査
29号墳	円 墳	大字奴山字沖田 ^{1436－1 1449－1}									1986年測量調査
30号墳	前方後円墳	大字奴山字原 ^{1328・1329 1330・1336}	25号墳	350039	奴山18号墳	津22	津屋崎25号墳	350046		奴山18号墳	1986年測量調査
31号墳	円 墳	大字奴山2125									1986年測量調査 原・伏原の 小字境の畦畔上に立地する。
32号墳	円 墳	大字奴山字原1337－3									1987年測量調査
33号墳	円 墳	大字奴山字伏原 ^{1347・ 2125}									1986年測量調査
34号墳	円 墳	大字奴山字伏原1351	26号墳	350042	奴山21号墳	津26	津屋崎26号墳	350042			1986年測量調査
35号墳	円 墳	大字奴山字伏原1349	27号墳	350043	奴山22号墳	津27	津屋崎27号墳	350043		奴山25号墳	1986年測量調査
36号墳	円 墳	大字奴山字伏原1349	27号墳	350043	奴山22号墳	津27	津屋崎27号墳	350043		奴山25号墳	1986年測量調査
37号墳	円 墳	大字奴山字伏原1373	28号墳				津屋崎28号墳	350044			1986年測量調査
38号墳	円 墳	大字奴山字伏原1373									1986年測量調査
39号墳	円 墳？	大字奴山字伏原1373									墳丘消滅・石室残存
40号墳	円 墳	大字奴山字伏原1374－2	29号墳	350045	奴山24号墳	津29	津屋崎29号墳	350045			1986年測量調査
41号墳	円 墳	大字奴山字伏原1374－2									1986年測量調査
42号墳	円 墳	大字奴山字伏原1374－2									1986年測量調査
43号墳	円 墳	大字奴山字伏原1379									1986年測量調査
44号墳	円 墳	大字奴山字墓ノ下679									
45号墳	円 墳	大字奴山字墓ノ下679									
46号墳	円 墳	大字奴山字沖田1452									1987年測量調査
47号墳	円 墳	大字勝浦字新原3736－1									1987年測量調査
48号墳	円 墳	大字勝浦字新原3736－1									1987年測量調査

1. はじめに



第2図 新原・奴山古墳群分布図 (縮尺1/5,000)

II. 調査の内容

った古墳を17号墳とした。又その他に新たに番号の付されていない古墳3基があり、46・47・48号墳とした（付図1、第2図）。今後も墳丘が削平され石室のみが残存する古墳がいくらか発見されると思われるが、その際は49号から番号を追加すれば良いと考える。

昭和60（1985）年度の第1次調査においては基本杭の設置（基準点測量）と縮尺1/1,000の全体図作成を国際航業株式会社に委託し、それと併行して21・22・23号墳の雑木伐採と縮尺1/100の墳丘測量を行ない、21・22号墳については墳裾部周辺に若干のトレンチを設けて古墳の規模確認調査を行なった。

昭和61（1986）年度の第2次調査においては22号墳周辺の補足測量と、22号墳が前年度の調査で前方後円墳と考えられたので前方部とおぼしきところ2ヶ所にトレンチを設けて補足調査を行なうとともに、25～31号墳、33～43号墳の墳丘の全容をあらわにするまで伐採し、縮尺1/100の墳丘測量を行ない、25号墳については墳裾周辺に2ヶ所のトレンチを設けて規模確認調査を行なった。

昭和62（1987）年度の調査においては15～20号墳、24号墳、32号墳、46～48号墳の墳丘およびその周辺の全容をあらわにするまで伐採し、縮尺1/100の墳丘測量を行ない、20号墳については墳裾に1本、24号墳については墳裾に2本のトレンチを設定し、規模確認調査を行なった。

昭和63（1988）年度の調査においては7～11号墳、12・13・14号墳の墳丘およびその周辺の全容をあらわにするまで伐採し、縮尺1/100の墳丘測量を行ない、7号墳については墳裾に2本のトレンチを設定し、規模確認調査を行なった。又国際航業の作成した縮尺1/1,000の全体図は雑木を伐採して墳丘の全容をあらわにする前の状態の作図であったので縮尺1/100の墳丘測量図で修正を加え、又、既調査の6基分については5・6号墳の調査次に作成された地形測量図で11号墳が測量されていたこと、又1号墳は後円部が残っていたことから今回の20号墳及び24・47・48号墳とでその位置関係が把握されたので縮尺1/1,000に朱書きして図示した（付図1）。

以下各古墳について順次説明を加えよう。

2. 調査の内容

A. 既調査の古墳

1) 1号墳

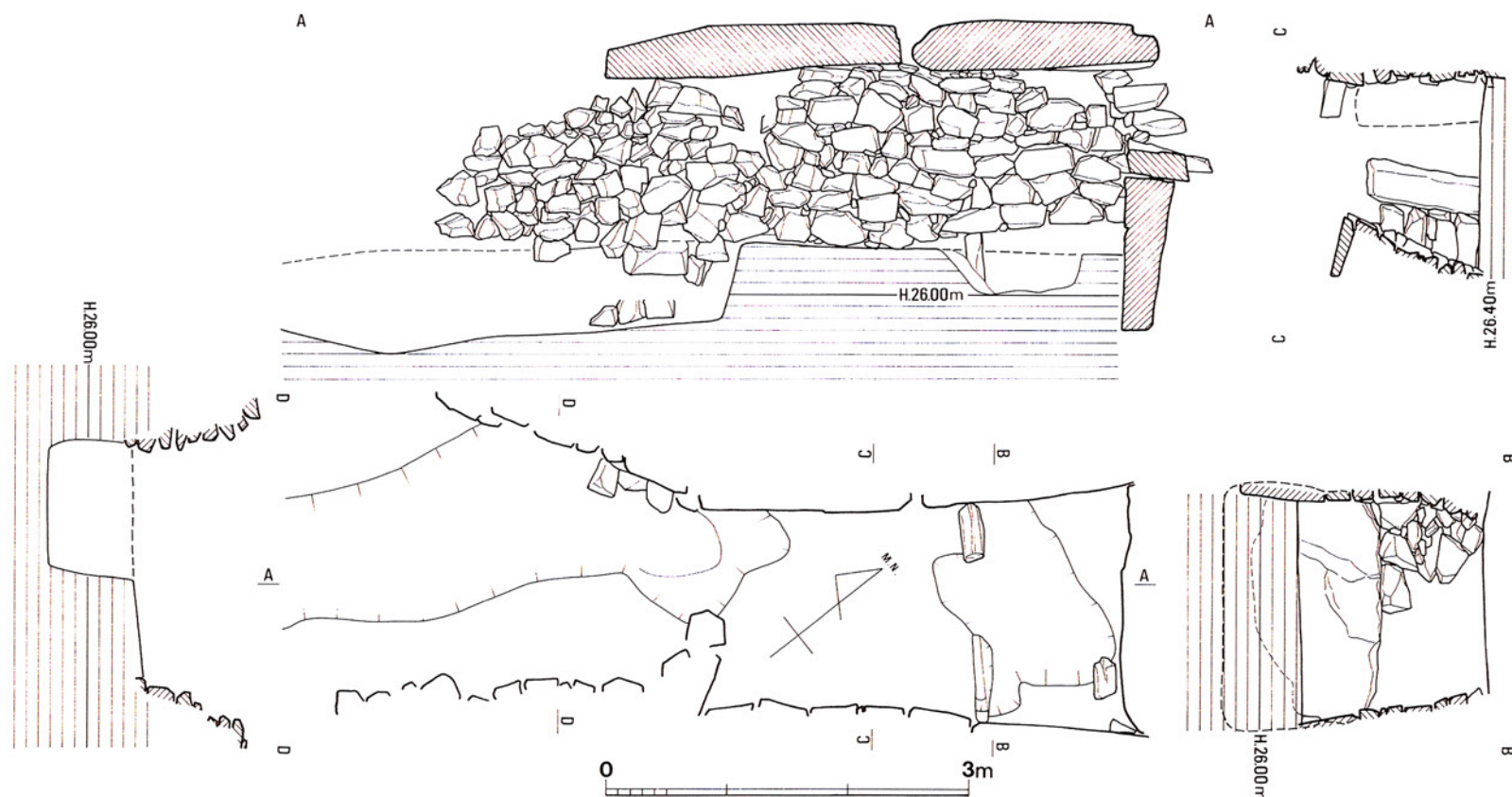
a. 墳丘（付図2、図版5 a・5 b・5 c）

新原・奴山の低丘陵の北西縁辺部に営なまれた前方後円墳であるが、1976年の調査の十数年前に果樹園等造成で既に墳丘の北半部が削平を受けていた。調査は主要地方道北九州・芦屋・福岡線の改良工事に伴う事前調査として行なわれ、報告書が刊行されている⁽¹⁾。主軸は北西に向き、全長は約50m、後円部径は約29m、前方部31m前後と復原されている。又墳丘はすべて盛土からなり、主軸上では後円部で3.2m、前方部で2.4mの厚さがあり、表面には葺石が存在する。高さは調査時で前方部約3.7m、後円部で約4.6mで当初は前方部で約4m、後円部で約5mであったと推定されている。又墳丘内には器台を中心とする須恵器破片が散在しており、墳丘上には須恵器大甕（KA・1）が底部を穿たれて埋置されており、須恵器把手付高坏片が石室前面の葺石間から出土している他、多くの須恵器片・土師器片が裾部葺石根石付近他から出土している。

b. 石室（第3図）

石室は古墳の主軸にほぼ直行して、後円部に設けられている。石室はほぼ南西に開口する単室の横穴式石室で、全

2. 調査の内容



第3図 1号墳石室実測図（縮尺1/60）

長6.5m、玄室内法は長さ約3.3m、幅は奥壁部で2m、横口部で1.65mとなり羽子板状の平面形を呈する。高さは中央部で1.5m強と低い。床は全面にわたって玉砂利が敷かれている。壁面および床面には赤色顔料が塗布されている。又奥壁の前面には3個の板石から成ったと思われる仕切石で区切られ、そのうちの一個が残り、14cm程突出している。この仕切石で区切られた屍床は幅1.1～1.2mで、床は仕切石前面よりも一段低かったと推定されている。天井は厚さ30～40cm、幅220～230cm、長さ200～225cmの巨石2枚からなる。横口部は左に偏して2本の柱状玄武岩が側壁に接して立てられ、袖を形成している。閉塞はこの袖石に長さ130cm、幅110cmの石をもたせかけ、念入な裏込が施されたと推定されている。横口部の前面には袖状の羨道側壁が接続し、先端では「ハ」の字状に開く。左壁は2.25m、右壁は2.9m、幅は横口部で1.3m、先端で2.3mである。羨道部では追葬時の第2次墓道が確認されている。これが左に偏しているのは初葬時に羨道部右側壁床面に供献された鉄製工具を意識したものと推定されている。

c. 出土遺物（第4・5・6図）

石室内は徹底的な盗掘を受けており、原位置を保っての出土例はないが、屍床内に甲冑の一部が置かれた形跡があり、羨道部の右壁沿いの初葬時床面上から供献された多数の鉄製工具があるとして下記のものが報告されている。⁽¹⁾

石室内

装身具 ガラス小玉

工 具 手斧1

武 具 衝角付冑（小札鋌留式）1 鋌片 2セット分 短甲（鋌留式） 小札 頸甲 肩甲

武 器 直刀 剣 短刀 短剣 鉄鏃 鹿角刀装具片

馬 具 鐙片？

その他 鋌留金具片 縁金具片？ 鉄地金銅張金具片 不明棒状銅製品 糸切底土師器

石室羨道部

工 具 鏝（3種） 錐（2種） 鉋（3種） 鑿（2） 鉄鉗（1） 不明大形鋸状鉄器（1個体片）

その他 木心鉄張金具（1）

II. 調査の内容

墳丘中

土 器 須恵器 器台片 土師器片

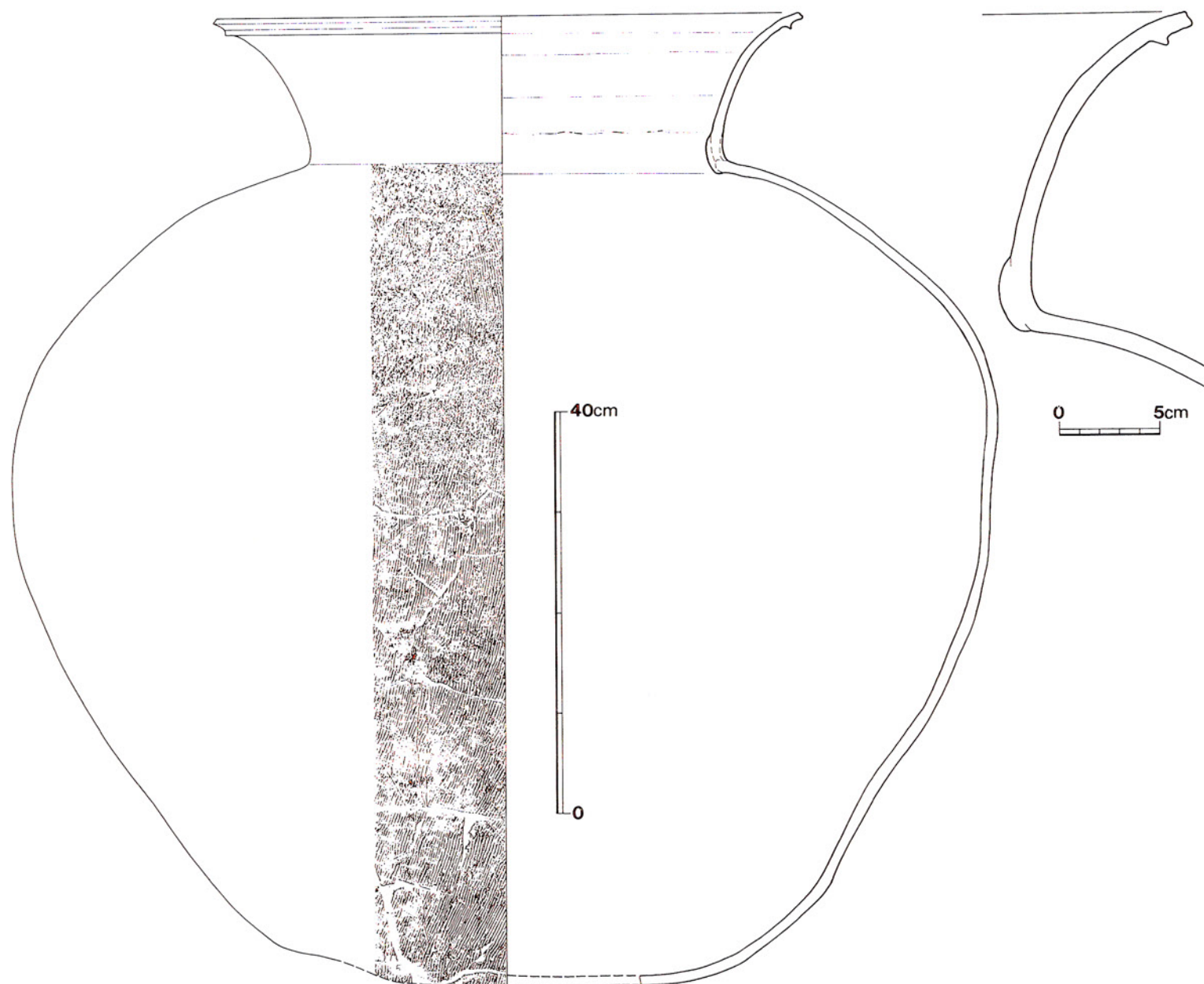
石 器 石斧

墳丘外表

土 器 須恵器 把手付高坏 1 大甕 2 甕 壺 高坏

土師器片

これらのなかで図示されたものは墳丘外表出土の須恵器把手付高坏のみであるが、調査を担当した石山勲氏より石室羨道部出土の鉄製工具類の図面の提供を受けたので第6図に示した。又墳丘上に埋置されたKA 1とされた須恵器大甕はほぼ完形に復原されており、1号墳築造の時期を示す好資料と考えたので実測して図示した（第4図）。

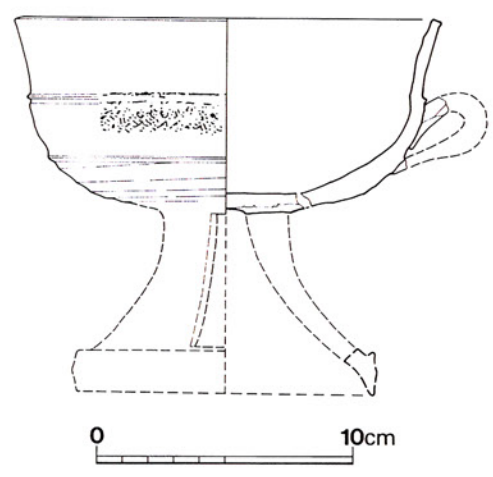


第4図 1号墳後円部墳丘出土の須恵器大甕実測図（縮尺1/6・1/3）

まず羨道部に供献された鉄製工具から述べよう。1～3、9・10は鑿（3種）、4・5・6は鉋（3種）、7・8は錐2種、11・12は鑿（2）、13は鉄鉗（1）、14は不明大形鋸状鉄器（1個体片）とされたものとする。15は石室内出土の鉄斧である。16は4号墳石室内出土の鉄斧と思われる。14は鋸としては厚味がありすぎていかなる用途に用いるのかはわからないが、他の鉄器は11・12・13が鍛冶道具で、他はすべて木工具といってよからう。

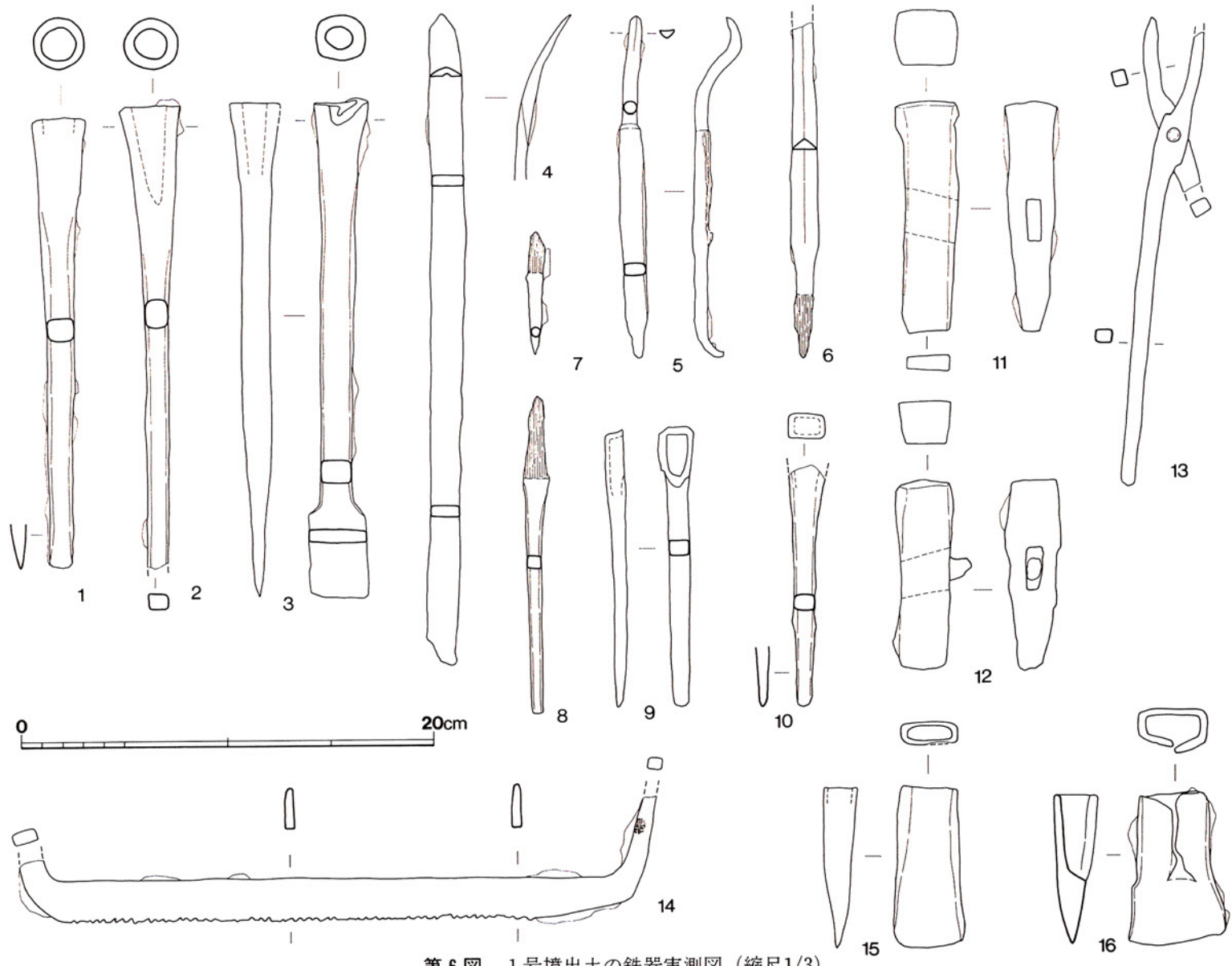
墳丘上に埋置された須恵器大甕（第4図）は底部を大きく穿ち、中に石を置いて据え置かれていたものである。復原高は96cm、口径は56.8cm、胴部最大径は97.2cmを測る。頸部内面はへラナデ、口縁内面から外面の肩まではヨコナデ、胴部外面は平行線タタキ、底部近くでは平行線タタキが交叉するが底部は表面がいくらか磨かれている。胴部の

内面は青海波を丁寧になで消している。又底部近くで数ヶ所焼きひずみ状の凹みが認められるが、これは窯内に置く際に固定した焼台を兼ねた石等による凹みの可能性が強い。口縁部は下端が外側にあり、口縁端部はほぼ直でシャープである。また口縁直下にシャープな三角凸帯1条をめぐらしている。灰黒色を呈するが頸部内面および外面の上半は灰緑色の自然釉がかかる。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬質で極めて良好である。この大甕は福岡県甘木市古寺6号土壙墓供献の大甕⁽²⁾あるいは同じく甘木市の小田茶臼塚古墳の前方部より出土した大甕⁽³⁾等⁽⁴⁾に比し、器高に対して胴部最大径が大きく、つまりややすづまりといえる。口縁形態およびややすづまりという要素等からみて上記2者より後出するものと考えられる。陶邑⁽⁵⁾における中村浩氏の編年⁽⁴⁾に対応させるとI型式3段階に比定されよう。第5図に図示した須恵器把手付高坏もこれと同時期のものと考えてよい。したがって橋口の年代観によれば、5世紀前半代の後半に位置付けられる。以上のことからこの古墳の築造の時期は5世紀前半代の後半であり、追葬を考慮しても5世紀中頃前後のものと考えて大過なからう。出土の鉄器類をみてもこの年代観と矛盾はない。



第5図 1号墳丘出土高坏実測図（縮尺1/3）

- 註1 福岡県教育委員会「新原・奴山古墳群」福岡県報54 1977
2 甘木市教育委員会「古寺墳墓群」甘木市文化財調査報告 第14集 1982
3 甘木市教育委員会「小田茶臼塚古墳」甘木市文化財調査報告 第4集 1979
4 中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」大阪府教育委員会『陶邑』III 大阪府報30 1978



第6図 1号墳出土の鉄器実測図（縮尺1/3）

II. 調査の内容

5 橋口達也「池の上出土陶質土器の編年」甘木市教育委員会『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告 第5集 1979

橋口達也「北部九州における陶質土器と初期須恵器——近年の成果を中心として——」甘木市教育委員会『古寺墳墓群』II
甘木市文化財調査報告 第15集 1983

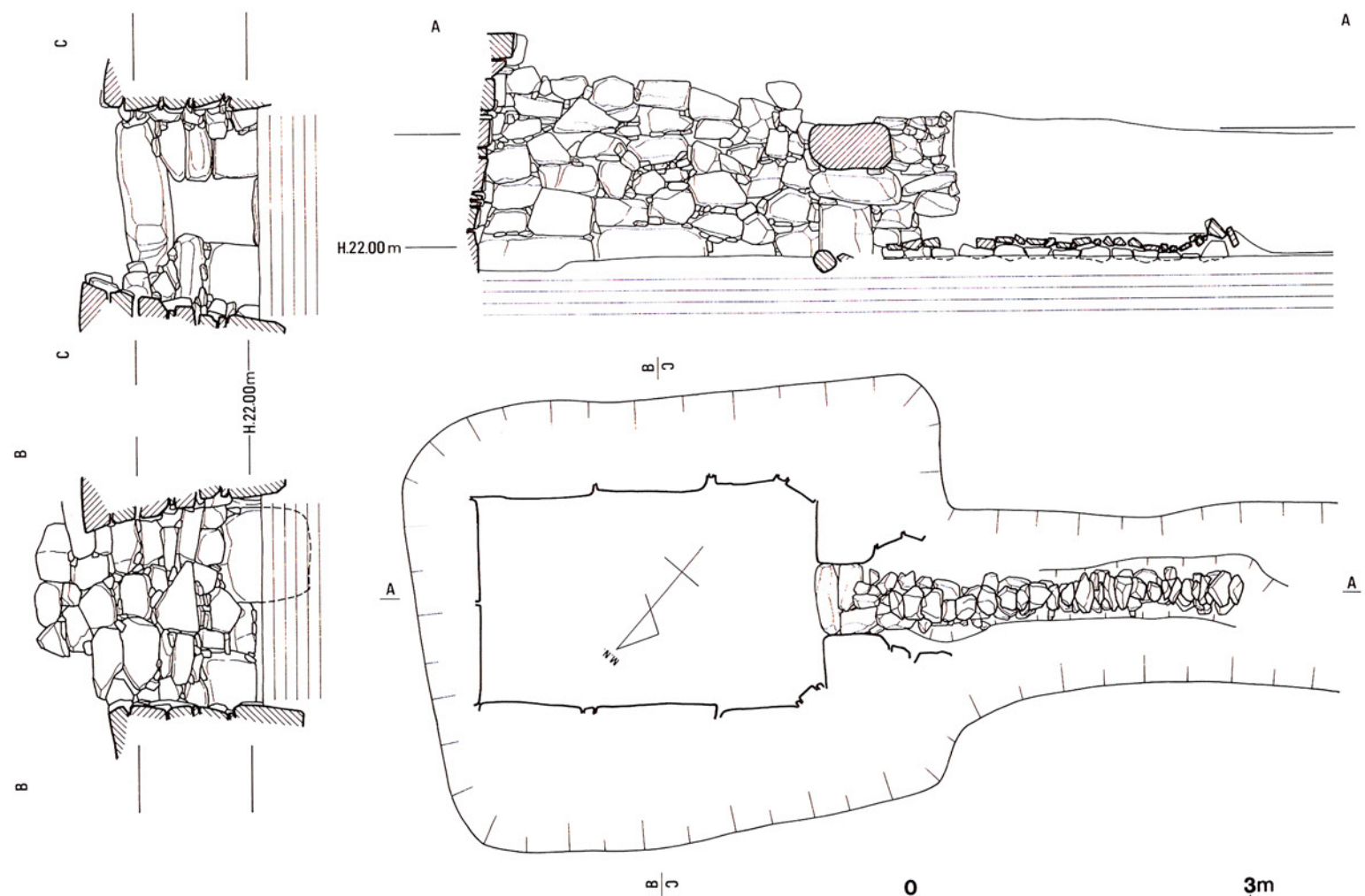
2) 2号墳

a. 墳 丘 (付図3、図版5d・6a)

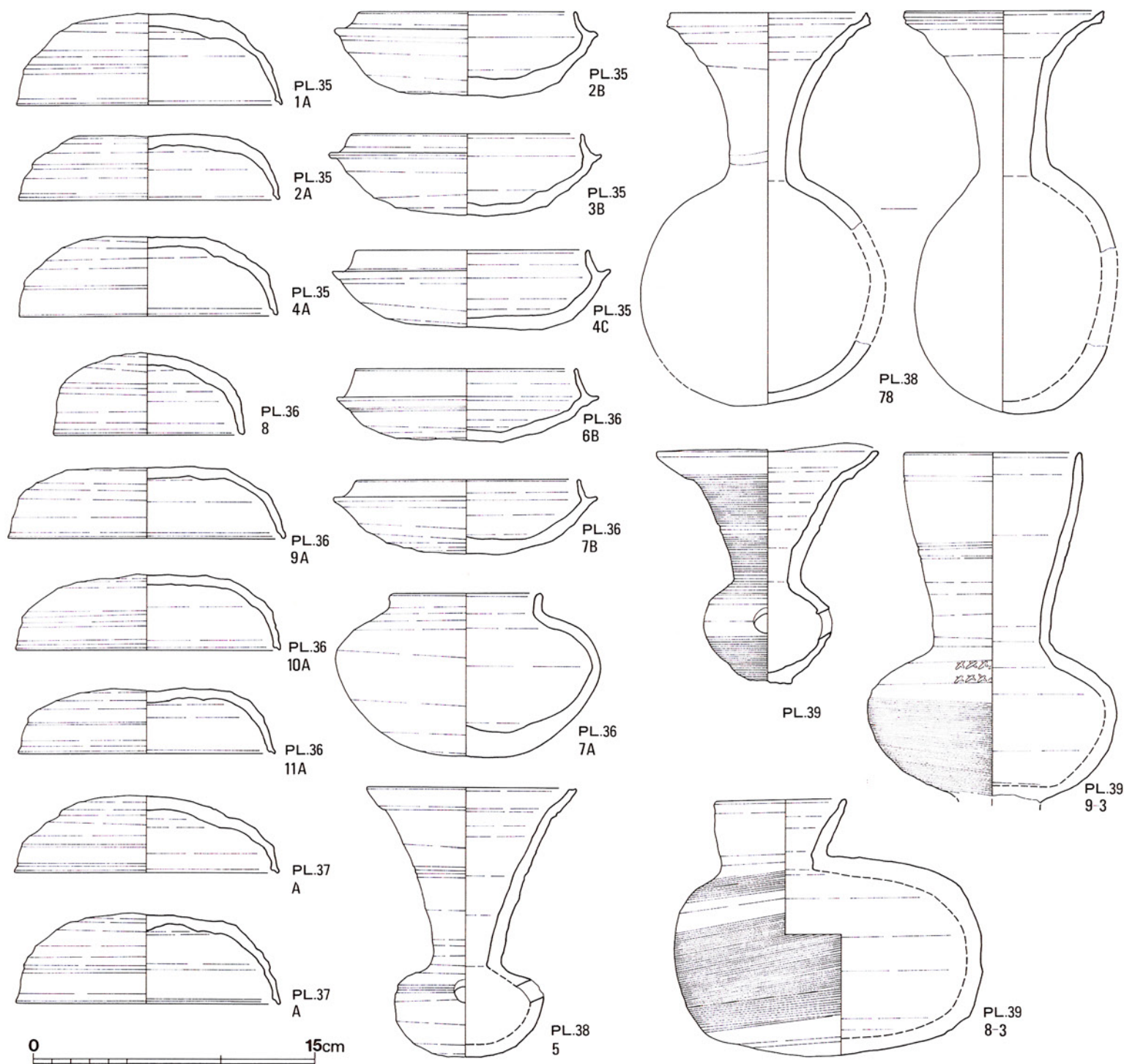
1号墳の南西約20mのところに位置する円墳で、同じく県道改良工事に伴って調査が行なわれた。⁽¹⁾ 発掘前のみかけの墳丘規模は15×8mの長円形を呈し、南側からのみかけの高さは約2.7m、発掘の結果は内径13.3m前後の墳丘の北西側の大部分が削平されていることが明らかになった。周溝が存在するが溝は浅く、幅は南東側で2.0m、北側ではやや広く2.5m程である。

b. 石 室 (第7図)

墓壇は4×4.8mの不整長方形を呈し、地山を1.6~1.95mの深さに掘り、その墓壇底に石室を構築している。したがって石室上部を失なっているが残存状態は比較的良好である。石室はほぼ南西に開口する単室の横穴式石室で長さ2.95m、幅は奥壁部で1.8m、前壁近くで2m、前壁両隅角は直角とならず前壁で1.6m、現存の高さは2mである。横口部は高さ0.7m、幅は上部で0.5m、下部で0.6mと狭小である。これに幅1mでやや外開きの天井石が架構されない羨道部が続く。墓道は幅1.6m前後、深さは羨道前面で1.3m、現存長6.2mを測る。なお床面には横口部仕切石外側から長さ約3.4mにわたる排水溝が付設されている。幅4~10cmと狭く、蓋石が置かれている。初葬時の閉塞根石あるいは羨道部敷石と思われる平石上に、最先端の側石が置かれていることから、この排水溝は追葬時に設置されたものとみなされると報告されている。



第7図 2号墳石室実測図 (縮尺1/60)



第8図 2号墳出土土器実測図（縮尺1/3）

c. 遺物

石室内は徹底的に盗掘を受けて原位置での出土品はない。墳丘内からは南側裾部盛土中に地山から10数cm上位から2つの土器群が原位置を保って出土している。両群ともに蓋を被せて東西方向に2段3列に並置されている。1群（A群）は須恵器蓋坏を主体とし、短頸壺と土師器大形埴があり、他の1群（B群）は須恵器蓋坏のみである。

墳丘外からは先の土器群の南西約2mの裾部から、供献されたとみられる須恵器高坏・甗・台付壺等（C群）が出土している。北側周溝の外側肩部からは大形甗、周溝中からは須恵器高坏2個体分片、甗片等がある。墓道内からは須恵器無蓋高坏片、台付甗片、台付長頸壺片、土師器高坏・壺が出土している。

その他出土品に関しては下記のとおりであるが、以上の土器については調査担当者より図面の提供を受けたので図示する（第8図）。

石室内

- 装身具 碧玉管玉1 水晶丸玉1 ガラス大玉2 ガラス丸玉1 ガラス小玉 土製小玉5
武器 鉄鏃

II. 調査の内容

その他 不明鉄器片

土 器 須恵器 甕片

墳丘内

土 器 A群 須恵器 蓋坏3セット 短頸壺1 同 蓋1 坏(身)4 坏(蓋)1

土師器 大形坏2

B群 須恵器 蓋坏6セット 赤焼き 坏1

墳丘外裾部

土 器 C群 須恵器 坏(蓋)1 坏身1 高坏1 長頸壺1 甕1 短頸壺1 同蓋1

土師器 大形坏?2 高坏 高坏脚部2

北側周溝 須恵器 甕2 坏1 有蓋高坏1 甕

墓道

土 器 13-2層 須恵器 無蓋高坏1 9-3層 須恵器 台付長頸壺 土師器 高坏 1 埴 1

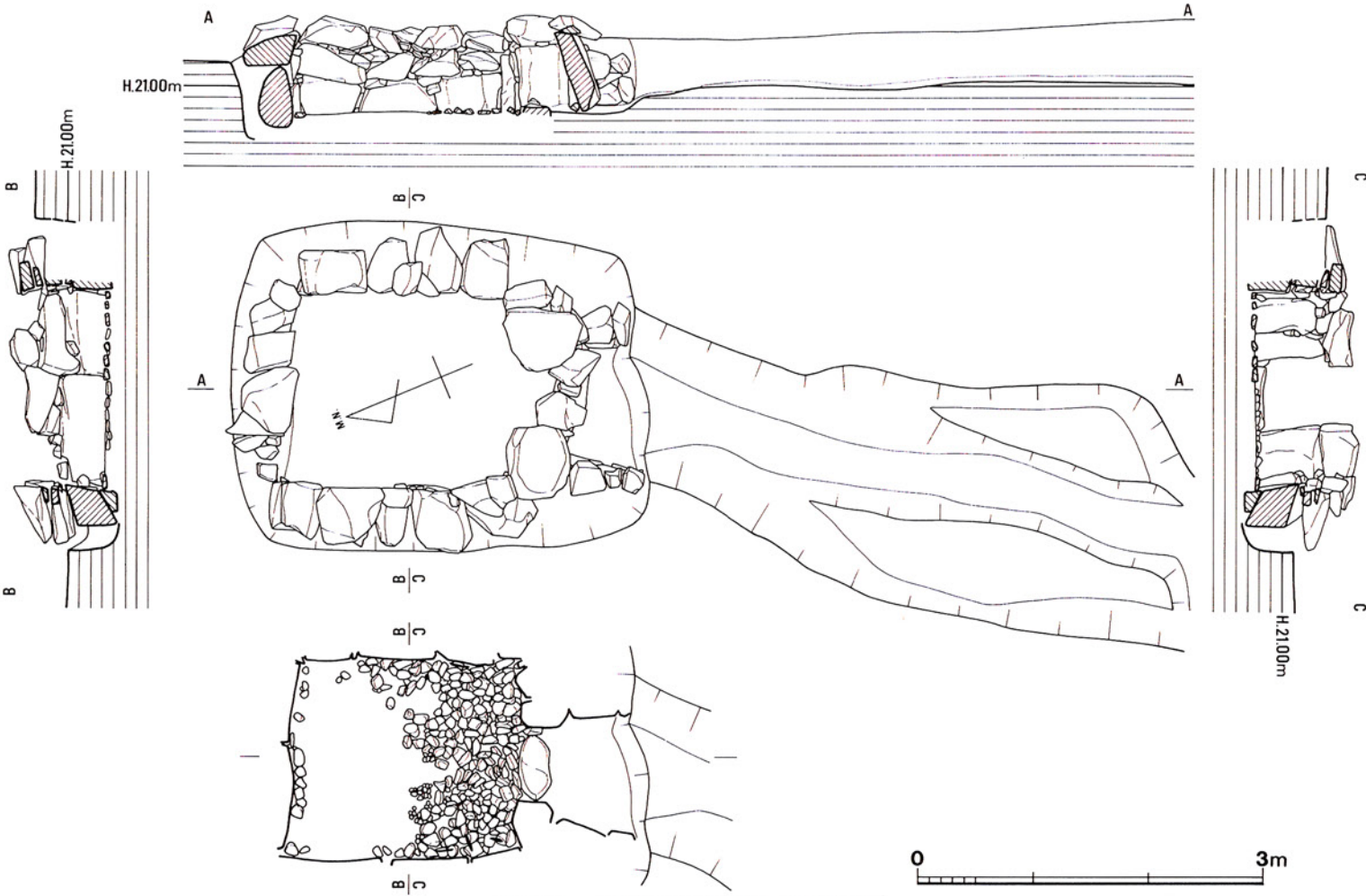
8-3層 須恵器 平瓶 1 赤焼き 甕 1 他 須恵器 台付甕 1

土器に付した番号は福岡県報54 1977の図版に掲載された番号を示しているので参考にされたい。2号墳の築造時期は墳丘内に供献されたA・B両群から報告者は6世紀中頃前後に比定している。

註1 福岡県教育委員会「新原・奴山古墳群」福岡県報54 1977

3) 3号墳

1・2号墳と同じく県道改良工事に伴って調査が行なわれた⁽¹⁾。墳丘は完全に削平されており、石室周辺部のみが辛うじて幅広の畦として残され、小さな石祠が建てられていた。周溝が残存しており、石室の中心を古墳の中央と仮定して径13.5m程の円墳と推定されている。



第9図 3号墳石室実測図(縮尺1/60)

a. 石 室 (第9図、図版6b)

ほぼ南西に開口する単室の横穴式石室である。墓壙は長さ3.6m、幅2.9mの隅丸長方形を呈する。上部をかなり削平されており深さは0.7m程である。石室は長さ1.96m、幅は奥壁で1.68m、前壁部で1.56mと方形に近く、現存高は0.8m。床面には比較的大き目の円礫が敷かれており、又主軸沿いの幅約50cmの間には角礫が用いられている。横口部の幅は0.5~0.6mで床に仕切石を置き、現存高は0.8mを測る。閉塞は1枚の板石を主とし、間隙を小石で充填している。羨道は長さ0.5~0.8mで先端で幅1m強、墓道は石室主軸からやや西に斜交しており、幅1.3m~2.2mを測り、石室床面よりも一段高い。

b. 遺 物 (第10図)

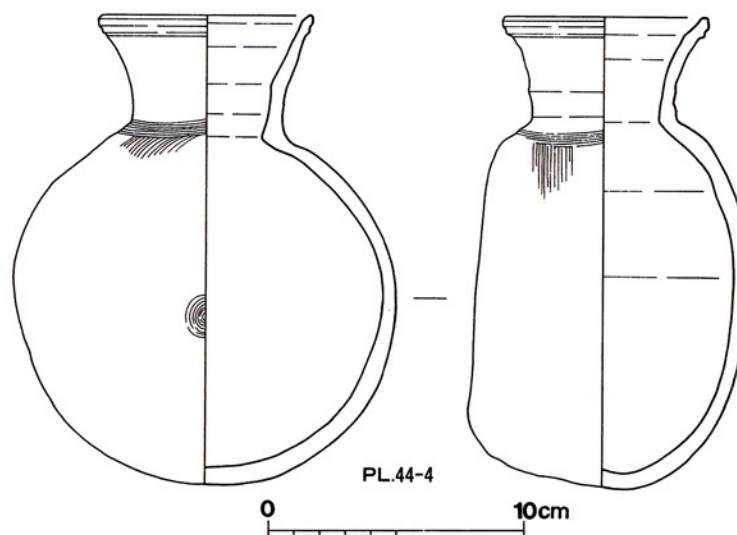
石室内と墓道より下記のと通りの遺物が出土している。

石室内

装身具 銀環 1 瑪瑙勾玉 1 管玉 2 水晶丸玉 1
 ガラス丸玉 ガラス小玉
 工 具 鎌 2 刀子 2
 武 器 短刀 1 鉄鏃
 その他 縁金具?
 人 骨

墓道

土 器 須恵器 高坏 1 提瓶 2 変形甕 1
 土師器片



第10図 3号墳出土土器実測図 (縮尺1/3)

以上の遺物のうち墓道より出土した須恵器提瓶の図面を調査担当者より提供されたので図示する(第10図)。報告者は6世紀後半代に比定している。

4) 4号墳

a) 墳 丘 (付図3、図版6c)

1・2・3号墳と同じく県道改良工事に伴って調査された。⁽¹⁾発掘前は高さ約1.9m、一辺16m前後の方形墳のような外観を呈していたが、発掘の結果は浅い周溝をめぐらす径15.3mの円墳であることが明らかになった。

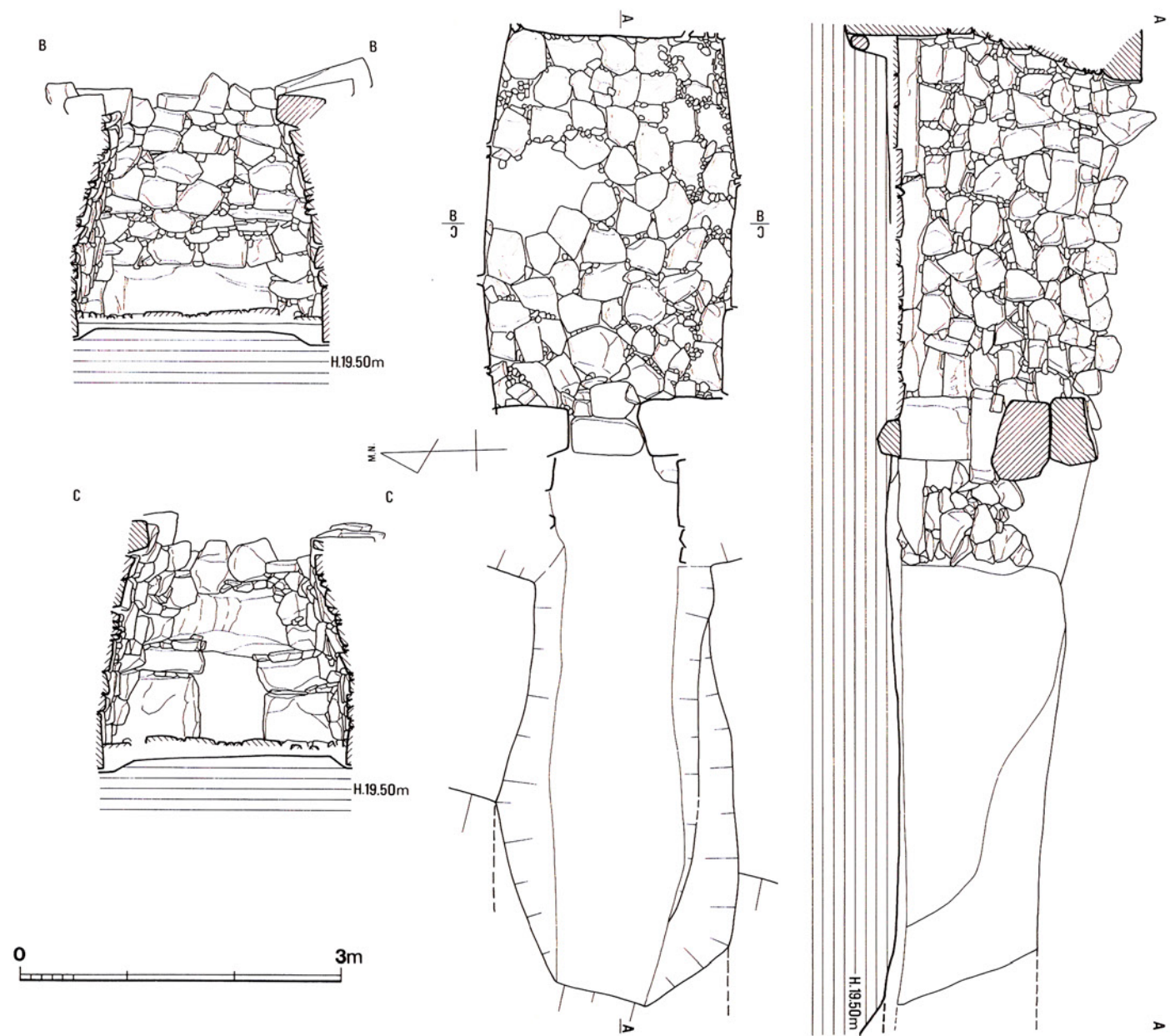
b) 石 室 (第11図、図版6d)

ほぼ西に開口する単室の横穴式石室である。石室は地山を約1.6m掘った墓壙底に構築されている。石室は長さ3.56m、幅は奥壁で2m、中央部で2.3m強、前壁部で2.1m強と少し胴張りとなる。現存高は2.25mである。石室の床面には下層に平石を敷き、この上面に円礫を置いている。前壁部袖石間には仕切石を置き、横口部は幅が上部で0.5m、下部で0.6m、高さは0.85mである。羨道部は天井石が架構されず、幅1.1m、長さ1m程のもので、墓道は現存長4.1m、幅は取付部で1.7m弱、先端部で2.1mとなっている。深さは取付部で1.6mを測る。

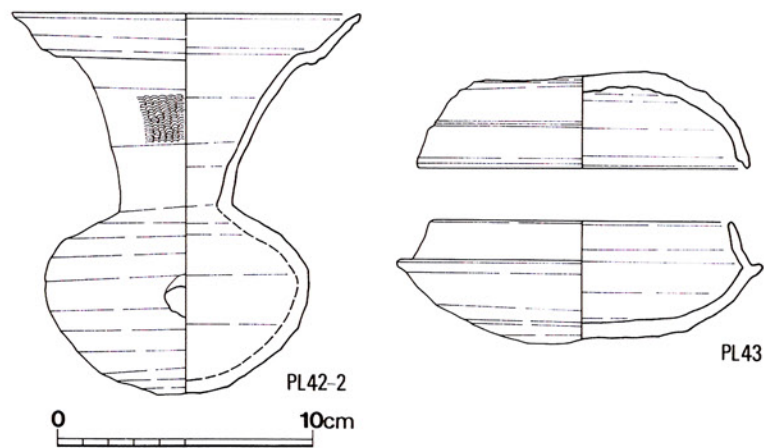
c) 遺 物 (第12図)

遺物は石室内の前壁左隅角敷石上から鏡板付轡が原位置を保って出土しており、又墳丘中から長さ約3.4mにわたってほぼ東西方向に並地された土器群が出土している。又墓道南側肩部からも一群の土器が出土しており。これは追葬

II. 調査の内容



第11図 4号墳石室実測図（縮尺1/60）



第12図 4号墳出土土器実測図（縮尺1/3）

時のものと考えられている。出土遺物は下記のとおりである。

石室内

- 装身具 金環1セット ガラス丸玉 土玉7
- 工 具 刀子3 手斧1
- 武 器 直刀片 鉄鏃片（2タイプ以上）
- 馬 具 素環鏡板付轡1

その他 鉄環？ 鋌留鉄板片 縁金具片？ 須恵器
墳丘内

土 器 須恵器 坏（蓋）1 有蓋高坏5 同蓋2 小形有蓋高坏1 甕3 壺1 脚付壺2 赤焼き 高坏1
墓道肩部 須恵器 有蓋高坏1 高坏脚部1 台付壺1 坏（蓋）3 坏（身）3 撮付蓋1
土師器 甑片1 高坏片 甕片
盛土中 石 器 石斧

これらのうち出土土器の図面を調査担当者より提供されたので図示する（第12図）。報告者は2号墳出土土器よりも

若干後出するものと考えている。

註1 福岡県教育委員会「新原・奴山古墳群」福岡県報54 1977

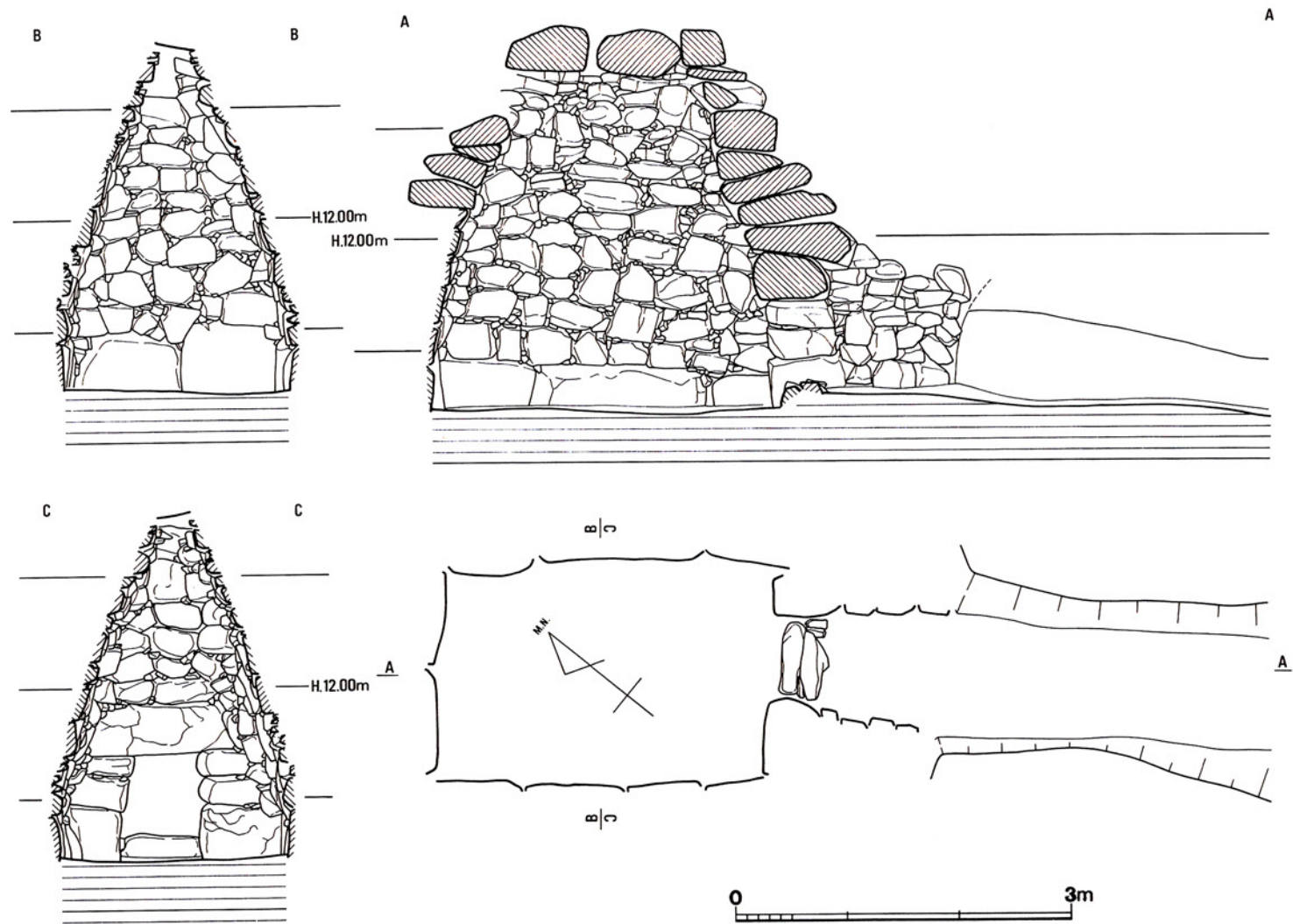
5) 5号墳

a. 墳丘 (付図4、図版7a・7b・7c)

宗像農業協同組合によるカントリー・エレベーター建設に伴って調査が行なわれた⁽¹⁾。調査時より以前にみかん園造成等で墳丘北東側が削平されており、発掘前のみかけの墳丘規模は北西～南東で径約13m、高さは北西側で約2m、南東側で3m強であった。発掘調査の結果、古墳築造にあたって地山整形がなされ、旧表土がうすく削られている。墓壙はこの面から掘りこんでいる。墳裾で測った径は約13m、石室構築天井石上にさらに1m程の盛土が存在したとして当初の高さは3～4mと推定されている。

b. 石室 (第13図)

南東に開口する単室の横穴式石室ではほぼ完存していた。墓壙は長さ5.1m～5.4m、幅約3.7m、深さは約1.8mを測る。石室は長さが主軸で3.1m、左右壁長2.9m、幅は中央部で2m、奥壁で1.85m、前壁で1.9mを測る。天井石までの高さは墓壙床面からは3.1m、推定床面からは2.9mである。横口部は床面で幅0.7m、上部で0.6m、高さ0.7mを測り、仕切石には2個の石を用いている。羨道は長さ1mで、幅は横口部で同一幅で始まり、墓道側で1mとやや広くなる。墓道は5m以上あり、幅は上端で1.4m、床面で1m程、深さは1～1.2mを測る。



第13図 5号墳石室実測図 (縮尺1/60)

II. 調査の内容

c. 遺物

石室内は徹底的に荒らされており原位置を保つものはない。刀子4点、須恵器蓋等が出土している。

墓道からは須恵器蓋坏、脚台付短頸壺等が出土している。

墓道右の墳丘中からは須恵器44個、土師器10個体が出土している（図版7d・8a・8b）。又墓道左の墳丘中から須恵器坏・蓋・高坏・大形甕・直口壺および茶褐色～赤褐色を呈する須恵器高坏等が出土している。

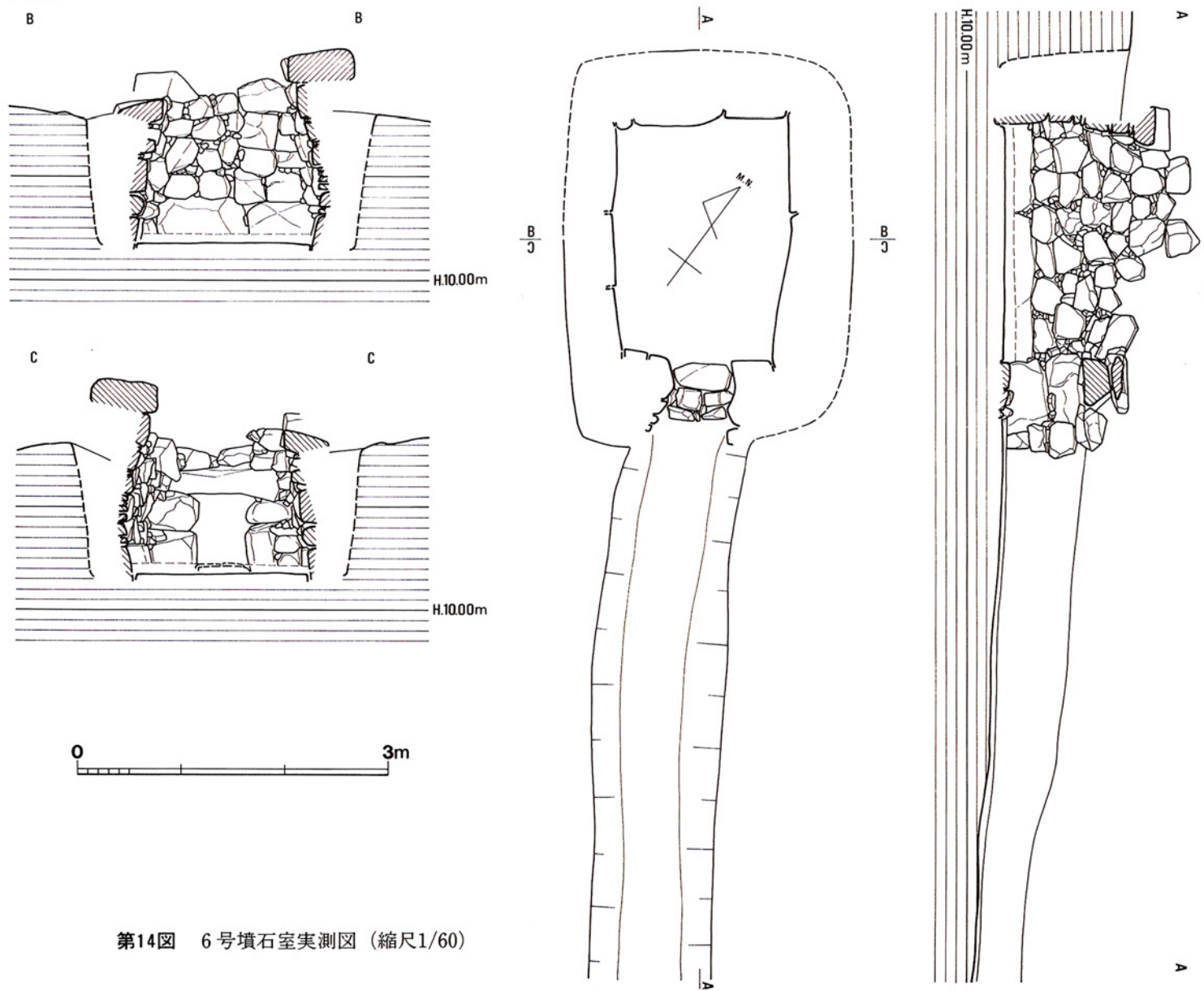
これら墳丘中より出土した土器群は古墳築造に伴う祭祀に供献されたものであることはいままでもないが、須恵器の皮袋形土器もしくは高坏と埴の組みあったような土師器等があり興味深い。これらの土器群について報告者は6世紀後半に比定されている。

註1 津屋崎町教育委員会「奴山古墳群」津屋崎町文化財調査報告書 第3集 1981

6) 6号墳

a. 墳丘（付図3、図版8c）

5号墳と同じく宗像農協のカントリー・エレベーター建設に伴って調査が行なわれた⁽¹⁾。5号墳の南17mのところに位置する。発掘調査前のみかけの径は約10m、高さ1.7m程であったが、発掘の結果は古墳築造にあたって旧地表を削って整形が行なわれている。径は約10.6m、当初の盛土の高さは2m程と推定されている。墓道の左右両側の墳丘中からは須恵器・土師器等の供献土器が出土している。又墓道の西側墳裾部は幅2.7m、深さ10～20cm程の溝状部分がある。



b. 石 室（第14図、図版 8 d）

南東に開口する単室の横穴式石室である。墓壙は3.5m×2.5m程の隅丸長方形を呈する。石室の長さは右側壁で2.4m、左側壁で2.15m、幅は奥壁で1.65m、前壁で1.45mの羽子板状に近い長方形を呈する。石室の高さは1.7m程残存していたが、当初の高さは床面から2.5m程に推定されている。横口部は幅0.65m、高さ0.7mをはかる。横口の前面には右側壁に1列、左側壁に2列の石を積みあげて短い羨道をつくっている。墓道は5.5m以上で上端幅1.2m、床面幅0.6cm前後、深さ0.4～0.8mを測る。

c. 遺 物

遺物は石室内より土玉2、耳環1、刀子2、刀2以上、鏃4以上、青銅鈴1、須恵器脚付甕等の破片が出土している。

墓道からは須恵器高坏脚部片および周溝中のものと接合する甕の破片等がある。

墓道の石墳丘中からは須恵器12点、土師器1点が出土した。これらは完形品と破碎されたものが混在しており、又中に大小の石3個があり、この石で土器を破碎した可能性を報告書は述べている。

墓道の左墳丘からは須恵器3個体分が原形をとどめぬ程に破碎されて出土している。

溝状部分からは須恵器が14点出土しているが、ここの土器もかなり破碎を受けており、墓道両脇の破碎された土器と接合する破片が3個分あったと指摘されている。

報告者はこれらの土器からこの古墳の年代は6世紀後半代に比定している。

註1 津屋崎町教育委員会「奴山古墳群」津屋崎町文化財調査報告 第3集 1981

B. 今回調査の古墳

1) 7号墳

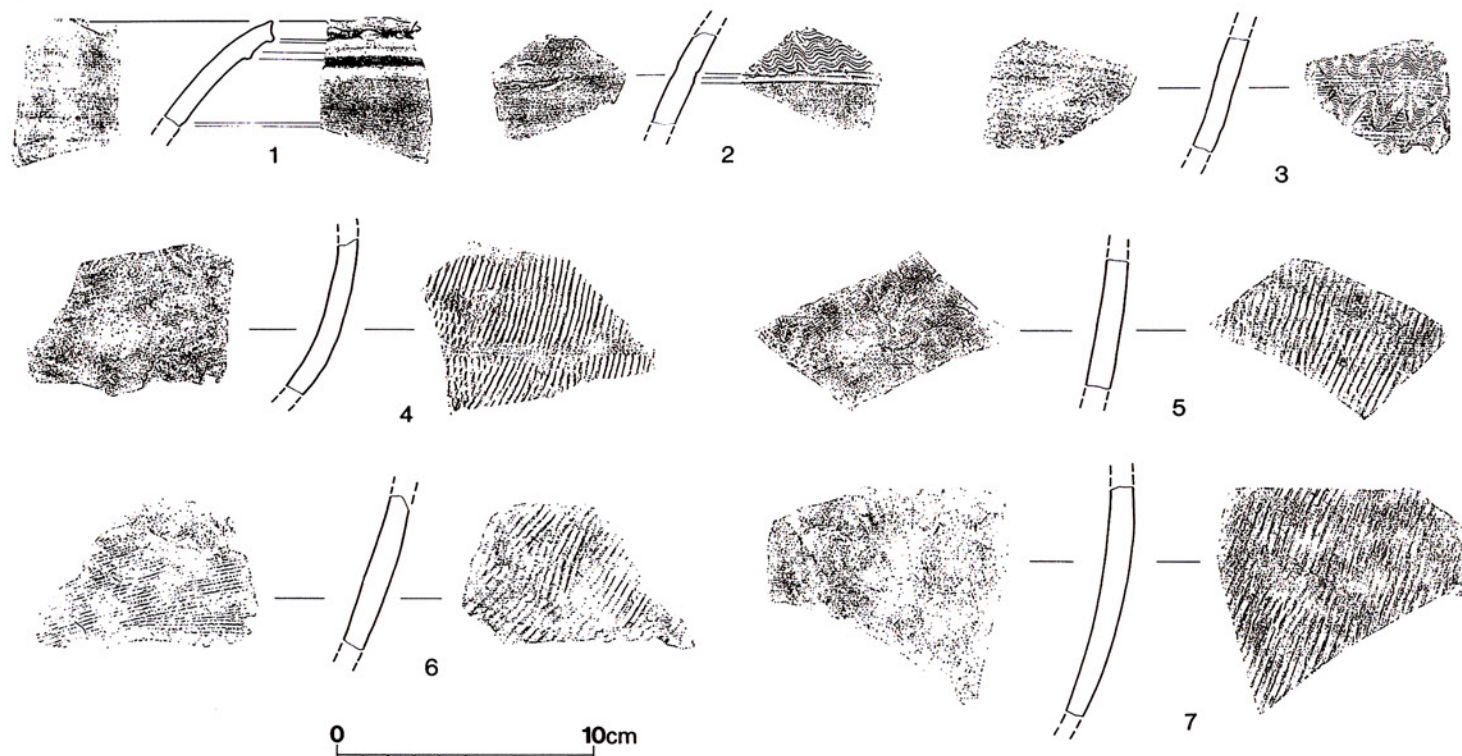
a. 墳丘の調査（付図5・図版16a・16b・16d）

新原・奴山古墳群のある低丘陵の西端に位置し、水田面との比高差は8.5～9m程である。雑木の伐採焼却後の古墳はみかけ状低い方墳状を呈していたので西南および東北の墳裾に接して幅2mのトレンチを設置して発掘したが、耕作土を除去するとただちに地山があらわれ、溝等は検出されなかった。西南部の畑の高さはトレンチ上部で7.607m、地山の高さは墳裾部で7.472cm、トレンチの西南端で7.360mを測る。東北部の畑の高さは付図5に示すように8.211m、および8.303mで、トレンチ内の地山の高さは8.0m前後を測る。古墳の側面の表土下には葺石と思われる石が観察されるが、東北部の石の基底部は8.4m前後、西南部の石の基底部は8.0m前後で両者ともに約50cmの高低差があり、一部削平を受けている可能性は否定できないが、もともと方墳であったといえる。墳丘の規模は東北－西南の裾部で約24m、上端で21.7m程、東南－西北の裾部で23～24m、上端で20.5m程を測る。墳丘の最高点は10.209mでさきの墳裾の高さからいえば、2.2～2.7m程の高さとなるが、若干の削平を考慮して本来は2～2.5m程の高さの低墳丘の方墳といえよう。

墳丘の中央部は450×350cm程の長円形に深さ25cm程凹み、主体部の蓋石が落ちこんだかのような観を与える。そしてこの中央の凹部には角礫があり、又墳丘の端と崖面にも角礫が多いが、他の墳丘表面には玉砂利が敷きつめられており、墳丘の上面が削平を受けたとは思われない。

墳丘の表面からは須恵器片（第15図）、鉄斧1、琥珀原石等が散布してした。須恵器は初期須恵器の範疇に属するも

II. 調査の内容



第15図 7号墳墳丘表採土器実測図（縮尺1/3）

のであり、したがって方墳があってもおかしくはないが、他の古墳とは異質であり、墳丘も低く平らで、規模は比較的大きなこと、および当時の海に面しており、又墳丘上に鉄斧、琥珀原石等が散布するなど祭祀的な要素があり、新原・奴山古墳群築造に際しての祭壇を兼ねた古墳かとも考える。

b. 墳丘表採の遺物（第15・16図）

須恵器（第15図）

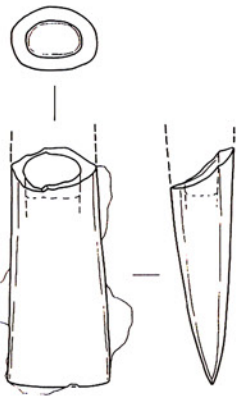
1は甕口縁片である。口縁端部はほぼ直で、まん中でやや凹む。口縁直下には三角凸帯をめぐらし、頸部には沈線と思われる部分がわずかに残っている。内外ともにヨコナデである。灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は硬く良好。

2は甕頸部片と思われる。沈線があり、その上位にやや粗い波状文を施している。内面はヨコナデ、外面はナデ。灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は硬く良好。

3は器台の破片と思われる。外面には単位9条の繊細な波状文が3列施文されている。内面はナデ、外面はカキ目の上から波状文を施している。内面は灰黒色、外面は黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は硬く良好。

4は甕胴部の破片と思われる。内面は青海波を丁寧にナデ消し、外面は平行線タタキを一部ナデ消した部分が認められる。灰黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

5は甕胴部の破片で内面は青海波をナデ消し、外面は平行線タタキを施した後一部ナデを加えている。灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は硬く良好。



第16図 7号墳墳丘表採鉄斧実測図（縮尺1/3）

6は甕胴部の破片と思われる。内面は下半にハケ目が施され、上半はナデ、外面は平行線タタキである。灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は硬く良好。

7は甕胴部の破片と思われる。内面は青海波をナデ消し、外面には平行線タタキが残る。灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は良好。

以上の須恵器は1の甕口縁は陶邑TK87、TK305窯出土品等に同様の器形のものがあ⁽¹⁾り、又2の波状文の粗いところなどは甘木市池の上および古寺等の出土品にも共通した要素が認められる。又甕胴部の内面の青海波をナデで、丁寧に消す手法等も古い要素である。以上のことからこれらの須恵器は陶邑編年のI型式1段階および2段階頃に比定され、5

世紀前半代に位置点けて大過なからう。新原・奴山古墳群の多くが墳丘内に須恵器等を供献していることから考えれば、これらの須恵器も後世に7号墳の縁辺部が削られた際に出土して墳丘上に置かれたものと考えられ、古墳築造の一端を示すものと考えてよからう。

鉄斧（第16図）

付図5に示すように墳丘東隅近くの表面から出土した。袋部を一部欠失しており現存長9.2cm、刃部幅4.0cmを測る。袋部は偏円形を呈し、外径3.3cm×2.5cm、内径2.2cm×1.4cm程を測る。又袋部には現状では接合面はみえない。

註1 大阪府教育委員会「陶器」Ⅲ 大阪府報 30 1978

2 甘木市教育委員会「池の上墳墓群」甘木市文化財調査報告 第5集 1979

甘木市教育委員会「古寺墳墓群」甘木市文化財調査報告 第14集 1982

2) 8号墳（付図5、図版16a）

7号墳の北西約23mの位置にあり墳裾では6m程離れているにすぎない。みかけ状は径10m前後の円墳かと思われる。墳丘の最高点は8.297mで7号墳より約2m低い。墳丘は東側の畑からは約1m、西側からは2m以上の高さがある。墳丘より須恵器甕胴部片2点を採集しているが内面はナデで青海波を消しており古い要素をもつものといえるが特徴的な部分はない。7号墳との関係でいえば7・8号間の畑が円弧を描いており、7号墳の墳丘がこれにより一部切られたようになっており、後世の削平の可能性があるとはいえ、8号墳が新しいといっても過言ではなからう。

3) 9号墳（付図6、図版16c・16e・16f）

7号墳の北東約65mの地点に位置する。畑の隅にあり、その墳丘のほとんどは削平を受けており、石室の柱状玄武岩の袖石が一部露出している。袖石の位置からすると石室はほぼ南に開口するものと思われる。現状での古墳の最高点は9.395m、畑の高さは8.921mで古墳の高さは50cm弱である。又現状でのみかけの大きさは5.5m～6mで、墳丘の大部分が削平を受け、石室の周辺だけが辛うじて古墳としての名残りを留めているといえよう。

墳丘上で須恵器甕胴部片5点を採集したが、内面は青海波をナデ消したものである。

4) 10号墳（付図6、図版16c・16e・16f）

10号墳の東約23mの地点に位置する。一部宗像農協津屋崎堆肥センターの建設によって破壊を受けているが、それ以前にも墳丘のかなりの部分は削平されている。現状での最高点は12.434m、北側の畑は9.854m、南側の畑は9.397mで2.6～3m程の高さがあるが、これは削平を受けた高さと思われる。東側では舗装されたアスファルトの面で11.686mであり、工事以前の状況を考慮すると石室を中心にして1m前後の墳丘が残ったものと考えられる。墳丘の中央部は凹んでいるが、これは石室盗掘による陥没の跡と考えられる。現状での大きさは12m前後であり、当初はこれをやや大きくした程度の円墳であったと推定される。

墳丘上で須恵器甕胴部片9点を採集したが、うち8点は内面青海波をナデ消し、うち1点は青海波が明瞭である。他に平瓶らしき頸の破片もあった。

5) 11号墳（付図4・6、図版16c・16e・16f）

10号墳の東約34mの地点に位置する。カントリー・エレベーター建設の際、破壊をまぬがれ辛うじて保存された古墳であるが、現状は周囲をアスファルト舗装され、昔日のおもかげはない。1980年度調査の墳丘測量図もあわせて図示するが、その後カントリー・エレベーター建設によって若干削平を受けているが、古墳の形状そのものはほとんど変わっていない。1980年度測量の最高点は14.34m、今回測量の最高点はそれより3m程東南の部分で14.422mを測った。1980年度における11号墳の高さは1.95～2.53m、今回測った高さは2.52～2.66mとなっており、周囲は先の工事

II. 調査の内容

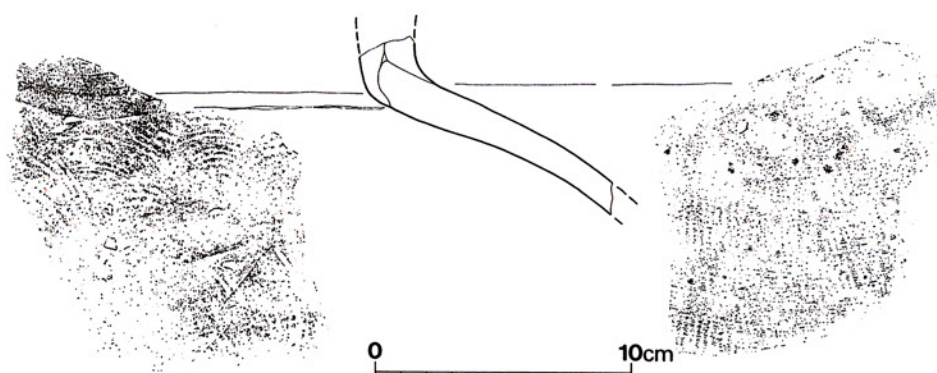
によって若干の削平を受けていることがわかる。1980年度におけるみかけの大きさは12m前後、今回は12～13.5mで、本来の大きさはこれよりやや大きな円墳であったと考えられる。

墳頂部に5.5m×3.5m程の陥没があり、その西側には1.7m×1.2m程の穴がありこれは丁度石室の羨道から横口部付近にあたっている。以前は人がはいれたようであるが、現在は無理なようである。

墳丘上より須恵器片を5点採集したが、外面は平行線タタキ、内面は青海波をナデ消した甕胴部片3点があった。

6) 12号墳 (付図7、巻頭カラー図版4C、図版17a・17b・17c・17d・17e)

東西を新原池と月花池に挟まれた高所に位置する前方後円墳である。後円部に盗掘を受けたらしき乱れた部分が認められるが全体としては残りが良好である。主軸はN-61°30'-Eで前方部はおおよそ西南西に向くといえる。現存の墳丘長は43m、後円部径は25m、前方部幅は29.5m、くびれ部幅は21mを測る。後円部の最高点は19.290m、前方部の最高点は18.903mを測り、現状では30cm程しか差はないが、先にも述べたように後円部南側に11m×6m程の盗掘の跡らしき乱れた部分があり、これによって後円部高がいくらか低くなったものと考えられる。後円部の高さは現状で



第17図 12号墳墳丘表採土器実測図 (縮尺1/3)

5.1m程、前方部高は5m程であるが、後円部は本来は6m程の墳丘をもっていたものと考えられる。

南側は戦後の畑地開墾等によって若干削平され、後円部北側ではあまり明瞭ではないが、墳丘の周囲に幅5m前後の平坦面が存在する。形状は墳丘の形と合致しており、周溝等

と対比して本来はこの部分までが古墳の規模と考えるべきものかも知れない。この平坦面を入れると長さは61.5m、前方部の幅は47.5mを測る。

又後円部の西北側に幅6～7.5m、高さ55cm～75cm程の張出し部分が存在するが、平坦面部分から突き出しておらず、単に平坦面の高さの相異かもしれないが、これが古墳築造時からこのような張出しがあったか否かは発掘調査にまたねば結論は出せない。

墳丘上より須恵器大甕片と他に2点が採集されている。大甕は肩部片で、頸部内面はヨコナデ、肩部の内面は青海波をナデ消しているが、青海波はよく残っている。外面は平行線タタキの上から細かいカキ目を施している。灰黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好 (第17図)。この他の2点は内面の青海波がよく残っている。

7) 13号墳 (付図7・8、図版17c・17d・17e・17f)

12号の西北側、前方部隅角に隣接して位置する。古墳の最高点は13.894mで、墳丘の高さは東側では1.6m程、西側では3m程である。現状での径は11.5m～14mでやや偏円形を呈している。盗掘を受けた痕跡等もなく、本来も14m前後の円墳と考えられる。

墳丘上から須恵器片をやや多く採集しているが、図示できるようなものはないが、みた感じでは新しそうである。

8) 14号墳 (付図7・8、図版17c・17d・17e・17f)

12号の北西側に隣接し、13号墳の東北20mの地点に位置し、13号墳とは裾部の間は6mと接している。古墳の最高

点は15.270mで、古墳の高さは東側で2.2m、西側で3mを測る。現状で東西の径は14mで、南北では北側に盛土がずり落ちたような感じで17.5mを測るが、本来は14mをやや上まわる程度の円墳であろう。

墳丘西南側に3m×2mの長円形を呈する落ちこみがあり、盗掘の跡かも知れない。

9) 15号墳（付図9、図版18a）

新原・奴山古墳群の中心をなす22号墳の西南部に存在する古墳の一つで、15～19号・46号墳のなかでも最も大きい。15号墳の南側斜面および墳裾部はかつてここに存在した火葬場によって一部削平を受けているが、比較的残りはよい。古墳の最高点は19.702mで、東北部での高さは4.1m程、西側での高さは5m程で墳丘は高い。現状での径は18m～19.5mで、方形に近い感じもするが、北から東にかけての斜面の等高線が密で傾斜がきついことから、この部分はいくらか変形しているものと思われる。本来は20m前後の円墳であろう。

10) 16号墳（付図10、図版18a）

15号墳の南西約50mの地点に位置する。等高線は乱れており、高まりが3ヶ所にみられるが、最高点13.743m、同じく13.739mを示す2つの高まりが古墳の盛土で、その間の低い部分が石室盗掘の跡と考えられる。最高点を示していない高まりは石室を盗掘した際の排土のようである。高まりは現状では70cm程のものである。

11) 17号墳（付図10、図版18a）

当初15号墳の南西33m程、16号墳の東北17mの地点に位置した最高点14.549mの高まりを17号墳としていたが、樹木伐採後みると15m×8.5m程の半円形をなしており、南側では1m弱の高さをもっている。低墳丘の古式の古墳が18号墳に切られたものと考えてもよいが古墳か否かの判断に苦慮したので、一応これは除外し、新たに16号の東南35mの地点で検出された小古墳を17号とした。

17号墳は南側の道路と、火葬場へ行く道路のため半分程破壊されており、現存する部分での径は11m程の円墳と推定される。最高点は13.480mで墳丘の高さは1～1.7m程である。又本来の墳丘中央部に4×2.5m程の長円形の凹みがあり、石室は盗掘を受けているものと思われる。

12) 18号墳（付図9・10、図版18a）

15号墳の東27m程の地点に位置する。現状では10m前後の円墳と思われるが、畑と農道によって墳丘の大半が削平を受けている。古墳の最高点は15.758mで、古墳の高さは約1.5mである。墳頂部には径2m前後の円形の凹みがあり、東側の墳丘壁面には石室奥壁の裏とおぼしき部分がみえている。

13) 19号墳（付図9、図版18a）

15号墳の東南に接しており、中心での距離は20m弱の位置にある。東側は火葬場跡があり裾部がいくらか削平を受けているようではあるが、残りはよい。現状での径は9.5m～11.5m程の円墳である。古墳の最高点は15.865mで、墳丘の高さは2m程のものである。墳頂部に径1.5m程の円形の凹みがあるが、石室が盗掘を受けているのかもしれない。

II. 調査の内容

14) 46号墳（付図9、図版18a）

15号墳の南約28mの地点に位置する。大半が破壊を受けているが1m弱の古墳の高まりが残る。現状では径6～7m程の高まりであるが、この部分はかつて道路拡幅工事のため自衛隊が造成中に石室が発見され、刀剣類・馬具等が発見され、工事を中止したとの事を地元の方々から聞いた。残骸に近い古墳ではあるが、番号を付しておきたい。

15) 20号墳

a. 墳丘（付図11、図版18b・18c・18d）

新原・奴山古墳群の中心をなす22号墳の東側約85mの地点に位置する円墳である。現状では29m程の径をもつが、さらに本来の規模を把握するためにまず南側に幅2mのトレンチを設けて発掘したが、耕作土の下はすぐに地山で周溝の存在は確認できなかった。地山の高さは墳裾部で14.089mで耕作土はわずかに10cm程度のものである。さらに北側・西側にもトレンチを設けて掘る計画をしていたが、この部分の畑には作物があったこととあわせ、以上のような状況であったので周溝は現状では存在しないものと考えて発掘を中止した。墳裾部は急傾斜となっており、若干は後世の削平があると考えられるので本来の径は30mをいくらか越すものと思われる。古墳の最高点は19.182mであり、墳丘の高さは5m強を測る。墳頂部の南側に若干等高線の乱れがあるが凹みとはいえない。又斜面にいくらかの穴・凹みがあるがこれは木根等の抜き跡であろう。墳丘とくに墳裾部の斜面においては葺石が観察され、主に墳丘南半部の墳裾部では表面および葺石の間より高坏・器台・甕口縁・胴部片等比較的多量の須恵器片を採集した。これらの須恵器のほとんどは1号墳～6号墳でみられたように墳丘中に供献された須恵器の一部であることはほぼまちがいない。

b. 墳丘上で採集された須恵器（第18図）

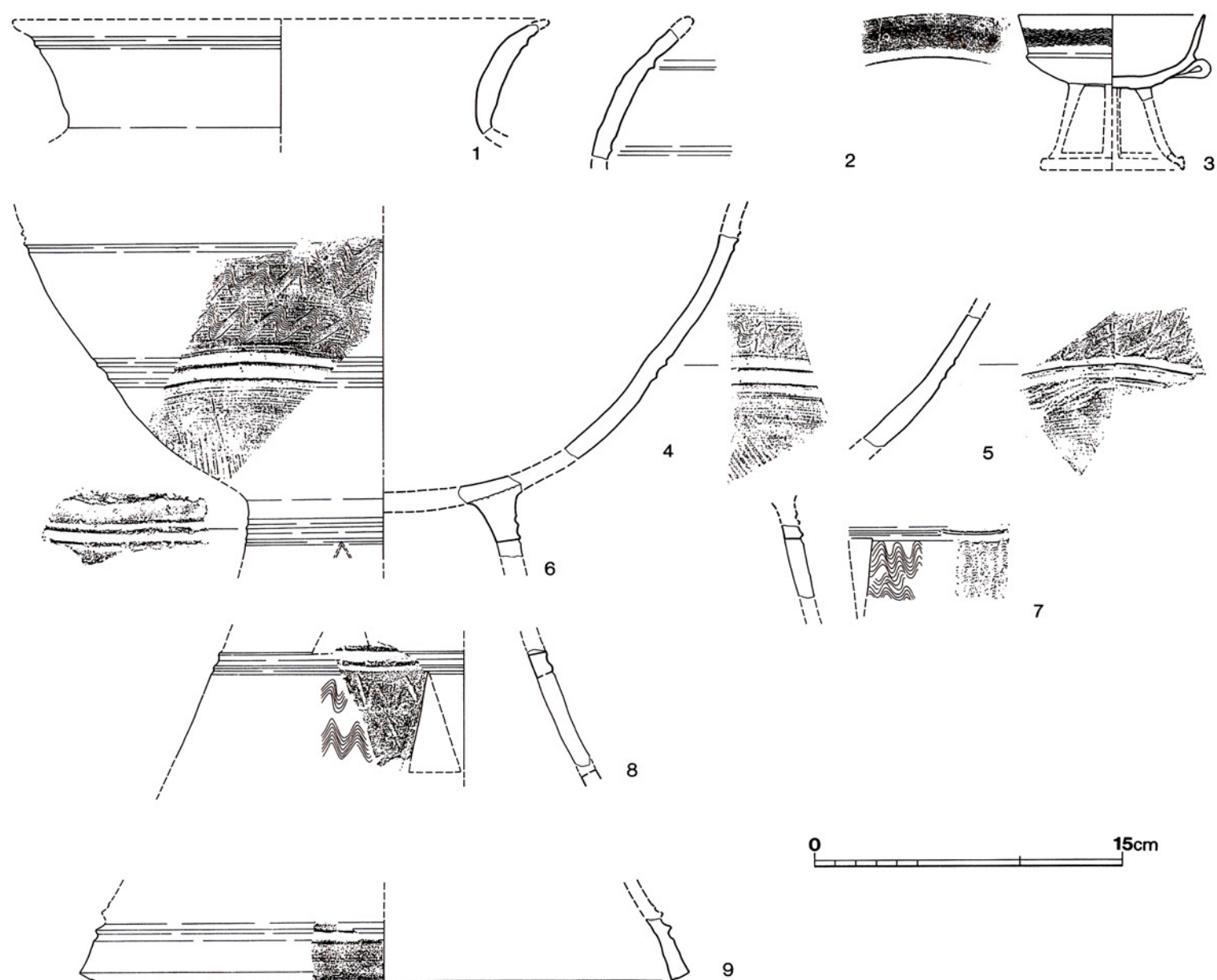
1は復原口径26cm程の甕の口・頸部片である。頸部は外反し、口縁直下に三角凸帯をめぐらすが、口縁端部を欠失している。口縁端部にかけて器壁が薄くなっており、図示したように三凸帯から口縁端部までは1.5cm程のもので端部は丸くなると思われる。頸部内面はナデ、口縁内面から外面はヨコナデ。灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は硬く良好。

2は甕口縁片で口縁下と頸部下位に三角凸帯1条ずつをめぐらし、その間に単位14条の波状文を2列施している。内面は回転ナデ、凸帯間はカキ目風のヨコナデの上から波状文を施文、口縁および凸帯の周辺はヨコナデ。内面は暗灰色、外面は黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は硬く良好。

3は小形の把手付高坏である。口径9.1cmを測り、高さは8cm弱程に復原できる。口縁はわずかに外反し、坏部中央にシャープな段をつくる。その段の下に板状の粘土で把手を貼付してから、両側をヘラで切って整形している。口縁外面には単位12条の繊細な波状文を施している。脚部は方形の大きなすかし孔を4ヶ所つくっており、幅6m程の脚上端が4ヶ所残っている。口縁内面から外面はヨコナデを施す。内底には灰緑色の自然釉がかかり調整法は不明。色調は灰色の強い灰黒色であるが、胎土内はあずき色を呈する。胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

4・5・6・7・8・9は器台で、4と5は同一個体と思われるが、他は同一個体か否かは不明である。いずれかというとは別個体の可能性が大きいといえようか。

4と5は器台の坏部破片で口縁と口縁部近くはない。上位の凸帯は1条しか残っていないが下位と同様2条であったと思われる。凸帯の間には単位10条の繊細な波状文が3列にわたって施されている。内面はナデ、外面の凸帯周辺はヨコナデ、凸帯の間はカキ目の上に波状文を施文している。カキ目は下位凸帯下にまでおよんでいる。坏下半は平行線タタキの上からカキ目を施こし一見格子目にみえる部分もある。内面は灰色の強い灰黒色、外面は黒色の強い灰



第18図 20号墳墳丘表採土器実測図（縮尺1/3）

黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は硬く良好。

6は器台の坏・脚の接合部である。接合部直下には三角凸帯を2条つくり出すが、周囲が凹線上を呈し結果的には2条の凸帯、3条の凹線となっている。この下位には繊細な波状文が観察される。又下位凹線の部分に、三角形すかし孔の上部が残っている。坏と脚の接合部には接着しやすいようにハケ目を入れた痕跡が明瞭である。坏内面・脚内面はともにナデ調整。内外ともに灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は硬く良好。

7は径算出不能の小片であるが、傾斜からすれば脚の上から1段目の文様帯と考えられる。つくり出しの三角凸帯1条と凹線残り、その下位に単位6条の比較的繊細な波状文3列が絡みあっている。又幅の狭い逆三角形になると思われるすかし孔の一部が残る。内外ともに灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は硬く良好。

8はその径と傾斜から脚の上位1段目と2段目の破片と考える。1段目と2段目の境は2条の三角凸帯をつくり出す、したがって凹帯は3条となるものとみられる。1段目には三角形すかし孔が、2段目にも三角形すかしがあり、このすかし孔の周縁は面どりを行なっている。又単位6条の比較的繊細な波状文2列を施している。内面はヨコナデ、外面はカキ目の上から波状文を施す。内外とも暗灰色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は硬く良好。

9は脚裾部片であるが、小片であるので径の算出は不能であるので上部の傾斜にあわせて30cm弱に復原して図示した。脚部はやや内彎する。又三角凸帯1条が残るが、本来2条、凹帯3条があったものと思われる。内外ともにヨコナデ。内外ともに暗灰色を呈し、胎土には細粒の砂を含み、焼成は硬く良好。

以上の須恵器はいずれも古い要素をもつことはいうまでもない。1・2等の甕は陶邑編年のI型式2段階に比定できよう。3の器台もほぼその同時期に位置付けてよからう。4～9の器台は津屋崎13号墳（奴山5号墳）出土の器

II. 調査の内容

(1) 台、甘木市池の上および古寺出土の短脚で大きく外に開く器台に比較する⁽²⁾と、やや長脚化の傾向にあり、甘木市小田茶臼塚出土の器台⁽³⁾等と同様の要素といえるが脚部の文様帯・すかし孔等が異質の観がある。これらのことから20号墳表採の須恵器は池の上・古寺等よりも若干後出し小田茶臼塚に併行、もしくは陶邑のⅠ型式2段階頃に併行するものとみてよからう。橋口の年代観でいえば、5世紀前半代に位置付けられる。⁽⁴⁾

註1 津屋崎町教育委員会『奴山5号古墳』 1978

2 甘木市教育委員会「池の上墳墓群」甘木市文化財調査報告 第5集 1979

甘木市教育委員会「古寺墳墓群」甘木市文化財調査報告 第14集 1982

3 甘木市教育委員会「小田茶臼塚古墳」甘木市文化財調査報告 第4集 1979

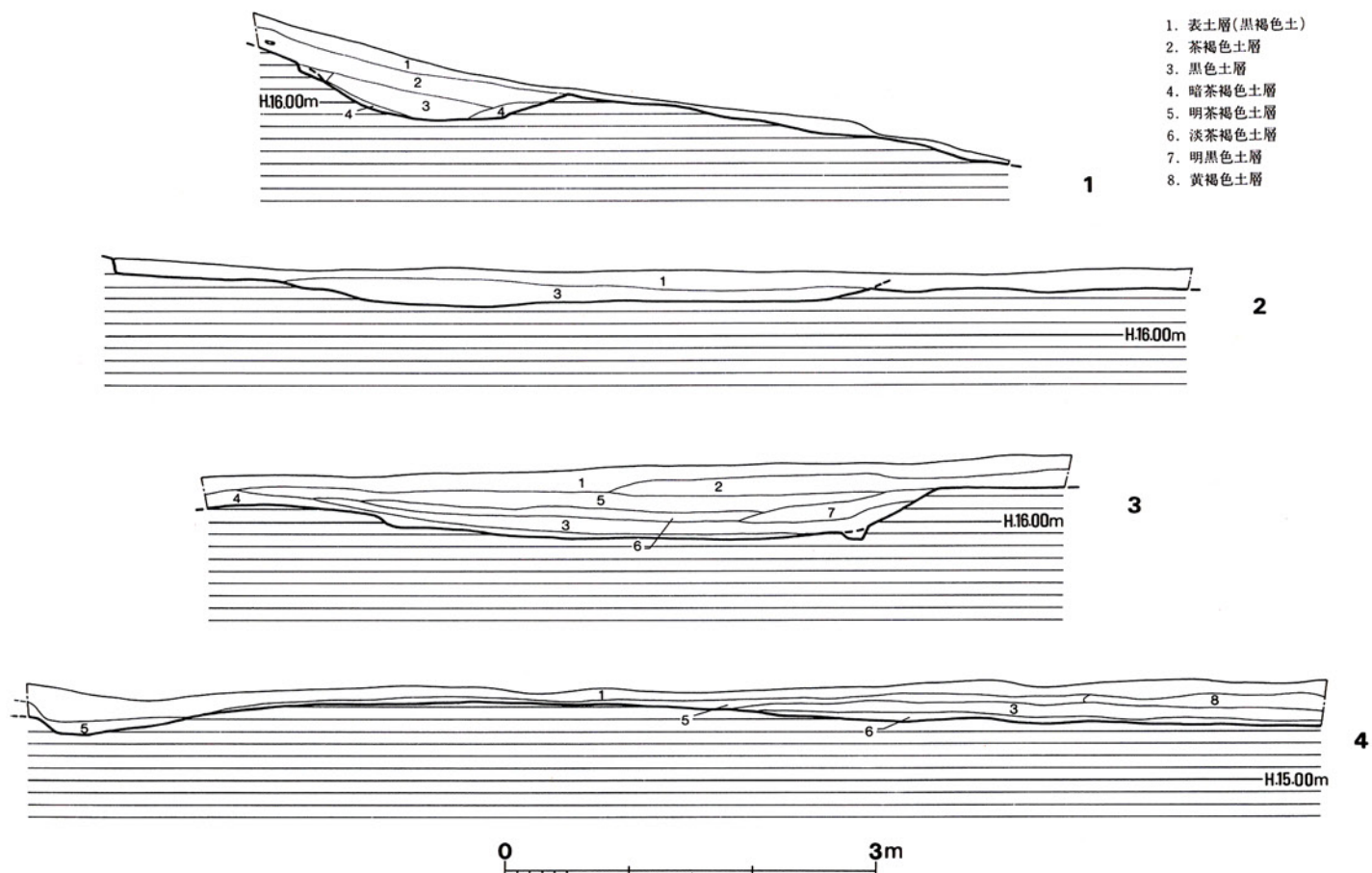
4 橋口達也「北部九州における陶質土器と初期須恵器——近年の成果を中心にして——」 甘木市教育委員会『古寺墳墓群』II 甘木市文化財調査報告 第15集 1983

15) 21号墳

新原・奴山古墳群の中心をなす22号墳の南に接しており、中心部間での距離は50m程を測る。この墳丘上には福岡県指定考古資料の「新原の百塔板碑」8基が存在する。これは高さ1m内外の121~89cmの柱状節理の玄武岩に彫りこまれたもので、石が硬いため彫線も浅い。碑は梵字とその下の円相内に虚空蔵菩薩、金剛界大日如来、文殊菩薩等を線彫りした梵字十図像のものと、梵字のみのもの、釈迦如来の図像のみのものとがあり、なかで主要な板碑と思われるものは三方に梵字があり、正面に次のような銘文が刻まれている「願共諸衆生 往生安樂園 文永十一年八月日改立 観進僧行円」文永11年は西暦1278年である。付図12に梵字・図像・銘文のある石を示している。

a. 墳丘（付図12・13、第19図、図版9a・10b・12a・12b・12c・12d・18c・18f・19a）

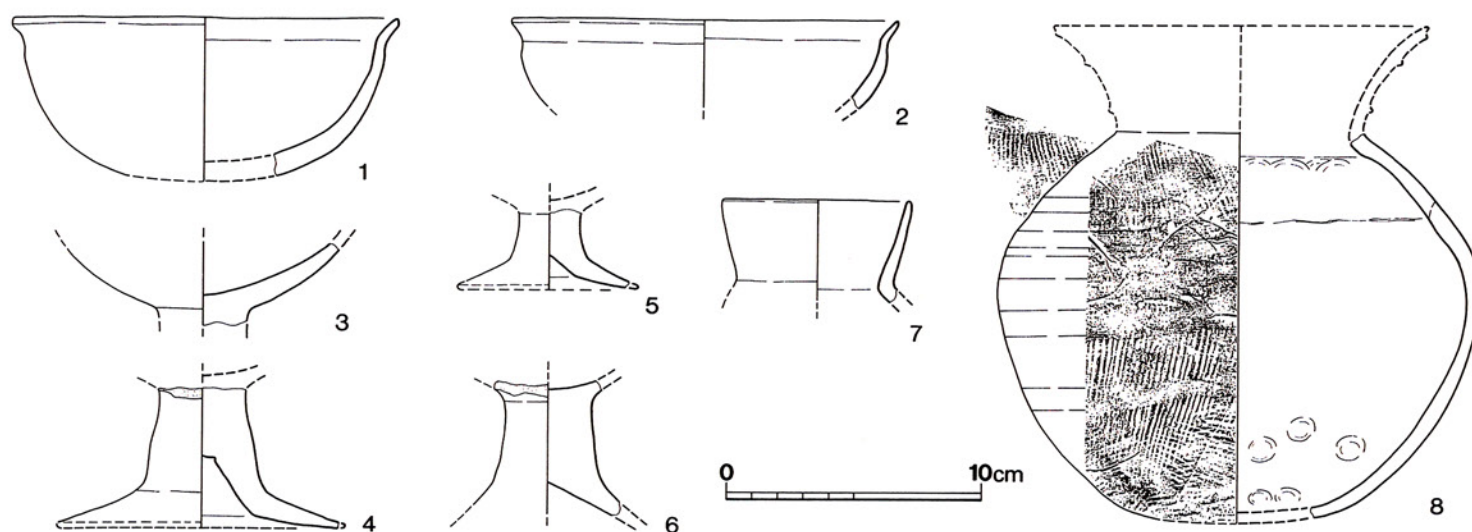
百塔の板碑が県指定を受けているために、この古墳には柵が設けられており、一部は墳裾より内部に基礎が置かれている。現状での径は14.5m~15.5m程の円墳であり、高さは約1.5mを測る。付図12に示したように幅2mのトレンチを4ヶ所設定して墳丘規模の確認を行なった。その結果はすべてのトレンチで周溝が確認され、現状の墳裾とほぼ



第19図 21号墳トレンチ土層図（縮尺1/60）

1. 第1トレンチ北壁 2. 第2トレンチ東壁 3. 第3トレンチ北壁 4. 第4トレンチ西壁

一致する部分と、現状の墳裾よりややひろがる部分とがあり、径は16～17mと現状よりわずかに大きい円墳であることがわかった。墳丘の高さも周溝の基底部から測ると2.3m程になる。又、第1トレンチの周溝内からは初期須恵器の甕の大きな破片が、第2トレンチでは外面は格子目タタキ、内面はナデ消してはいるが青海波がやや残る須恵器大甕片等同じく古い要素をもつ須恵器片若干が、第3トレンチからは高坏をはじめとする土師器が出土した。



第20図 21号墳周溝内出土土器実測図（縮尺1/3）

b. 周溝内出土の土器（第20図）

1～7の土師器は第3トレンチ、8は第1トレンチの周溝から出土した。

1は復原口径15cmの埵である。口縁は短く、外反している。調整法はナデかと思われるが器面風化のため不明。暗橙色を呈し、胎土には微量の砂粒と赤色粒子を含み、焼成は良。

2も同じく埵で、復原口径は15cm、口縁は短く、外反する。調整法は器面風化のため不明。赤褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良。

3は高坏の坏部片である。坏内面はミガキかと思われるが明瞭ではない。外面は器面の風化のため調整法は不明。赤褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。

4は高坏脚部である。脚高は低く5.5cm程で脚柱は身がつまりやや中ぶくらみで、脚裾は大きく開き、径は11.2cm程に復原できる。脚柱内面はへう削りであるが外面および脚裾部内面は風化のため不明。赤褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は軟質で不良。

5は高坏脚部片であるが小形品でミニチュア的なものであろうか。脚高は低く3cm程に復原される。脚柱は身がつまり、脚裾は大きく開くが、4に比べてややなだらかなのである。脚柱内面はへう削り、外面および脚裾部内面は風化のため不明。赤褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は軟質で不良。

6は高坏脚部片である。脚柱は身がつまりやや中ぶくらみを呈し、裾部はなだらかに外へと開いている。調整法は器面風化のため不明。赤褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は軟質で不良。

7は小形丸底壺の口縁部片である。口縁はわずかに内彎ぎみで、口径は7cmに復原できる。黄褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は軟質で不良。

8は甕であるが口縁部を欠く。復原器高19～20cm程のものであろう。復原の肩部径9.6cm、胴部最大径は18.8cm。底部はかなり丸味を帯びているがわずかに平底状の名残を残している。外面は平行タタキを基調とするが、肩部はその後ヨコナデを加えるが、タタキ痕はよく残っている。胴部中央は回転へう削り様の調整を施し、タタキ痕を消している。これは若干下位にも一条施す。底部近くになると平行線タタキが交叉する。底部は平行線タタキが磨れて消えかかっている。内面は頸部内面から肩部内面にかけてはヨコナデを加えているが肩部直下には青海波が消えきらずに残っている。胴中位はナデ。底部近くから底部にかけては一見指圧痕にみえる棒木口様のタタキ痕をナデ消してい

II. 調査の内容

るが、残っている。内面は灰色の強い青灰色、外面は灰黒色、胎土内はあずき色を呈する。胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

これらの土器のうち土師器高坏の脚柱の身のつまったものは古い要素をもつといえるがこのように脚高の低い高坏はいまだ類例に乏しい。又小形丸底壺の口縁が内彎するのも古い要素といえる。8の須恵器甕は池の上Ⅱ・Ⅲ式頃⁽¹⁾のものと考えるが口縁部がないので決め手に欠ける。ただ底部の丸底化がかなり進行しているので池の上Ⅲ式が妥当だと考える。このことから橋口の年代⁽²⁾観によれば5世紀前半のはやい頃に比定できよう。

註1 橋口達也「池の上出土陶質土器の編年」甘木市教育委員会『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告 第5集 1979

2 橋口達也「北部九州における陶質土器と初期須恵器—近年の成果を中心に—」甘木市教育委員会『古寺墳墓群』Ⅱ 甘木市文化財調査報告 第15集 1983

16) 22号墳

a. 墳丘 (付図13、第21・22図、巻頭カラー図版4a、図版9a・9d・10a・13a・13b・13c・13d・14a・18e・18f・19a・19e)

22号墳が新原・奴山古墳群の中心をなす最も大きな古墳であることはいうまでもない。現在まで径56m、周溝を含めた復原外径67mに達する超大形円墳として扱われている⁽¹⁾。墳丘測量の結果、古墳の西北部と東南部で周溝が切れており一周しないこと、周溝のない部分すなわち古墳の西南側は周囲より一段高く、また古墳の西側の畑地が周溝の幅でつづき、先端で直角に曲がることなどから前方後円墳である可能性も考えられた。そこで杉・檜等の樹木の制約もあったが、幅1.5mおよび幅2mのトレンチを第1次調査の際に5ヶ所設けて発掘した。第1トレンチにおいては、周溝のつづきと墳裾部の段とさらに7.5m内側でさらに上の段を確認できた。この段は現存の山林の畦状の段と一致しており、この現存の段は生きているものかと考えられる。墳裾部および周溝は現存の周溝のつづきといってもかなり内側にはいっており、これは前方後円墳のくびれ部から前方部へと移る部分と考えられる。第1トレンチではかなりの量の埴輪片が出土した。さらに第4トレンチにおいてこのつづきを確認できたが、この部分ではかなり周溝の浅くなっている感じを受けた。しかし周溝底もしくは墳裾と古墳西側の高い段はほぼ2mの差があり、これを前方部としてよからうと思われる。第2トレンチはこの前方部と思われる部分のほぼ中央部の主軸上に設けたが表土下ですぐに地山であった。第3トレンチでは第1トレンチで確認できたくびれ部の反対側を検出する目的でトレンチを設け発掘したが30cm程掘り下げても溝状の遺構は検出されず地山と思われた。ただ21号墳の第4トレンチでは21号墳の墳裾から5.5mの地点から低く下りはじめ浅い溝状を呈しているが(第19図)、さらにトレンチを22号墳のほうに伸ばせば周溝もしくはくびれ部を確認できたかもしれない。さらに第2次調査で前方後円墳である追認を行なうべく前方部の西北隅角と主軸上で前方部端および周溝を検出する目的でトレンチを設けて発掘したが、耕作土下はすぐに地山となっており、目的を達せなかった。第7トレンチにみられる低い段は畑の畦畔の跡であろうと考える。前方部の確認が一部のみで明瞭さには欠けるが、前方後円墳であることは確実であろう。前方部の全容把握、21号墳等との関係等解明すべき点が多いが、これらは今後の課題としておきたい。

墳丘測量の結果後円部の径は54m、周溝幅は7.5m～11m、周溝を含めた後円部外径74m程を測る。前方部端を確認していないが、周溝を含めた全長は直角に曲る畑の畦畔を周溝外縁とすれば95～96m程のものとなり、それから周溝部幅を引けば墳丘全長は75～80m程のものと推定される。とすれば前方部と思われる高まりの南端ぐらいが前方部の端の一端を示すものではなかろうか。

墳頂部にはかつて縫殿宮の社殿が建てられており、一部は削平を受けているかもしれないが、現状での最高点は21.820m、したがって墳裾部からの高さは7.8m程度、前方部と思われる高まりからの高さは5.65m程を測る。

周溝の外側には山林・畑となっているが周堤があり、その古墳東側の周堤上に23号墳が造られている。

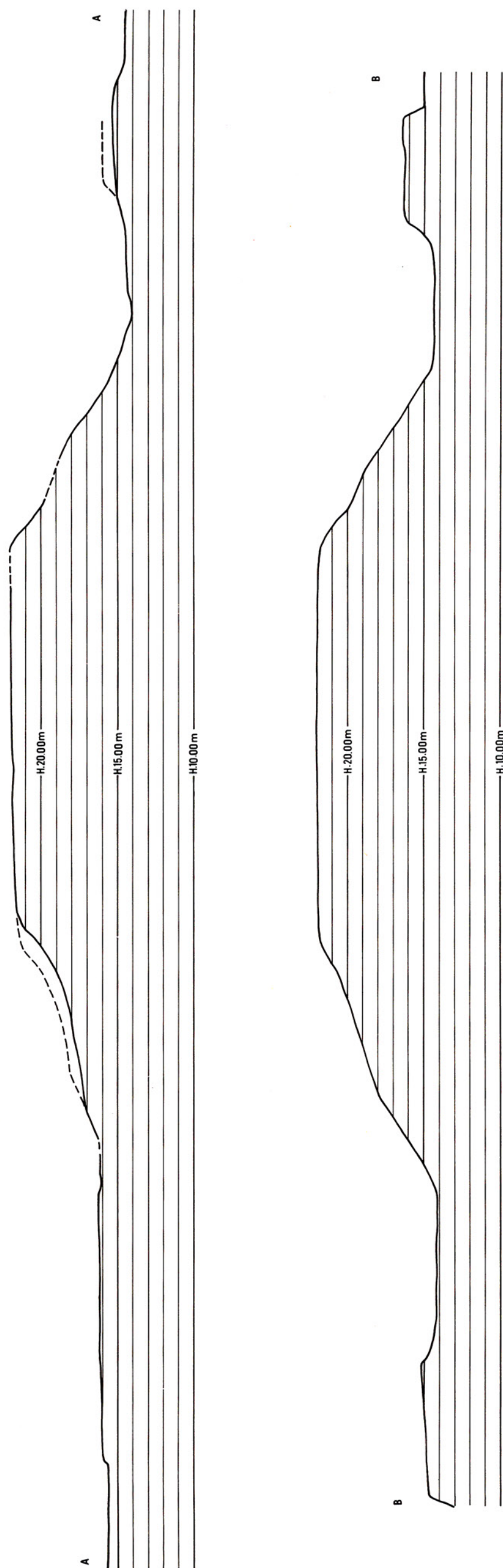
墳丘の各所には木根のぬき跡、盗掘壊らしき穴等があるが、これらの穴によっては盗掘は受けていないと思われる。ただ後円部の西南側に幅8m程にわたって削られたような部分があり等高線が乱れているが、これが石室の盗掘もしくは石室の崩落による陥没を示す痕跡かもしれない。

墳丘は後円部3段・前方部2段に築かれているものと考えられるが、後円部の2段・3段目のやや平坦な面をつくる部分には現在でも埴輪が表面に露出しており、残存状態がよいものと思われた。これらの埴輪の一部および須恵器片が旧縫殿宮の鳥居上およびその周辺にいくらか散布しており、これらは採集してきた。

b. 第1トレンチ出土および採集の埴輪（第23図）

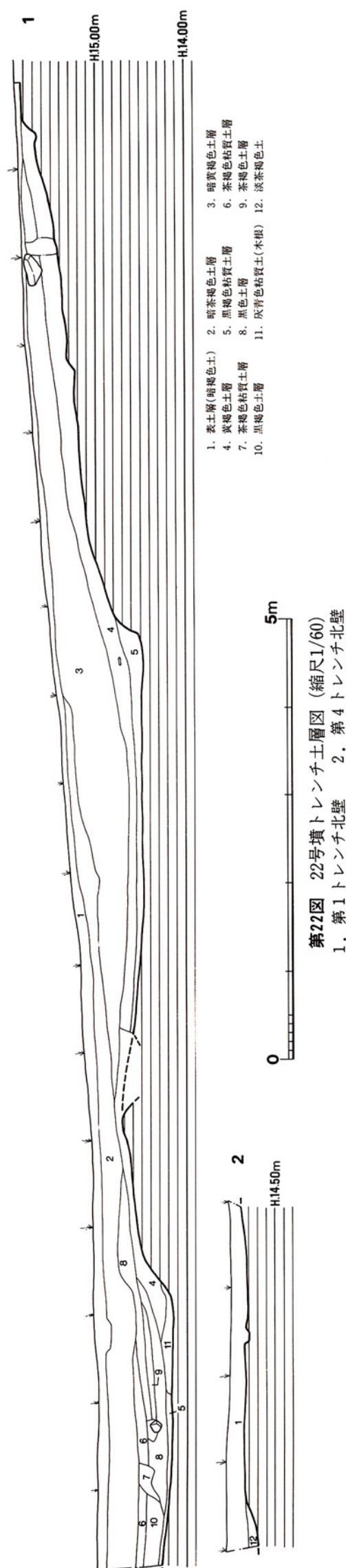
図示した埴輪以外に外面平行線タタキ、内面は青海波をナデ消した須恵器甕胴部片2点および第5トレンチからは家形埴輪らしき破片が出土しているが、家形埴輪はどの部分か決められないので図示できない。須恵器は古い要素をもつものといえる。

1は円筒埴輪の口縁部片で、復原口径は36.6cm。わずかに



第21図 22号墳墳丘断面図（縮尺1/300）

II. 調査の内容



外に開いている。外面は粗いハケ目、内面はへう削り風の強い擦過。内面は灰黄色、外面は淡灰黄色、胎土内は灰黄色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

2は円筒埴輪の上に近い部分の破片で、径は28cm内外に復原できる。外面は上部のハケ目と下部のへう削り風の擦過が施される境目のところにあたっている。調整は下の擦過→ハケ目という順でさらにその上に擦過を加えた部分もある。内面はへう削り風の強擦過。内面は灰黄色、外面は黄褐色、胎土内は青灰色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

3は円筒埴輪の中位の破片である。コの字凸帯1条をめぐらし、三角に近いすかし孔が部分的に残る。凸帯部はヨコナデ、内面はへう削り風の斜方向の擦過の上から、凸帯の内面部分は横方向のナデを加えている。外面はへう削り風の強い擦過。表面は内外ともに灰黄色、胎土内は青海色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

4は円筒埴輪の下半部と思われる破片である。コの字凸帯1条をめぐらしている。凸帯周辺はヨコナデを施すが、凸帯の一部に布圧痕が認められる。調整に用いた布目が付いたものであろうか。内面はへう削り風の擦過を施しているが、下位の凹んだ部分に横方向の弥生土器・土師器にみられるような平行線タタキの痕跡が認められる。凹んでいたために擦過を加えても完全に消えなかったものであろう。表面は内外ともに灰黄色、胎土内は青灰色を呈する。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

5は円筒埴輪の底部である。底部はわずかに外反気味である。内外ともにへう削り風の強い擦過を施している。内面は灰黄色、外面は淡黄褐色、胎土内は暗灰色を呈する。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

6はいわゆる朝顔形埴輪の口縁で、復原口径は36cm弱である。外面は粗いハケ目、内面はへう削り風の強い擦過、口縁内外はヨコナデ。表面は淡黄褐色、胎土内は灰色の強い灰黄色を呈する。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

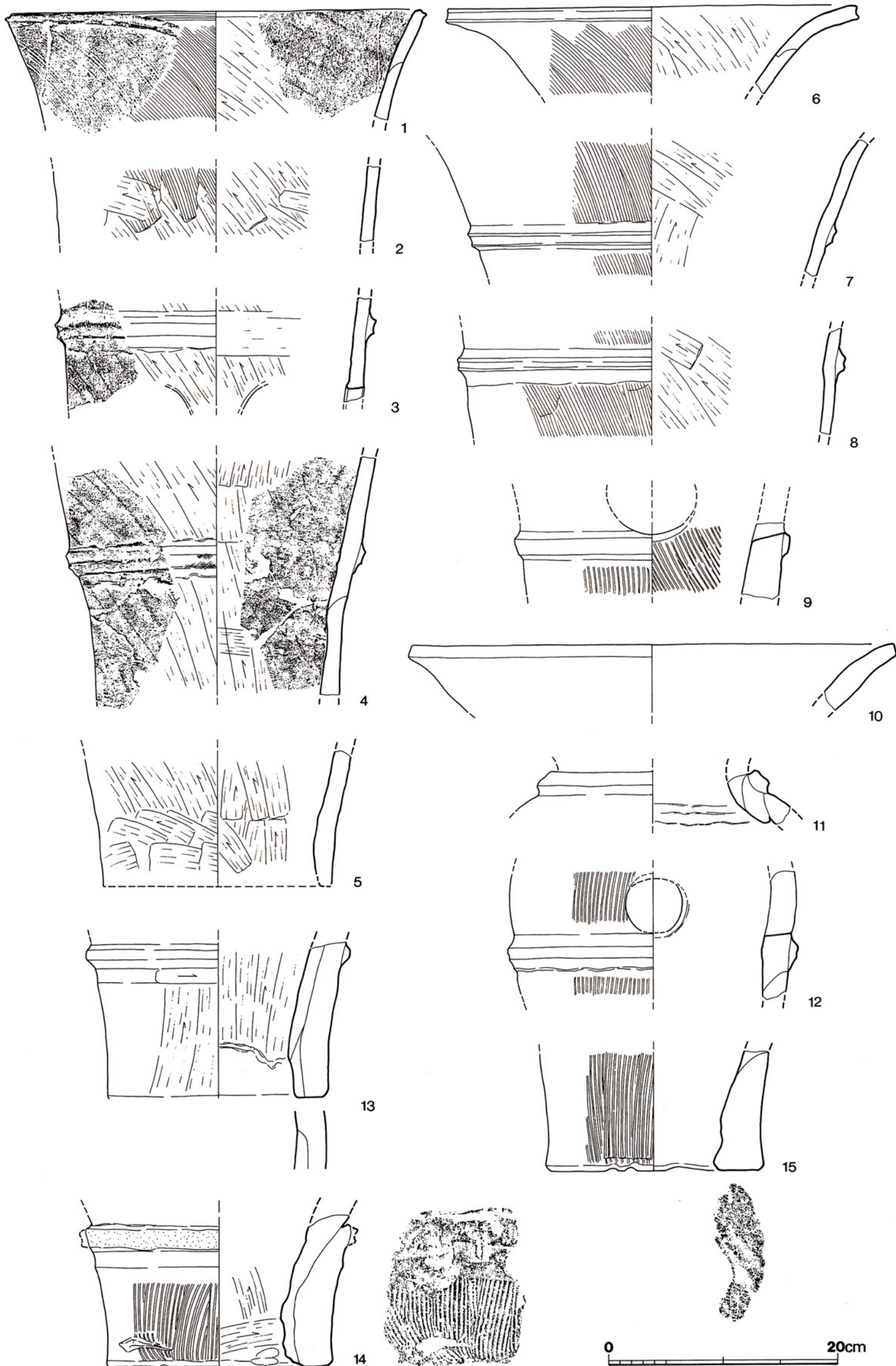
7は円筒埴輪の口縁に近い部分の破片で上の部分で38cmに復原できる。したがって口縁径は40cmを越すと思われる。コの字凸帯1条があり、その周囲はヨコナデ、外面は粗いハケ目、内面はへう削り風の強い擦過。暗茶褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

8は円筒埴輪の上半部の破片と思われる。コの字凸帯1条があり、その周囲はヨコナデ、外面は粗いハケ目、内面はへう削り風の強い擦過。表面は淡茶褐色、胎土内は灰黄色であるが、凸帯だけは胎土内には明茶色を呈し他の部分と異質である。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

9は底部に近い部分の破片と思われる。コの字凸帯1条があり凸帯の上位には円形すかし孔が部分的に残る。凸帯の周囲はヨコナデ、他は内外ともに粗いハケ目。赤褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は軟質。

以上は第1トレンチからの出土である。

10はいわゆる朝顔形埴輪の口縁片で口径は37cm程に復原される。口縁内面



第23図 22号墳出土埴輪実測図 (縮尺1/4)
1～9は第1トレンチ出土 10～15は表採

II. 調査の内容

に横方向の擦過が観察される他は、器面の風化のため調整法は不明。赤褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含むが、焼成は良。

11はいわゆる朝顔形埴輪の肩部片で、肩部の径は20cm程に復原できる。肩にはコの字凸帯1条をめぐらしている。又、肩部は粘土紐巻上げにより成形した痕跡が明瞭である。内面は横方向擦過、外面は器面風化のため調整法は不明。赤褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好。

12はいわゆる朝顔形埴輪の肩部に近い部分の破片で肩のあたりで25cm程の径に復原できる。肩の段には円形すかし孔があり、その下にコの字凸帯1条をめぐらす。凸帯の周囲はヨコナデ、外面は粗いハケ目、内面はナデ。内面は淡黄褐色、外面およびすかし孔は淡赤褐色。胎土には細粒の砂少量を含み、焼成は良。

13は円筒埴輪の底部の破片である。底部は19cm程に復原できる。底部から11.5cm～13.5cmのところにはだらけたコの字凸帯1条がめぐらされる。凸帯はヨコナデ、凸帯下は横方向擦過、内面の底部はナデ、他は縦方向擦過。器壁はきわめて分厚く3.5cm程の部分もあるが、図示するように粘土帯をかなりの部分重複させている。このような接合の類例は甘木市茶臼塚出土の埴輪⁽²⁾等がある。色調は赤褐色を呈し、胎土には細粒の砂少量を含み、焼成は良好。

14は円筒埴輪の底部片で、底径は20cm弱に復原できる。粘土帯の接合法は13と同様で、さらに明瞭である。器壁はきわめて分厚く4.5cmのところもある。底部から10.5cm～12.5cmの高さにコの字凸帯をめぐらす凸帯はつぶれている。外面は粗いハケ目、内面はへう削り風の強い擦過の上からナデを加えて消している。淡茶褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

15は円筒埴輪の底部で19cm程に復原できる。基底部はきわめて分厚く4.3cmを測る。接合法は粘土帯積上げであるが、重複部分はみられない。底面に敷かれていた竹らしきものの丸い凹面をなす圧痕がみられる。外面は粗いハケ目、内面はナデ。赤褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

10～15は表採の埴輪である。

1～8等は器壁が薄く、胎土内も青灰色、灰黄色を呈し、焼成もきわめて良好で軟質なもので、須恵器と同様登り窯で焼かれた可能性が強い。又ハケ目も粗いとはいえ、分厚い器壁をもつ土師質の埴輪のハケ目はさらに粗く、この点でも異なる。しかし7は器壁は薄い全体としては土師質という感じを受ける。又8の凸帯部分だけは土師質であり、解明すべき点も多い。しかしこのような埴輪が出現しているということは須恵器出現以後に位置付けられることはいうまでもない。甘木市小田茶臼塚⁽²⁾、同じく甘木市古寺1号墳出土の埴輪⁽³⁾等に類例が求められる。小田茶臼塚出土の須恵器は池の上Ⅲ式に共通するもの、および陶邑編年のⅠ型式1段階・2段階頃に比定されている。古寺1号墳出土の須恵器は陶邑編年のⅠ型式1・2段階に比定されている。したがって22号墳は須恵器・土師器等の土器がなく決め手には欠くが、5世紀前半代に位置付けられよう。又21号墳との関係でいえば、21号墳を意識して周溝等が造られており、21号墳より後出するものと考えられる。21号墳は先にみたように池の上Ⅲ式頃の須恵器甕およびほぼ同時期に比定できる土師器高坏等があり、5世紀前半のはやい頃に位置づけた。したがって22号墳は5世紀前半代の中葉頃に位置付けて大過なからう。

註1 福岡県教育委員会「新原・奴山古墳群」福岡県報 54 1977

2 甘木市教育委員会「小田茶臼塚古墳」甘木市文化財調査報告 第4集 1979

3 甘木市教育委員会「古寺墳墓群」II 甘木市文化財調査報告 第15集 1983

17) 23号墳（付図13）

22号墳西北部の周堤上に築かれた円墳である。現状でのみかけの径は12m前後。古墳の最高点は17.968mで、現状での墳丘の高さは約1.5m。墳頂部に盗掘壙が2ヶ所あり、北側の壙には石室のものらしき石材が一部露出している。22号墳との新旧関係はわからないが、石室の石材は横穴式石室の一部のような感じであり、2～6号墳等と同様、6世紀中頃～後半にかけてのものと考えるが妥当であろう。

18) 24号墳 (付図14、第24図、巻頭カラー図版4 d・図版14 c・14 d・19 c・19 d)

22号墳の北西110m程の地点に位置する前方後円墳で前方部は北西に向く。古墳西南側墳裾は畑地によって一部削平を受けているが全体としては残存状態は良い。現状での墳丘長は53.5mを測る。後円部の南側から東北部および前方部の北西側には幅4m程の周溝があり、周溝の外側には6～7mの周堤が存在する。一部削平を受けている後円部西側の畑地に幅2mのトレンチ2ヶ所を設定して耕作土を除去したところ、この部分にも幅5.5m程の、くびれ部では幅16.5mの周溝の存在が確認され、その外側には幅12～20m程の周堤も確認された。前方部西端の隅角およびその部分での周溝および周堤も確認したかったが、作物等の関係でこの部分のトレンチ調査はできなかった。以上の結果をもとに周溝を入れた長さ65.5m、周堤までいれると全長78.5mにもなる。現状での後円部径は28.5m、トレンチ調査の結果本来の後円部径は約31m、現状でのくびれ部幅は14m、トレンチ調査の結果、本来のくびれ部幅は約16m、現状での前方部幅は24m程を測る。後円部の最高点は19.789m、前方部の最高点は18.768mで、現状での後円部の高さは7m弱、前方部の高さは5m弱を測る。後円部西側斜面に6m×3.5m程の盗掘壊らしき陥没がある。

墳丘上から須恵器片8点を採集しているが、外面は平行線タタキ、細かい格子目タタキ、内面は青海波をナデ消し又はナデ消すが青海波が完全には消えていないもの等で、全体としては古い要素をもつものといえよう。

19) 47号墳 (付図14)

24号墳の北側に隣接した円墳で24号墳の前方部からは35m、墳裾では7～8mしかはなれていない。現状での径は17～19m程であるが、石室を盗掘されたものとみられ、中央部が溝状に大きく凹み、両脇が高くなっている。古墳の最高点は南側の高まりで17.366m、北側で17.772mを測り、南側での現状での高さは1.5m弱である。

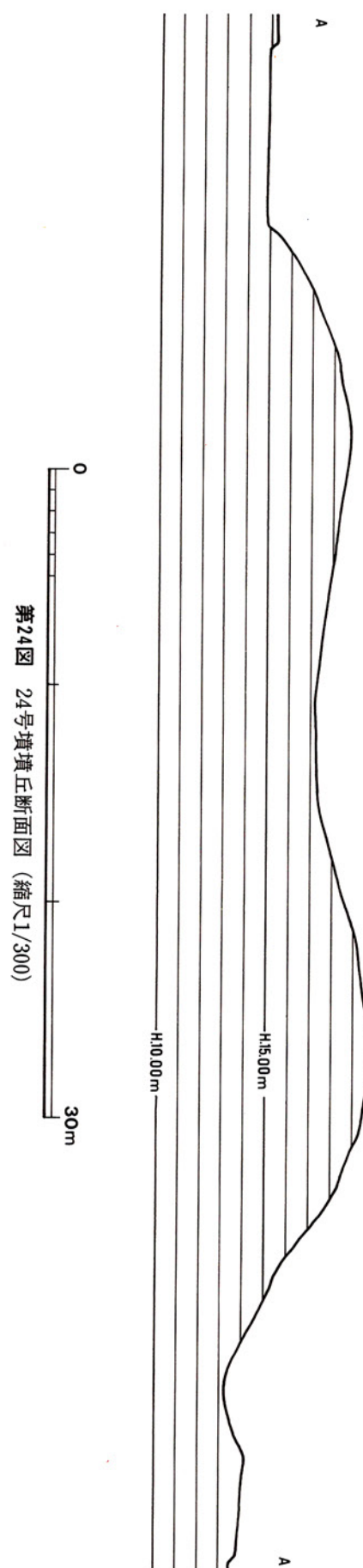
20) 48号墳 (付図17)

1号墳の東南、47号墳の北側に接する円墳で、東側の畑地によって墳丘の半分近くが削平を受けている。現状での径は9.5m程である。古墳の最高点は18.050mで、現状での墳丘の高さは1m弱である。

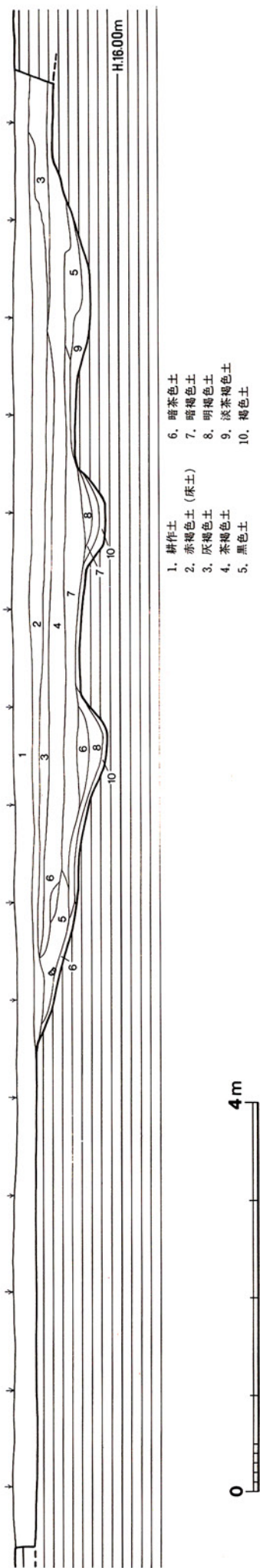
21) 25号墳

a. 墳丘 (付図15、第25図、巻頭カラー図版4 b、
図版10 c・10 d・15 a・15 b・15 c・15 d・
19 e・19 f・20 a・20 b・20 c)

22号墳の東側90m程の地点に位置する。現状では円墳であるが南側および西側が畑によっていくらか削平を受けており、前方後円墳の可能性も残されているため、南側および西側の畑に幅2mのトレンチを設けて発掘した。南・



II. 調査の内容



第25図 25号墳南側トレンチ東壁土層図 (縮尺1/60)

西両トレンチとも周溝を確認し、南側の周溝は掘り下げた。

南側トレンチで確認した周溝の幅は12.5m～13.5mで、周溝内にはさらに幅1mの小溝が2条、幅1.5m～2.0mの小溝が1条認められた。又周溝北側の斜面には葺石が残り、若干の須恵器片が出土した。又トレンチ西南隅には周溝とは別の石組遺構が検出された。

西側トレンチでは周溝を確認したのみでそのまま埋めもどした。周溝の幅は4.3m～4.5mであった。これは南側の畑に比べ約1m程低いために周溝上部が削平されて幅が狭くなったものとみられる。これらのことからこの古墳は円墳であることが確認された。東側・北側はよく形状を残しているが、墳裾部は急傾斜をなし、いくらか削平を受けているものと思われる。これらのことから、この古墳の本来の径は35～36m程のものと推定できる。

古墳の最高点は22.172mで、高さは5.7m～6.3m程のものである。又墳丘は2段に築成されていることが明瞭である。

墳丘の西南部を中心にして須恵器片を採集した。

b. 25号墳出土・表採土器 (第26図)

1～4は南側トレンチ周溝北側斜面の黒色土層から出土し、5～8は墳丘より表面採集したものである。

1は甕の頸部の破片かと思われる。凹線2条をめぐらしその間は凸帯状につくっている。凹線の下には単位5～6条の繊細な波状文が施されている。内外ともにヨコナデ、灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は硬く良好。

2は甕の口・頸部片と思われる。口縁と頸部の境と思われるところは三角凸帯状につくり出している。凸帯の上下には波状文を施す。口縁内面は黒緑色の自然釉がかかり、他の部分は内外ともに部分的に自然釉がかかっている。灰黄色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

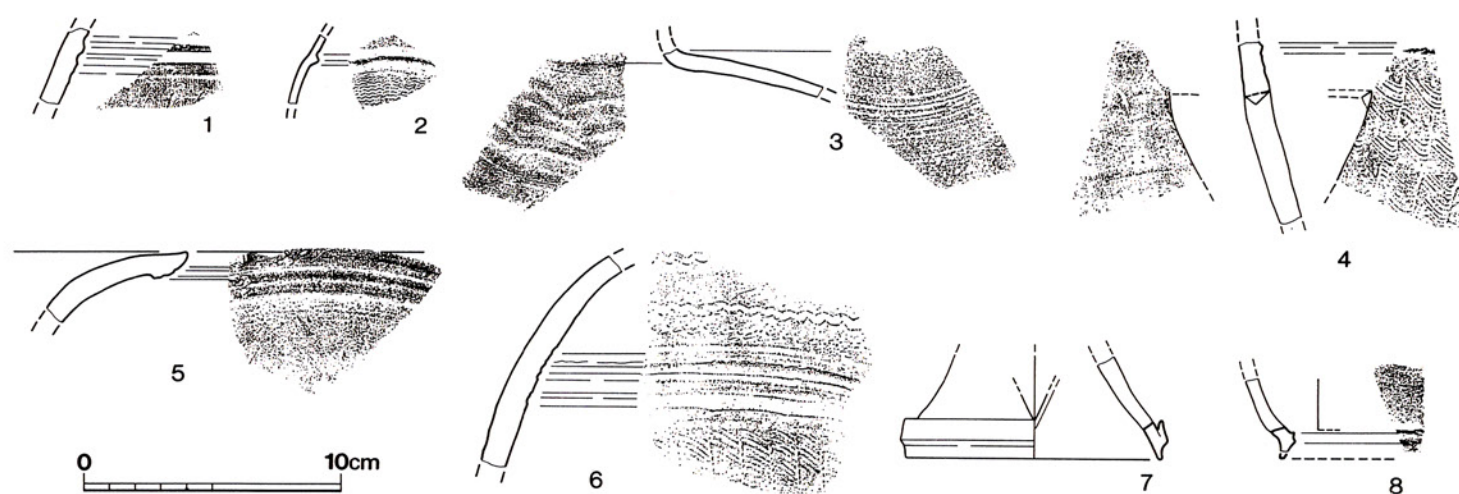
3は甕の肩部片である。内面は大き目の青海波の上からヨコナデを加えて消しており、外面はカキ目が施されている。外面には又自然釉がかかっている。灰色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

4は器台の脚部片である。逆三角形のすかし孔が部分的に残る。すかし孔の内面は面どりを施している。又外面はやや粗い波状文が施されている。内面はヨコナデ、外面には自然釉がかかっている。内面は黒色、外面は灰色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

5は甕口縁片である。内外ともにヨコナデ。内面は灰黄色、外面は黒色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

6は甕頸部片である。頸部の中央部付近とみられるところに凹線もしくは凹線状のもの3条をめぐらし、その上部には波状文2条と刺突文を、下部には波状文を施している。内面はヨコナデ、上部の波状文の間はナデ、凹線と下部の波状文の間はヨコナデ。灰黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

7は高坏脚部である。三角形すかし孔が部分的に残っている。脚内面はナデ、脚裾から外面はヨコナデ。暗灰色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。



第26図 25号墳出土土器実測図（縮尺1/3）
1～4は南トレンチ周溝内 5～8は墳丘表採

8は高坏脚部片で、方形すかし孔が部分的に残っている。内外ともにヨコナデ。暗灰色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

これらの須恵器のなかで、7・8は陶邑編年のI型式3段階に属するものといえるが、あとは小片のみで時期を決め得る特徴的な部分に欠けるといえる。

22) 26号墳（付図16、図版19 f）

25号墳の南側約60mの地点に位置する円墳である。現状でのみかけの径は14.5m～17m程であるが、墳丘の中央は径5m程の南西に開く大きな凹みがあり、石室が盗掘を受けていることは明瞭である。古墳の最高点は19.116mで墳丘の高さは3.5m程のものである。

23) 27号墳（付図16、図版19 f）

26号墳の南側16m程の地点に位置する円墳で、墳裾は26号墳、28号墳とほぼ接している。現状でのみかけの径は11.5m～15.5mでやや偏円形をなす。墳丘中央部は径5.5m程の西側に開く大きな凹みがあり、石室が盗掘を受けていることは明瞭である。古墳の最高点は17.283mで墳丘の高さは2m～2.5m程のものである。

24) 28号墳（付図16、図版19 f）

27号墳の南西約15m程の地点に位置する円墳で、墳裾は27号墳、29号墳とほぼ接している。現状でのみかけの径は12.5m～15mでやや偏円形を呈する。墳丘の中央部は東南側に開ける径3.5m程の大きな凹みがあり、石室が盗掘を受けていることは明瞭である。古墳の最高点は16.154mで、墳丘の高さは2m～2.5m程のものである。

25) 29号墳（付図16、図版19 f）

28号墳の南西約15m程の地点、狭い舌状をなす丘陵の先端部に位置する円墳である。現状でのみかけの径は10.5m～12m程のものである。墳丘の中央部には東南側に開ける径3.5m程の大きな凹みがあり、石室が盗掘を受けていることは明瞭である。古墳の最高点は14.230mで、墳丘の高さは1.5m程のものである。

26) 30号墳

II. 調査の内容

a. 墳丘 (付図17、第27図、巻頭カラー図版4b・4e・4f・ 図版10c・11a・19f・20a・20b・20e・20f)

22号墳から東側に約190m、25号墳から東側に100mの地点に位置する前方後円墳である。前方部は開墾等によって削平を受けて平坦となり、後円部墳裾近くは急傾斜をなしており、若干削平を受けているかもしれないが、全体としては残存状態は良い。前方部は西北西に向き、後円部の南側には幅5m～10m程の平坦な張り出し部分があり、又南側および東側の畦畔等の状況から考えると、この古墳は周溝をもつ可能性が高い。現状での墳丘長は54m、後円部径

は27.5m程、くびれ部幅は15.5m、前方部幅は34mを測る。後円部の中央には径2m程の盗掘壊らしき穴があるが石室にあたっているとは思えない。この穴のため最高点は測っていないが、約26.65m程と考えられる。墳丘の高さは後円部で約8m、前方部は現状で約4mであり、本来は6.5m程の高さがあったものと考えられる。

後円部墳丘上より11点、盗掘壊より1点、前方部では削平を受けて石等を集積していた部分等からかなりの須恵器の破片が出土した。又器台の脚部は調査期間中に中学生が後円部東斜面から採集したものである。

b. 墳丘表採土器 (第28図)

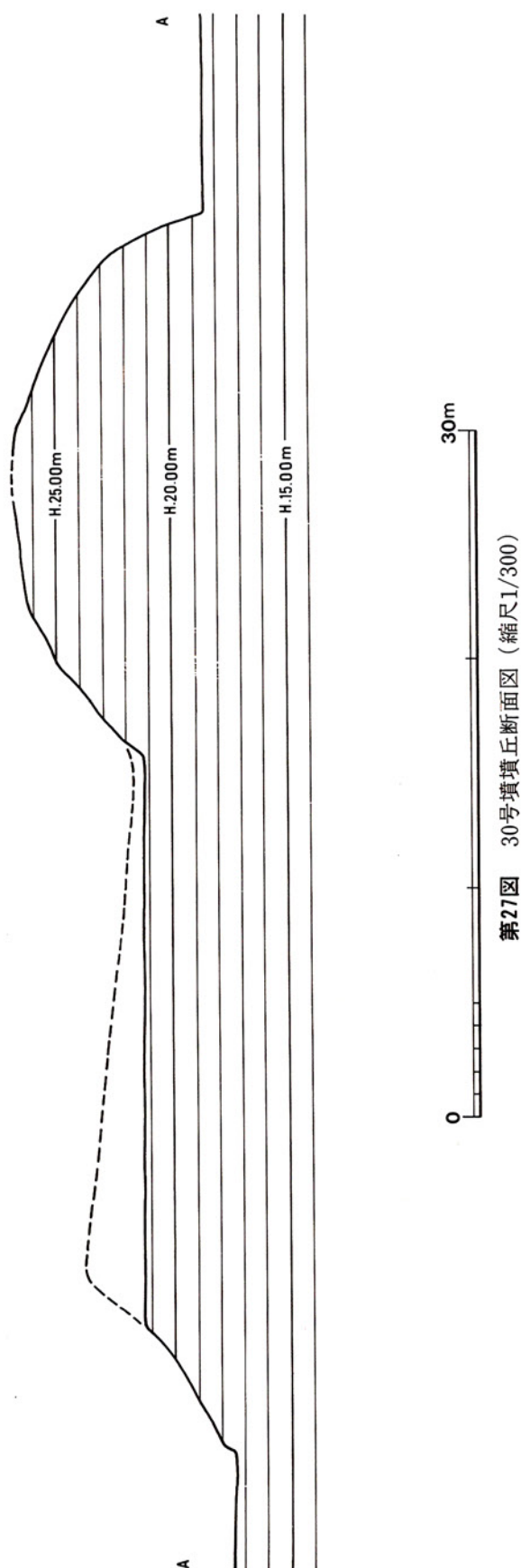
1は後円部で表採された須恵器坏片である。復原口径は13.6m、蓋受けの立ち上りは低く1cm程で内傾している。内面から鐙状凸帯下まではヨコナデ、体部は回転ヘラ削り。灰黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

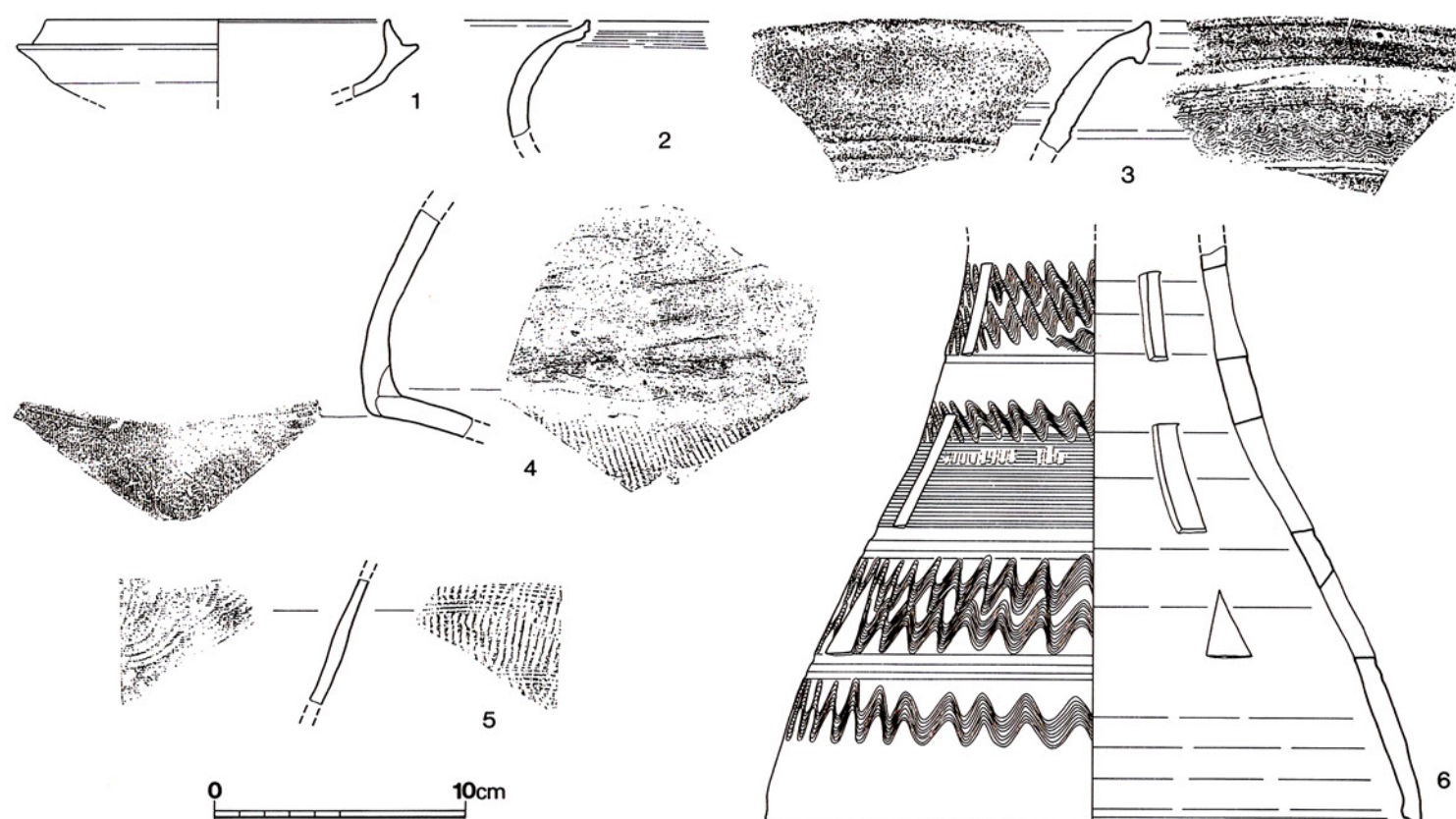
2は甕の口縁片である。外面は縦方向ハケ目風の調整のちヨコナデ、内面はヨコナデ。灰黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

3は甕の口縁片である。口縁下に波状文を施し、その下には凹線をめぐらしている。口縁内外はヨコナデ、頸部内面は粗い回転ナデ、外面の口縁と波状文の間にはカキ目がみられる。内面は暗灰色、外面は灰黄色の自然釉がかかっている。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

4は甕の頸・肩部片である。内面は上部の一部は粗いヨコナデ、頸と肩の境はヨコナデ、頸部内面は粗いナデ、肩部内面は青海波をナデ消している。外面の上部の一部は粗いヨコナデ、頸部は粗いナデ、頸と肩の境はヨコナデ、肩部は平行線タタキを施している。灰黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

5は甕胴部片である。内面は青海波をナデ消すが、半すり消しの状態である。外面は格子目タタキの上から、部分





第28図 30号墳墳丘表採土器実測図（縮尺1/3）

的にカキ目をめぐらしている。暗いあずき色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。

6は器台の脚である。脚上部は細く10.2cm程で中央部で外反し、脚裾はやや内彎している。脚裾の径は26cm。文様帯は4段ありそれぞれ凹線で区切られている。上から2段は方形すかし孔5ヶ所と波状文、3段目は三角形すかし孔5ヶ所と波状文、最下段は波状文のみの文様となっている。上から1段目は波状文が2列から3列、2段目は波状文1列で他はカキ目と一部に平行線タタキ痕が残っている。3段目は波状文2列である。調整はカキ目部分をのぞいてはヨコナデ。内面は灰色、外面は灰黒色で一部自然釉がかかる。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

以上のうち6の器台脚部は、表採というより墳丘より抜き取られたものであり、この古墳の時期を示すものと考えてよい。この器台の特徴は陶邑編年のI型式4段階のものと一致するといえてよいが、脚裾部近くにも波状文を施し、又上から1・3段は2列ないし3列の波状文を施す等、一部I型式3段階の器台脚部にも共通する古い要素も残っているといえよう。したがってこの古墳の築造年代は5世紀の中頃か後半のはやい頃に比定してよからう。

27) 31号墳（付図17・18）

30号墳後円部の南側約40mの地点に位置する。畑と水田の畦畔として古墳が残されており、現状での大きさは8m×13m程であるが本来は円墳であったと思われる。墳丘の中央部は径4m程の大きな凹みがあり南西側に開けており、石室は盗掘を受けていることは明瞭である。古墳の最高点は21.400mで、墳丘の高さは2.5m～3m程である。

28) 32号墳（付図18）

30号墳の南側約60mの地点に位置する。北側は畑により削平を受け、東西側もかなり変形を受けているようである。円墳と思われるが現状からは径は出せない。古墳の最高点は20.845mで、墳丘の高さは2m程である。墳頂部の南側には4m×2.5m程の凹みがあり、また石室の石材らしき石も墳丘上にみられるので盗掘を受けていることはまちがいない。

II. 調査の内容

29) 33号墳 (付図18)

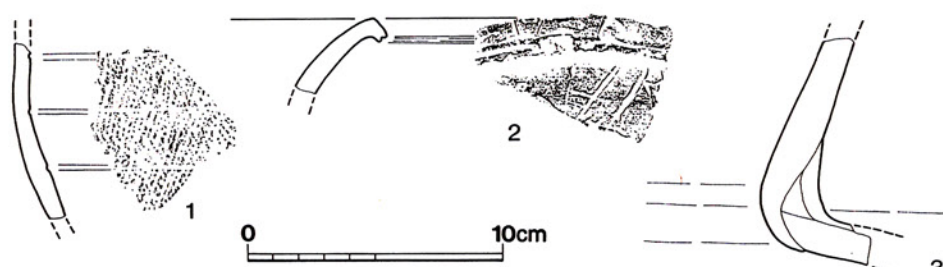
30号墳から東南側へ約95mの地点に位置する。水田の畦畔として残されており、石室の周辺のみが残っているものと思われる。現状での径は8m程で、古墳の東北部には石室の裏の石材が一部露出しており、又西南側は凹んでおり、石室は盗掘を受けていると思われる。古墳の最高点は21.246mで、1m～1.5m程の高さで墳丘が残っている。

30) 34号墳

a. 墳丘 (付図19、図版21a・21b・21c・21d)

30号墳から東へ約140mの地点に位置する。円墳と思われるが東・南・西側の三方を畑・水田によって削平されている。現状での径は18.5m～19.5m程であるが、原状に近いと思われる北側の墳裾部から径を算出すると24m程になる。古墳の最高点は26.559mで、墳丘の高さは5m～5.8m程である。墳丘の中央部には東南方向に開く幅3m、長さ6m程の盗掘壕があり、石室の南側壁天井近くに達している。石室はほぼ西側に開口する横穴式石室で、奥壁には石棚が設けられ、あたかも石室が2段につくられている観を呈している。現在は危険なため土のうで埋めもどしている。

墳丘上から須恵器・土師器等をはじめ、墳頂部からは弥生後期頃のものと思われる大甕の凸帯片、黒耀石塊等が出土している。



第29図 34・35号墳墳丘表採土器実測図 (縮尺1/3)

b. 墳丘表採の土器 (第29図1)

34号墳墳頂部で表採した須恵器甕胴部片である。焼きひずみでゆがんでいる。外面は織目様の格子目タタキの上に沈線をめぐらして、いわゆる縄蓆文としている。内面

はナデ。赤褐色を呈し、いわゆる須恵器生焼けのものである。胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

31) 35号墳

a. 墳丘 (付図19、図版11b・21b・21e・21f)

34号墳の東南約25mの地点に位置する。36号墳と両者あわせて津屋崎町の分布調査番号では27号墳とされ、前方部を南西に向ける現存長43mの前方後円墳とされていた。くびれ部とおぼしき部分にトレンチを入れて確認したわけではないが、全体に間のびがしており、側面観からいっても前方後円墳の可能性は低く、36号墳と別個の円墳とみるのが妥当である。35号墳は34号墳と対面する西北側を畑で1/3程削平され、あたかも前方部端を思わせるが、現状で13m前後の円墳と思われる。古墳の最高点は23.894mで墳丘の高さは1.4m程のものである。

墳丘上からは須恵器片をかなり採集したが、時期決定の材料となるようなものはない。

b. 墳丘表採の土器 (第29図2・3)

2は甕口縁片で、口縁端部は直角に近く外反する。口縁下にはへラ記号がある。内外ともにヨコナデ調整。色は伐木焼却の際、火を受けて煤で黒くなっている。胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良好。

3は須恵器大甕の頸・肩部片である。内外ともにナデ。灰黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は硬く良

好。

32) 36号墳（付図19、図版11b・21e・21f）

35号墳の東南側30m弱の地点に位置する円墳である。35号墳とあわせて一つの前方後円墳であるとされていたことについては先に述べたが、さらに35号墳でのべたことに加えて、墳丘北側にある幅約2m、長さ5.5m程の盗掘壕の排土が、その北側に長さ7m程かき出され、あたかもくびれ部らしき様相を呈していたことも、前方後円墳とされた一つの根拠と思われる。石室はおよそ西側に開口する天井の高い横穴式石室と考えられるが、盗掘壕は石室北壁の天井近くに達している。排土中からは滑石製白玉1個が採集されており、石室は荒らされていることは明らかである。現状での径は16m～17m程で、古墳の最高点は27.001m、墳丘の高さは4m前後のものである。

墳丘上で須恵器片3点・土師器片4点を採集しているが、図示するにたえない。

33) 37号墳（付図20、図版22a）

36号墳の東南約25mの地点に位置する円墳である。現状での径は13m～14m程である。墳丘の中央部は幅4m、長さ6m程の南西に開く大きな凹みがあり、石室が盗掘を受けていることは明瞭である。古墳の最高点は盗掘壕の西北側で25.170m、東南側で25.003mで、墳丘の高さは3m弱である。又この古墳の東南側へ幅3m程、長さ7.5m程、高さ50cm程の張り出し部分があるが、現在のところ性格は不明といわざるを得ない。

墳丘上で須恵器片11点・土師器片1点を採集したが図示するにたえない。

34) 38号墳（付図20、図版22a）

37号墳から東南へ約17m～18mの地点に位置する古墳で円墳と思われるが、現状は畑等によってやや削平を受けて8m×9m程の方墳状を呈している。墳丘の中央部には3.5m×4m程の東北に開く凹みがあり、石室は盗掘をうけていることは明らかである。古墳の最高点は盗掘壕の西北側で23.744m、東南側で23.323mで、墳丘の高さは1.5m程のものである。

墳丘上で須恵器片3点を採集した。うち1点は内外ともに平行線タタキ、1点は外面は平行線タタキ、内面は青海波ナデケシ、他の1点は提瓶かと思われる。

35) 39号墳（付図20）

38号墳の東南29mの地点に位置する。戦後の畑地開墾中に出土したとのことであるが、現在は横穴式石室の天井石が露出するのみで墳丘は完全に除去されている。その後1976年に耕作の障害になるということでこの天井石を除去しようとしたが、横穴式石室であったので、福岡県文化財保護指導委員の永島俊一氏に通報があり、これに立会された永島委員より昭和51（1976）年9月の遺跡（文化財）管理月報および、遺跡（文化財）管理調査報告が提出されている。石室はほぼ西側に開口するものと思われるが、この時点でこの天井石は原状に置かれ、現在に至っている。

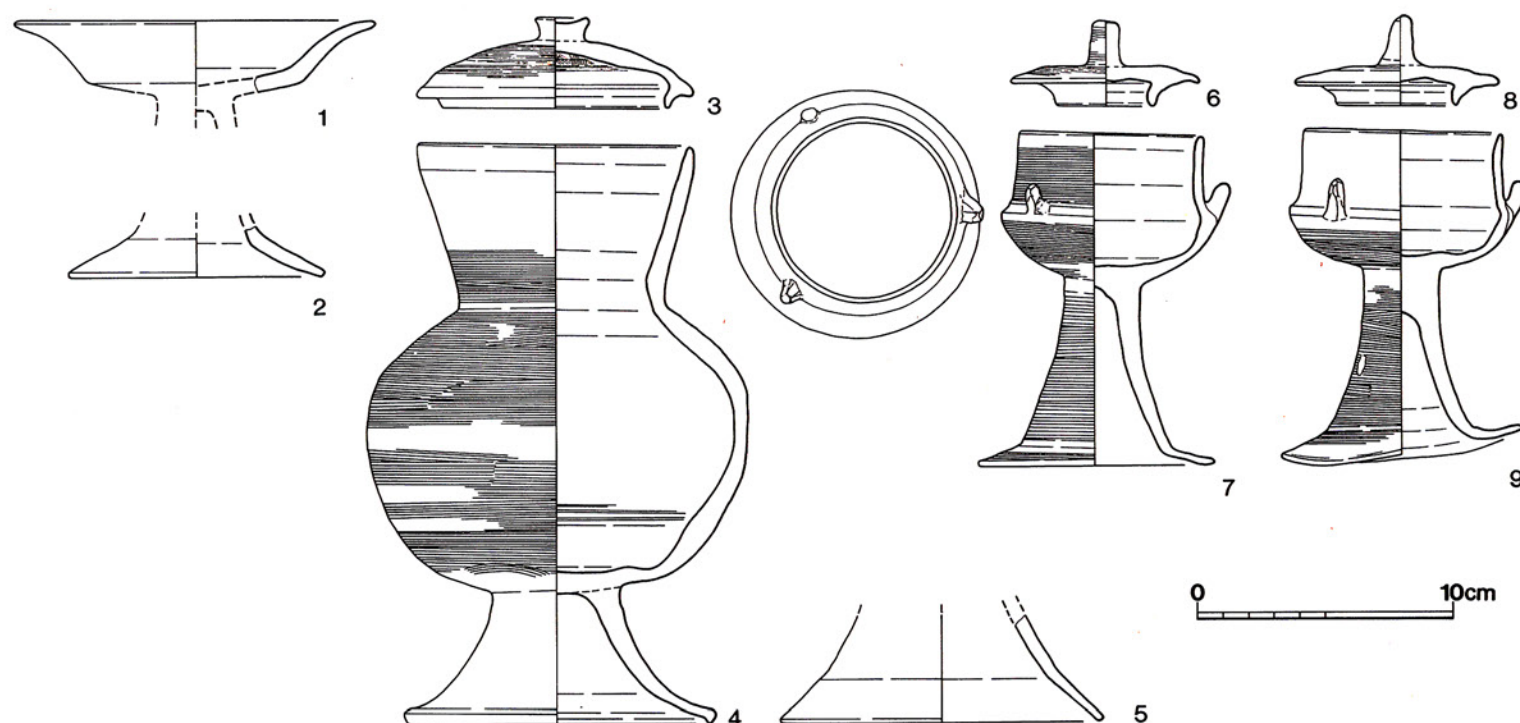
36) 40号墳

II. 調査の内容

a. 墳 丘（付図21、図版11c・22b）

38号墳の東南約100mの地点に位置する円墳である。現状での径は約17m～18mを測るが、主に西側の墳裾部が崖によってやや崩壊している。古墳の最高点は28.532mで、墳丘の高さは北側では約3.5m、南側では約4.4m、東側の畑との比高差は4.67mである。墳頂部に1.5m×3m程の凹みがあるが、この穴が石室に達しているか否かはわからない。

墳丘上より表採したものと、調査期間中に中学生が採集した土器がある。



第30図 40号墳出土土器実測図（縮尺1/3）

b. 40号墳出土の土器（第30図）

以下に図示する土器は40号墳の西側崖面から中学生によって採集されたものであるが、既調査の古墳で明らかなように墳丘上に埋められていたものと考えられる。

1は土師器高坏の坏部片で、復原口径は14cmを測る。器面は風化のため調整法は不明。茶褐色を呈し、胎土には細粒の砂を含み、焼成はやや軟質で不良。

2は1と同一個体と思われる土師器高坏の脚部片である。脚裾径は10cm程に復原できる。器面は風化のため調整法は不明。茶褐色を呈し、胎土には細粒の砂を含み、焼成はやや軟質で不良。

3は須恵器脚台付壺の蓋である。口径は8.7cm、鐙状凸帯の径10.8cm、つまみの径は2.1cm、器高3.6cmを測る。口縁内外はヨコナデ、内面はナデ、外面はカキ目、つまみ部分はナデ。内面は灰色、外面は灰色～灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を含み、焼成は硬く良好。

4は須恵器脚台付壺で器高22.5cm、口径10.7cm、脚裾径12.1cm、胴部最大径14.8cmを測る。内底はナデ、内面の大半および口頸部外面はヨコナデ、頸部下部分および胴部はカキ目を施こしたのち一部に回転ヘラ削りを加える。脚部は内外ともにヨコナデ。内面は灰色、外面は灰色～灰黒色で、胎土にはの砂粒を含み、焼成は良好。

5は須恵器脚台付壺の脚部片と思われる。脚裾径は12.5cmに復原される。内外ともにヨコナデ。内面は灰色、外面は灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を含み、焼成は硬く良好。

6・7・8・9は須恵器の有蓋の有角高坏とでもいおうか、きわめて特色ある土器である。

6は蓋で口径3.9cm、鐙状凸帯の径7.4cm、器高は3.3cm、つまみは円柱状で高く、径1.1cm～1.3cmで高さは1.7cm。

内面の天井部はナデ、内面の大部分および外面の鐙状凸帯の上まではヨコナデ、つまみと天井部はカキ目を施し、つまみ部分にはナデを加えている。内面は灰色、外面は灰色～灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を含み、焼成は硬く良好。

7は有角高坏である。角状の把手らしきものが3ヶ所についている。口径7.1cm、脚裾径9.1cm、器高12.9cmを測る。内底はナデ、内面および口縁外面および把手のつく胴部中央部はヨコナデ、把手はナデ、他はカキ目を施すが、脚部の最上部、脚裾部にはヨコナデを加えている。脚部内面は天井部をナデ、他はヨコナデ。色調は部分的には紫をおびた暗灰色および灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を含み、焼成は硬く良好。

8は蓋で、口径4.3cm、器高3.5cm、鐙状凸帯の径7.9cm、つまみは径0.8cm～1.4cm、高さ2.0cmの円柱状を呈している。内面天井部はナデ、口縁内面から外面鐙状凸帯の上まではヨコナデ、天井部は回転ヘラ削り。つまみ部分はヨコナデ。灰色～灰黒色を呈し、胎土には細粒の砂を含み、焼成は硬く良好。

9は有角高坏で、口縁および脚部には焼きひずみがみられる。坏部が $\frac{2}{3}$ 程、脚部が $\frac{1}{3}$ 程を欠くが、角は7と同様3ヶ所につくものと考えられる。復原口径は7.7cm、脚裾径9.5cm、器高13.0cm。内底はナデ、内面の大半および角の下部まではヨコナデ、角はナデ、他の部分はカキ目を施すが、脚部の最上部および脚裾はさらにヨコナデを加えている。脚部内面は天井部をナデ、他はヨコナデ。色調は一部紫を帯びた暗灰色および灰黒色で、胎土には細粒の砂を含み、焼成は硬く良好。

これらの土器が既調査の古墳同様、墳丘中に埋められていたことは明らかで、40号墳の時期を示す好資料といえる。しかし6～9は類例に乏しく、1・2の土師器高坏、3・4の有蓋・脚付壺等は、5号墳の土師器高坏、および脚はないが須恵器壺⁽¹⁾等に共通した点等が認められ、ほぼ同時期つまり6世紀中頃から後半頃に比定されるものと考えられる。

註1 津屋崎町教育委員会「奴山古墳群」津屋崎町文化財調査報告 第3集 1981

37) 41号墳（付図21、図版22b）

40号墳の東南約19mの地点に位置する円墳である。現状での径は約10m、古墳の最高点は25.369mで、墳丘の高さは西北側で約1.2m、東・南側の畑との比高差は1.9m～2m程である。墳丘上より2点の須恵器片を採集している。

38) 42号墳（付図21、図版22b）

41号墳の東南約19mの地点に位置する円墳である。現状での径11.5m程を測るが、東南側約 $\frac{1}{3}$ 程が削平を受けている。墳丘中央部には幅3m、長さ5m程の凹みがみられ、石室が盗掘を受けていることは明らかである。古墳の最高点は25.485mで、西北側畑との比高差は約2.1mである。墳丘上より2点の須恵器片を採集しており、内面には青海波が明瞭なものである。

39) 43号墳（付図21、図版22b）

42号墳から東南へ約28mの地点にあり、水田・畑の畦畔として石室の周辺部のみが残されている。したがって古墳の大きさはわからない。現状での最高点は23.888mで、東側の水田との比高差73cm程、南側の水田との比高差3m程を測る。

44号墳・45号墳は40号墳の東側に谷を挟んだ小舌状台地があり、その台地上に営なまれているが（第2図）、今回の調査では対象としなかった。

Ⅲ. 新原・奴山古墳群の成立と変遷

1. 古墳群の開始期と大形古墳の築造の順位

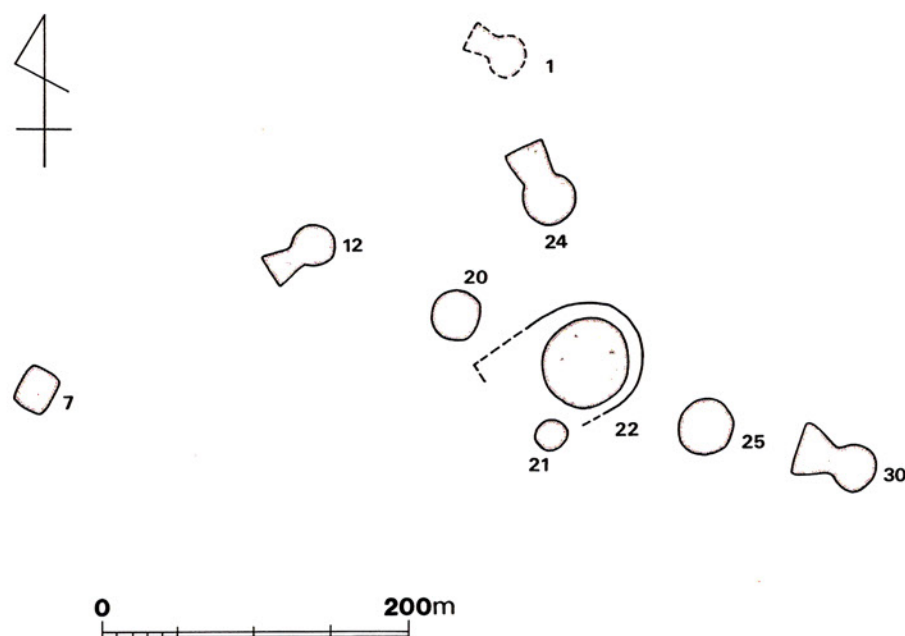
新原・奴山古墳群では22号墳がその規模が最も大きく、この古墳群の最初に築造されたものと思われよう。ところが21号墳との関係でみると、21号墳が先に存在し、それを意識したかのように周溝が完結していない。したがって22号墳が21号墳より後出することは明らかといえよう。21号墳の周溝内からは池の上Ⅲ式に比定される須恵器と土師器高坏の脚高が低く、脚柱の身のつまったもの、及び口縁が内彎気味の小形丸底壺等があり、これらは5世紀前半代のはやい頃に位置付けられる。

22号墳は埴輪に登り窯で焼かれたと思われる、表面は灰黄色、胎土内は青灰色を呈し、器壁が薄く、焼成は硬質のものが存在し、須恵器出現以後に置かれることはまちがいない、同様の埴輪を出土する甘木市茶臼塚⁽¹⁾、甘木市古寺1号墳⁽²⁾等の例から5世紀前半代に位置付けて大過なく、又、西に隣接する20号墳出土の須恵器が陶邑編年のⅠ型式2段階頃に併行するとみられることから、これよりもやや先行する年代を考えて、5世紀前半代の中葉頃に位置づけた。

7号墳表採の須恵器は陶邑編年のⅠ型式1段階および2段階頃に併行するものと思われ、この古墳が方形の低墳丘であること、墳丘上に玉砂利を敷き琥珀原石・鉄斧等が散布し、沖ノ島の祭祀遺跡にも共通するところがあり、通常の古墳とは異質であり、新原・奴山古墳群の築造開始にあたって祭壇を兼ねた古墳ではなかろうかと考えられる。この古墳の年代は5世紀前半代の中葉頃に位置付けられる。したがって7号墳と22号墳は同時期の築造といえよう。

次に20号墳より表採もしくは葺石間より採取された須恵器は甘木市小田茶臼塚に併行もしくは陶邑編年のⅠ型式2段階頃に併行するものがみられ、5世紀前半代に位置付けられ、22号墳・7号墳よりも後出するものと思われ、いずれかというとな5世紀前半代の中葉～後葉頃に位置付けたい。

1号墳出土の大甕および把手付高坏は陶邑編年のⅠ型式3段階に比定され、5世紀前半代のおそい時期に位置付けてよからう。小札鋌留式の冑、鋌留式の短甲、桂甲小札等の他の出土遺物もこの年代と矛盾するものではない。



第31図 前方後円墳および大形墳の変遷 (縮尺1/5,000)

21号墳→22号墳→20号墳→1号墳→30号墳→12号墳
 7号墳 24号墳 25号墳

24号墳は22号墳と1号墳の間であって、その築造の年代も両者の中間頃に推定して大過なかろう。20号墳と同時期かやや後出するものかもしれない。

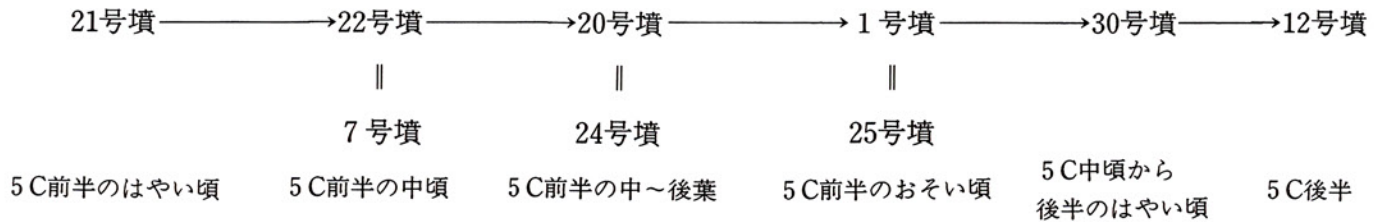
25号墳表採の須恵器のなかにはⅠ型式3段階に属するものがあり、1号墳とほぼ同時期の築造であろうか。

30号墳は後円部東側斜面より出土した器台脚部から陶邑編年のⅠ型式4段階のものと共通する特徴をもち、そのなかでやや古い要素が認められた。これらのことから30号墳は5世紀の中頃から後半のはやい時期に位置付けられる。

12号墳は時期を推定し得る資料に欠くが、以上述べてきたこれらの古墳に後出することはまちがいない、5世紀後半に

位置付けて大過なからう。

以上をまとめると下記のとおりである。



15号墳・34号墳・36号墳・40号墳等比較的大きな円墳はその後40号墳出土の土器に示される6世紀の中頃まで継続して営まれたこれらの前方後円墳、大形古墳の後裔であった可能性が強い。しかしながらその他の円墳は調査されたものをみる限り、6世紀中頃、ないしは6世紀中頃～後半に位置付けられており、この頃から開始される群集墳として被葬者の階層も古墳の性格も異なるものと考えられ、これらの前方後円墳および大形古墳の系列の中で把握すべきものではないと考える。

2. 新原・奴山古墳群における大形古墳の規模

第32図に22号墳・24号墳・30号墳・1号墳・12号墳の前方後円墳および25号墳・25号墳の墳丘断面を示した。

新原・奴山古墳群においては22号墳が中心の位置を占め、又その規模も最大である。前方部端の確認ができてはいないが、西北側くびれ部を検出し、前方後円墳であることはほぼまちがいない。後円部の径は54m、周溝を含めた径は74m、高さは7.8mを測る。前方後円墳としての墳丘長は75～80m程と推定され、周溝を含めた全長は95～96m程のものと推定される。周溝のまわりにはさらに周堤をもつ部分もあり、当初この地に古墳を築造した「宗像君」の権力を示すかのように威容を誇ったものであろう。

22号墳の後円部径と墳丘長がほぼ同じものが24号墳と30号墳である。

24号墳は現状の墳丘長53.5mで、前方部の周溝が埋まっており、若干は大きくなり、ほぼ54m程になると思われる。現状での周溝を含めた長さは65.5m程であるが、前方部の周溝が後円部と同じくらいの幅であるならば62～63mが周溝を含めた本来の長さであろうか。後円部の径はトレンチ調査の結果をふまえると、約31mのもので、墳丘の高さは7m弱、前方部の幅は28.5m、前方部の墳丘の高さは5m弱を測る。

30号墳は後円部墳裾の傾斜が強く、若干削平を受けている可能性もあるが、現状での墳丘長は54m、後円部径は現状で27.5mを測るが、本来は30m程のものであろうか。後円部の墳丘の高さは約8m、前方部の幅は34mである。

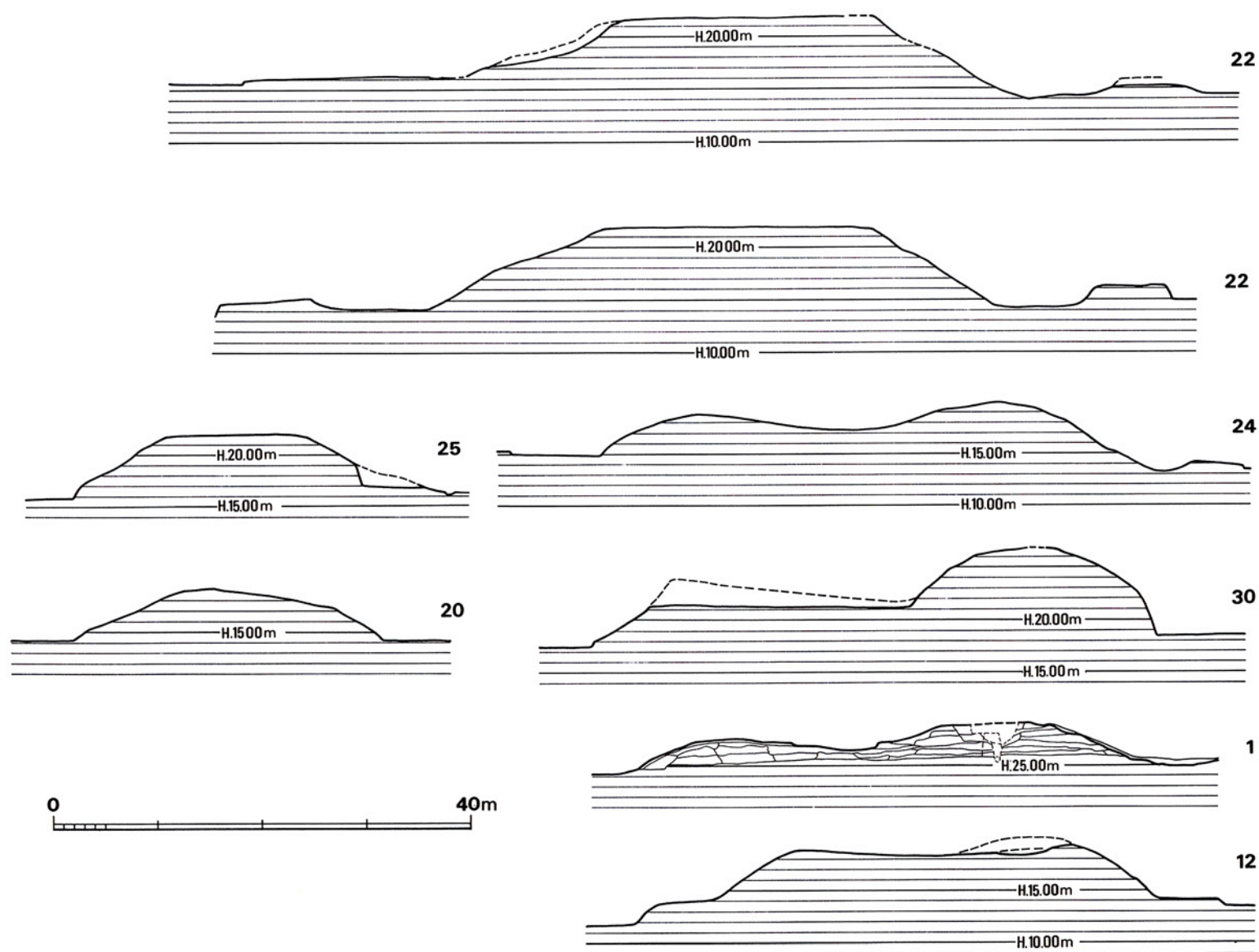
1号墳の墳丘長は50mを測り、後円部径は約29mに復原されている。後円部の墳丘の高さは4m。前方部は31m程に復原されているが24号墳・30号墳の例等からしたらもう少し狭くなるのでなかろうか。

12号墳は墳丘長43m、後円部径25m、前方部幅29.5m、後円部の高さは現状で約5.1mを測り前方部との比高差がわずかであるが、後円部墳頂に盗掘壊らしき凹みがあり、本来はもう少し高く6m程のものと推定できよう。又墳裾周辺はテラス状の平坦面があり、この部分を含めた長さは54m前後を測る。

大形円墳としての25号墳は、トレンチ調査の結果をふまえて約35～36mの径をもつものと考えられる。墳丘の高さは6m前後である。

20号墳は現状での径約29mの大形円墳で、墳裾部が若干の削平を受けているので本来は30mをいくらか越すものと思われる。墳丘の高さは5m強を測る。

以上のことから22号墳の後円部径と、24号墳・30号墳の墳丘長および12号墳のテラス状平坦面を含めた全長などが54m前後であり、又1号墳の後円部径・24号墳の後円部径、30号墳の後円部径、20号墳の径、および12号墳の前方部幅等が30m前後といえる。これは墳丘測量の結果であり、発掘すればもっと明瞭な数値が出るものと思われるが、こ



第32図 墳丘規模比較図（縮尺1/600）

これらの間に相関関係すなわちある一定の規準が存在したことが理解される。これ以上の詳細な点は、任にあわないので、ある一定の規準が存在したという指摘に留めておこう。

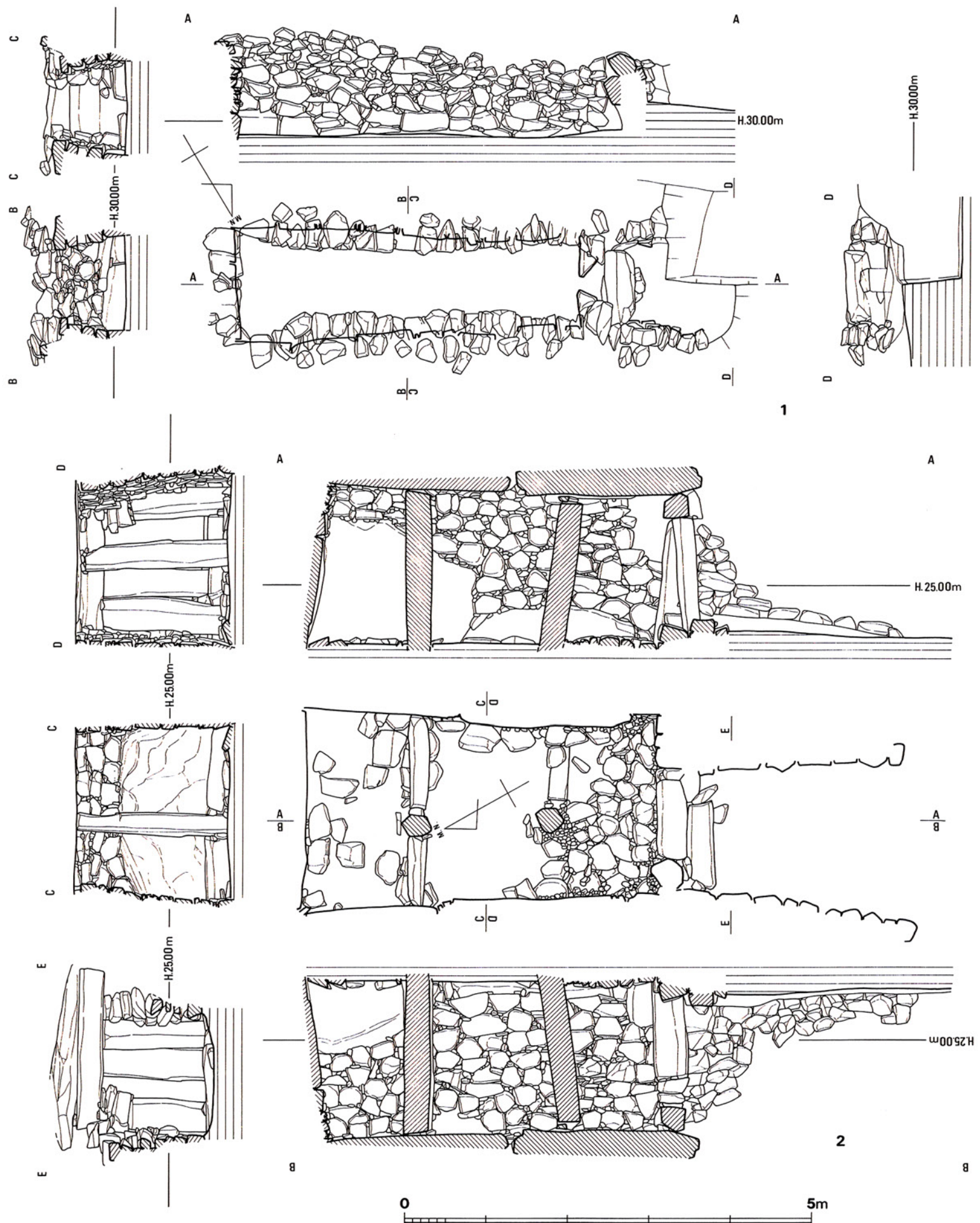
3. 周辺大形古墳との関係

——特に勝浦古墳群との時間的対比——

津屋崎町内の前方後円墳と大形円墳のなかで調査された古墳は勝浦地区に所在する津屋崎10号墳・41号墳の2基である。又いままでこの両者が津屋崎町内に築造された、最初の古墳であるとされてきた⁽³⁾。以上のことからこの両古墳をみながら、特に時間的対比を行なってみたい。

10号墳・41号墳ともに主要地方道北九州・芦屋・福岡線の改良工事に伴って1975年度に事前調査が実施された⁽³⁾。10号墳は、前方部を南西に向ける3段築成の前方後円墳で、その前方部だけの調査が行なわれているが、墳丘長70m、後円部径37m、前方部幅37m、後円部の高さ7mとされている。前方部先端近くに主軸に直交して北西方向に開口する竪穴系横口式石室が存在した。石室は第33図に図示したが、長さ4.2m、幅は奥壁部で1.35m、横口部で0.95mを測る。残存する石室の高さは1.3mで、天井石は盗掘によって持ち去られているが当初の高さもほぼこれと大差ないとき

3. 周辺大形古墳との関係



第33図 勝浦所在 津屋崎10号墳・津屋崎41号墳石室実測図（縮尺1/60）

1. 津屋崎10号墳前方部石室 2. 津屋崎41号墳石室

れている。壁面には赤色顔料を塗布し、床面には玉砂利を敷いた痕跡が認められている。横口部は石室の腰石に用いたものと同じ位の大きさの石材を2段、横積みして閉塞としている。墓道は床面よりも約50cm程高く、墓道の閉塞に接して左側には3段積みの壁面が1m程、右側には0.4m程の壁面が羨道部状に設けられている。

Ⅲ. 新原・奴山古墳群の成立と変遷

石室は盗掘を受け攪乱されているが、おびただしい量の鉄器をはじめ下記のような多数の遺物が出土している。

武器 鉄矛11 石突2 矛以外の石突6 桂甲小札約3000 桂甲金銅張小札51 短甲片 三尾鉄（横矧板鋌留衝角付冑片も）2 太刀1 鉄鏃160以上

工具 鉄斧2

馬具 三環鈴1 鉄地金銅張杏葉10個 木心鉄板被壺鐙1対 木製鉄板被輪鐙1対 鉄地金銅張鋌留金具22 鋌留金具10 鉸具10 轡2 金銅張磯金具若干 銅製鞆2 鞍金具若干 その他

装身具 六葉形金具等である。

前方部墳丘下には方形住居跡3棟が検出され土師器等が出土している。報告書では5世紀初頭頃に位置付けているが、出土の高坏は坏部の立上りが高く、脚部には円形すかし孔を穿つ等古い要素がみられ、今日では4世紀後半頃に位置付けられていることは前述したところである。したがってこれを上限として、下限を示すものは横矧板鋌留短甲・桂甲・三環鈴・木心鉄板被壺鐙・輪鐙等であり、10号墳前方部の竪穴系横口式石室は新原・奴山1号墳とほぼ同時期のものとして大過なからう。後円部主体部は調査されていないが前方部主体部に先行することは当然で、これより若干上る時期が津屋崎10号墳の築造年代として把握される。

津屋崎41号墳は10号墳の西側約90mの地点に位置し前方部をほぼ西側に向ける前方後円墳である。墳丘はかなり削平を受けているが、全長97mに復原される。後円部の現状の高さは6.8m。古墳の規模としては津屋崎町内で最大のものである。

石室は後円部南西側にあり、西南西に開口する単室の横穴式石室である。石室は第33図に示したが、長さ4.3m、幅は奥壁部で2.5m、横口側で2.15mのいわゆる羽子板状の平面形を呈する。壁はほぼ直に1.8m積上げ、天井石を2枚架構している。石室前面には丈の低い石積の墓道が開き気味に3.15m程のびている。石室内には玄武岩の柱状節理した石材を用いて、石室主軸上にあたかも石室を3等分するかのように石柱2本がたてられている。又奥の石柱は、これを中心として柱状の石材をもって仕切りとし屍床をつくっている。石室内は壁面から天井まで赤色顔料が塗られ、墓道の石積にまでおよんでいる。

石室は盗掘を受けていたが、おびただしい量の遺物が出土している。又石室内に須恵器もあったというが、調査直前に盗掘を受けたという。出土品は下記のとおりである。

鏡 画文帯神獣鏡・内行花文鏡・珠文鏡等7面

武器 鹿角製装具付太刀40以上 鹿角装具付剣4 素環頭大刀又は剣1 銀製鞘尻金具1 鉄鏃300本以上

武器 短甲片

工具 鹿角製装具付刀子6 刀子21

装身具 銅釧1 ガラス連玉6 ガラス玉10.565 琥珀棗玉92以上 琥珀勾玉8 碧玉管玉4 硬玉勾玉1 瓔珞5 ガラス管玉1

時期を決め得る須恵器を失なったことは残念といえるが出土遺物の点からいうと、桂甲片を伴わず津屋崎10号墳よりも津屋崎41号墳が古いといえる。又石室の形態は新原・奴山1号墳とほぼ共通した平面・断面形をなしており、この津屋崎41号墳が規模が大きい。

これらの古墳の新旧関係については津屋崎10号墳前方部石室→津屋崎41号墳→新原・奴山1号墳（津屋崎17号墳）⁽³⁾として把握されてきたと理解している。しかしながら以上みてきた関係から言えば、

津屋崎41号墳→津屋崎10号墳前方部石室

Ⅱ

新原・奴山1号墳

の順とみるのが妥当であると考え。そして津屋崎10号墳後円部主体部と津屋崎41号墳とはいずれが先行するかは、現状ではわからない。以上のようにみると津屋崎41号墳は新原・奴山20号墳等と同様の時期とみてよからう。もし津

屋崎10号墳後円部主体部が津屋崎41号墳に先行したとしても、新原・奴山古墳群の築造開始期より遡ることはなく、ほぼ同時期頃と捉えて大過ないものとする。

したがって勝浦の古墳群が津屋崎町内の前方後円墳・大形墳として最初に築造を開始したとは言えないが、両者ともに墳丘規模が大きく、新原・奴山22号墳と津屋崎10号墳がほぼ同規模、津屋崎41号墳は100m級の古墳でさらに大きい。生家・大石・須多田の前方後円墳が調査されていないのでこれらの古墳群の開始期、正確な規模等がわからないので何ともいえないが、ほぼ同時期に築造を開始し、規模に大小が認められるのは「宗像君」一族内部における階層差を示すものであろうか。津屋崎町内の古墳の調査が進むにつれ、今後解明すべき課題の一つといえよう。

4. 前方後円墳・大形円墳を主体とする古墳群成立の背景

これまでみてきたところによると「宗像君」一族による津屋崎町における古墳群の築造開始は5世紀前半の中葉頃勝浦、新原・奴山等に突如として出現してきたという感じを与える。以前も5世紀後半頃と年代観が異なるとはいえ、ほぼ同様な説明が行われてきた。「宗像君」一族の本拠地は津屋崎町より北・北東側の宗像郡玄海町田島および宗像市東郷など釣川流域であったことはいうまでもない。前方後円墳を築ける首長一族が何故、本拠地から離れた地を墳墓の地として選定するに至ったのであろうか。同様な現象は北部九州の各地ではほぼ時期を同じくして起こっているが、ここでは福岡県糸島郡前原町三雲周辺の前方後円墳の変遷と、「筑紫君」一族の古墳群として著名な八女丘陵における前方後円墳を中心とした変遷を例にとりあげて若干説明を加えたい。

三雲遺跡は中国史書にいうところの「伊都国」の中心地にあたり、三雲南小路遺跡は文政5（1822）年に甕棺が発見され、棺外から有柄銅剣・銅戈・小壺・棺内より前漢鏡35面・銅矛大小2・勾玉1・管玉多数・ガラス璧が出土したことが青柳種信の「柳園古器略考」に詳細に述べられている。⁽⁴⁾ 又1979年～1982年にかけて福岡県教育委員会による三雲遺跡の調査が行われ、南小路では1822年の出土品が追認され、さらに詳細な出土品の明細が明らかになるとともに金銅製四葉座飾金具も新たに追加された。同時に2号甕棺が新たに発見され、青雲鏡1・連弧文「昭明」銘鏡4・重圈「昭明」銘鏡1・連弧文「日光」銘鏡16以上等の前漢鏡、ガラス垂飾1・ガラス勾玉12・硬玉勾玉1等が出土した。⁽⁵⁾

又隣接する井原ヤリミゾの甕棺からは後漢鏡21面以上、巴形銅器等が出土し、弥生時代中期後半から後期にかけて既に「伊都国」の盟主的首長権をこの聚落の首長が獲得していたことを示している。

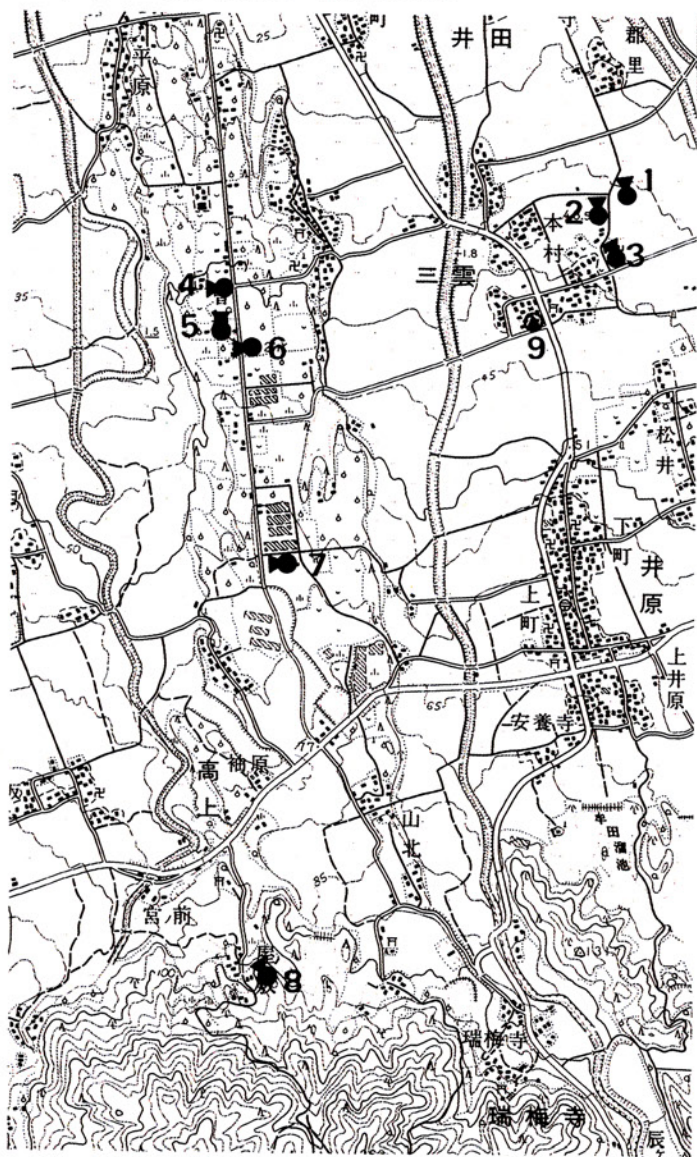
三雲の聚落の東側に現在端山古墳・築山古墳の2基があるが、柳田康雄氏は茶臼塚古墳がこれらの北側にあったという古記録を示してこの古墳をサキゾノ地区にある古墳の残骸にあてている。⁽⁷⁾ 茶臼塚古墳は現存する両古墳との新旧関係は確定されていない。端山古墳は、墳丘長78.5m、周溝を入れた全長100m程の前方後円墳で出土の土器および墳丘形態から4世紀中頃に考えられている。築山古墳は墳丘長約70m、周溝を入れた全長100m余に復原されている前方後円墳で出土の土器から成立の時期を4世紀末～5世紀初頭に推定されている。

以上のように弥生時代以来の「伊都国」の盟主的首長権は古墳時代にも継承され4世紀末～5世紀初頭頃までに、本拠地集落の縁辺に前方後円墳3基が築造された。

ところがこの直後から三雲の西側に南北に走る曾根丘陵へと古墳が移っている。すなわち5世紀になると曾根丘陵が墳墓の地と選定されているのである。曾根丘陵における古墳の築造順については、ワレ塚古墳→銭瓶塚古墳→狐塚古墳（円墳）→高上大塚古墳と考えられており、ワレ塚から狐塚までが5世紀前半代、それ以後が5世紀後半代と推定されている。⁽⁷⁾⁽⁸⁾

八女丘陵の古墳群は三雲周辺の古墳と異なり、その前身がどこか明確ではなく、それこそ突如としてという表現のとおり出現をする。石人山古墳は八女丘陵の前方後円墳の中で最も古いもので、最近まで5世紀後半頃と考えられてきた。ところが近年石人山古墳出土の須恵器実測図が公表され、⁽⁹⁾ それらのうち、器台・甕等の特徴は池の上Ⅲ式の範疇に属するもので、橋口の編年観によれば、5世紀前半代のはやい頃に位置づけられる。⁽¹⁰⁾

Ⅲ. 新原・奴山古墳群の成立と変遷



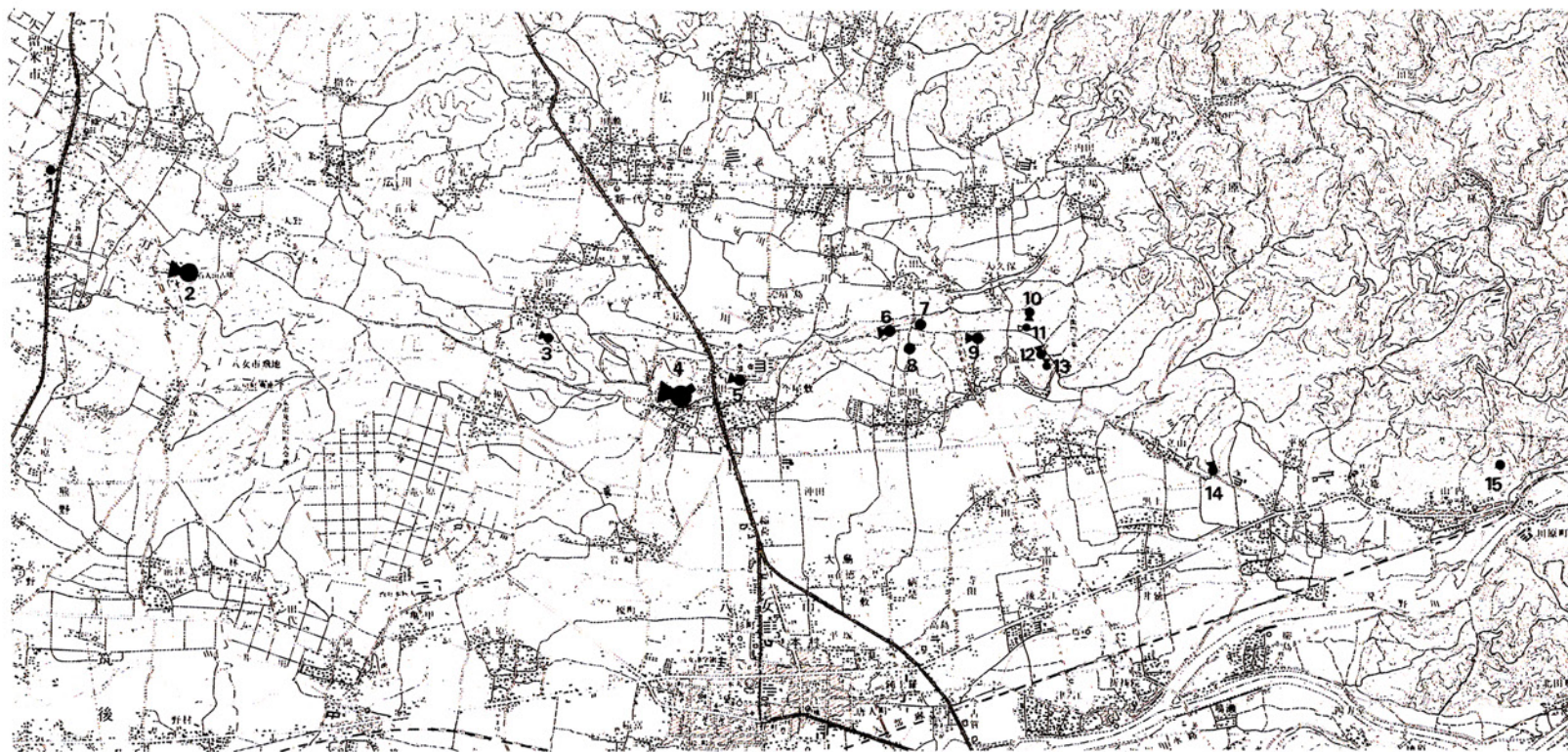
第34図 糸島郡前原町三雲周辺の前方後円墳の分布 (縮尺1/25,000)

1. 茶臼塚古墳 2. 端山古墳 3. 築山古墳 4. 先山古墳
5. ワレ塚古墳 6. 銭瓶塚古墳 7. 高上大塚古墳
8. 屋敷1号墳 9. 三雲南小路遺跡

石人山古墳から八女丘陵の前方後円墳の築造が開始され、筑紫国造磐井の墓として著名な岩戸山古墳等11基の前方後円墳がほぼ西から東へと順を追って築かれ、最終的には6世紀末頃と考えられている童男山古墳（円墳）で八女丘陵の前方後円墳・大形古墳の終焉をむかえる。

以上の例からもわかるように5世紀前半代に盟主的酋長墓たる前方後円墳がある一定の場所を選定し、築造されるようになる現象は北部九州では普遍的現象として捉えられる。ところが5世紀前半頃にはこれらと軌を一にするかのように二つの現象がみられる。一つは、弥生時代後期後半頃から古墳時代前期にかけて低地における聚落の爆発的増大といえる現象が、5世紀前半頃を境に急激に衰退していく。低地における聚落の増大とは低地における水田可耕地開発に伴ない、水稲耕作による人口の急激な増大に対応していたことはいうまでもない。ところが聚落は低地では衰退しているが、拠点聚落以外は山際もしくは丘陵部へ押しやられたような状況で立地を変えて出現している。これは低地の聚落跡地をも水田化し、生産性を向上させるという強制的手段であった。

他の一つは弥生時代以来築きあげられた水系を単位とする地域的まとまり、すなわち農業共同体の一般的酋長墓と考えられる低墳丘の小方墳・円墳の造営がI型式2・3段階の須恵器を出土し、竪穴系横口式石室を導入した頃に終焉をむかえるということである。



第35図 八女丘陵における前方後円墳・大形古墳の分布 (縮尺1/50,000)

1. 瑞王寺古墳 2. 石人山古墳 3. 神奈無田古墳 4. 岩戸山古墳 5. 乗場古墳
6. 善蔵塚古墳 7. 茶臼塚古墳 8. 丸山塚古墳 9. 鶴見山古墳 10. 釘崎3号墳
11. 庚申塚古墳 12. 釘崎2号墳 13. 釘崎1号墳 14. 立山丸山古墳 15. 童男山古墳

4. 前方後円墳・大形円墳を主体とする古墳群成立の背景

聚落を低地から山際や丘陵上へ押しやられ、一般的首長は古墳をつくるのをやめさせられ、盟主的首長墳たる前方後円墳でさえもある一定の生産性の低い場所を選定して築造させるというこのような現象はまさに強権力による規制としかいいようがなく、北部九州における普遍的現象であるところから考えても、この強権力こそまさに中央権力によるものであったといえよう⁽¹¹⁾。

津屋崎町においても、勝浦の津屋崎10号墳墳丘下には4世紀後半頃の住居跡が存在し、この段階に勝浦の地にも聚落が存在し、狭小な谷水田に依拠し、漁業をも営んでいたものかと推測される。

新原・奴山地区は奴山川が形成するやや大きな谷水田に依拠し、この水系を単位とした地域的まとまりがはやくからつくられていたものと考えられる。さきに調査された津屋崎13号墳（奴山5号墳）は、径32mの円墳で、内部主体は箱式石棺であった。石棺は盗掘を受けていたが石棺外からは短剣・短刀・鉄剣等多数・工具類・三角板革綴短甲片・玉類多数等の他、墳丘より陶質の器台等が出土している⁽¹²⁾。出土土器の年代からすると器台は池の上Ⅱ式に位置付けられ、土師器からも4世紀末～5世紀初頭頃のものと考えられる。

新原・奴山21号墳周溝から出土した須恵器はこれにつづくもので、津屋崎13号墳（奴山5号墳）、新原・奴山21号墳は奴山川の形成するまとまりに依拠した在地小豪族の古墳であった可能性が強い。そこへ中央権力の強制を受けた「宗像君」一族が、在地小豪族を押しつけ、その地に前方後円墳を築くこととなったが、これがほぼ時期を接していたために、又同一氏族内の小豪族であったがためになおのこと、新原・奴山21号墳を意識して、22号墳の築造がなされたと推測される。

古墳築造を断念せねばならなかった在地勢力は6世紀中頃から始まる群集墳の造営まで約100年余の間、古墳をつくることはなかった。生家・大石・須多田等はほぼ新原・奴山古墳群と様相を同じくしている。

ところが在自・宮司等は勝浦から須多田等、津屋崎町北部、中部とは様相が異なる。在自・宮司地区等、津屋崎町南部においてはまず前方後円墳がなく、「宗像君」一族のものと推定されるのは宮地嶽奥の院の古墳が知られるのみである。そして弥生前期初頭の今川遺跡が存在し、弥生前期以来、一部現在福岡町に属する地域を含めて、津屋崎町内の他地域に比してかなり広域のまとまりが形成され、古墳時代には在自名吞、新堤等で方形周溝墓・箱式石棺等があり、又宮地嶽神社禊池の南側には径30m前後の周溝をもつ古墳等があり、その勢力も無視できないものであると同時に、生産性が高いという点から言っても、在自・宮地等の津屋崎町南部は「宗像君」一族の前方後円墳の地として当初選定されなかったものと考えられよう。

註1 甘木市教育委員会「小田茶臼塚古墳」甘木市文化財調査報告 第4集 1979

2 甘木市教育委員会「古寺墳墓群」Ⅱ 甘木市文化財調査報告 第15集 1983

3 福岡県教育委員会「新原・奴山古墳群」福岡県文化財調査報告書 第54集 1977

4 青柳種信「柳園古器略考」 1822

5 福岡県教育委員会「三雲遺跡」南小路地区編 福岡県文化財調査報告書 第69集 1985

6 青柳種信「柳園古器略考」 1822

7 柳田康雄「第2章 糸島の古墳文化」福岡県教育委員会『三雲遺跡』Ⅲ 福岡県文化財調査報告書 第63集 1982

8 前原町教育委員会「曾根遺跡群」前原町文化財調査報告書 第7集 1982

9 川述昭人「付編 石人山古墳出土異物」筑後市教育委員会『瑞王寺古墳』筑後市文化財調査報告書 第3集 1984

牛島英俊「筑後石人山古墳出土の陶質土器」古文化談叢 第15集 1985

10 橋口達也「北部九州における陶質土器と初期須恵器——近年の成果を中心に——」甘木市教育委員会『古寺墳墓群』Ⅱ 甘木市文化財調査報告 第15集 1983

11 橋口達也「聚落立地の変遷と土地開発」東アジアの考古と歴史 中 1987

12 津屋崎町教育委員会「奴山5号古墳」 1978

謝 辞

本報告書は短時日で作成したために多くの方々に多大の御迷惑をかけた。豊福弥生さんには挿図・付図の製図で、大田育子さんには遺物の実測・原稿の清書で、矢野明美さんには写真の焼付で無理な注文を引き受けていただいた。最後になりましたが、感謝の意を表します。

版 図



新原・奴山古墳群全景空中写真（1982年5月国際航業撮影）



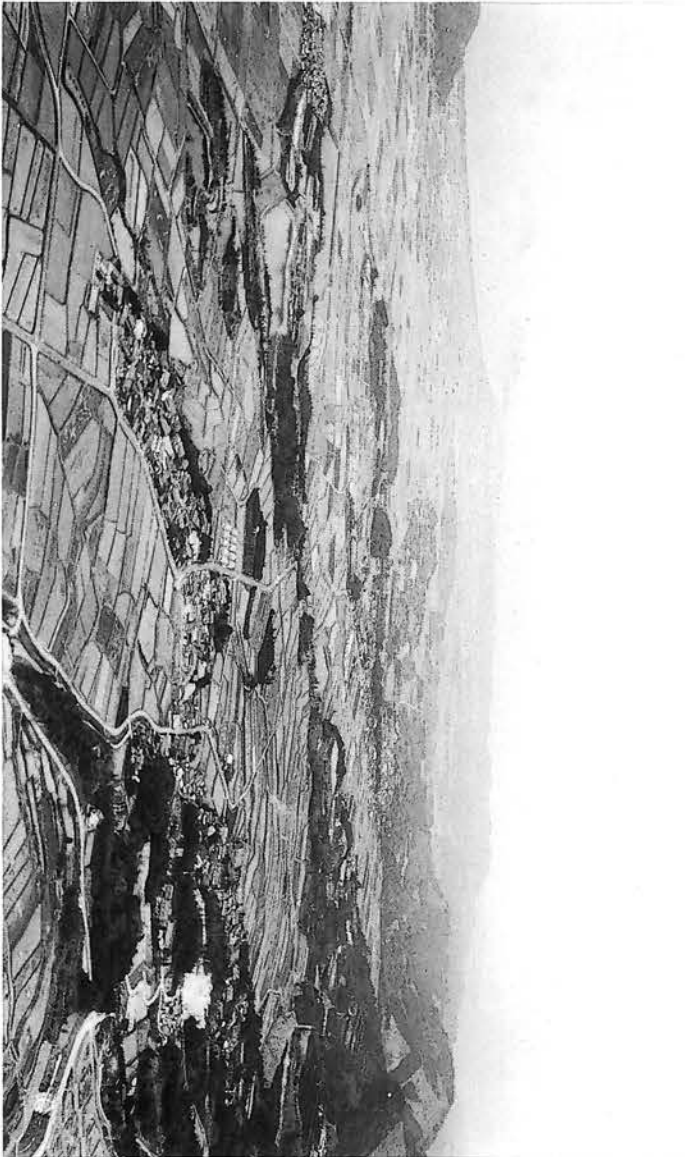
a. 新原・奴山古墳群を西上空から望む 1975年11月撮影



b. 新原・奴山古墳群を西上空から望む 1975年11月撮影



c 生家,新原・奴山古墳群を南上空から望む 1975年11月撮影



a 津屋崎の古墳群を官司上空から望む 1975年11月撮影



d 新原・奴山古墳群を北上空から望む 1975年11月撮影



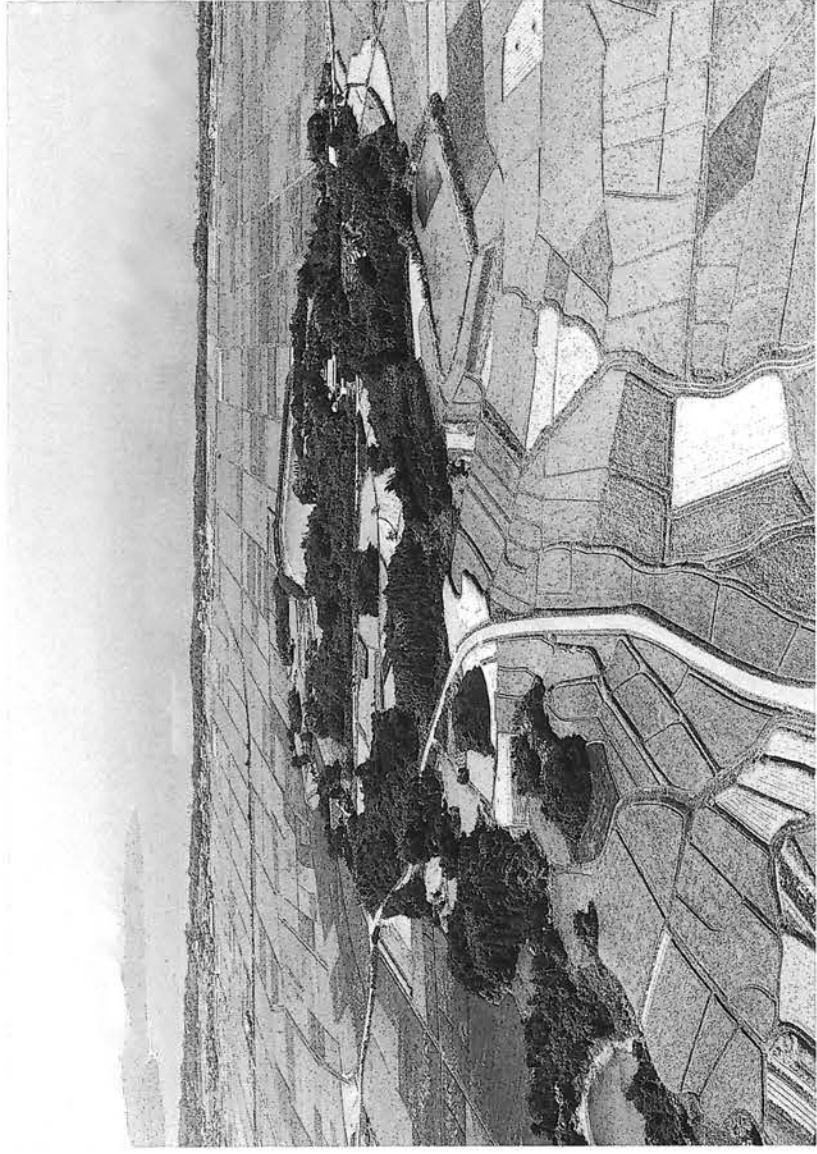
b 津屋崎の古墳群を在自上空から望む 1975年11月撮影



c 新原・奴山古墳群を西上空から望む 1975年11月撮影



a 新原・奴山古墳群を南上空から望む 1975年11月撮影



d 新原・奴山古墳群を東上空から望む 1977年9月撮影



b 新原・奴山古墳群を西南上空から望む 1975年11月撮影



a 1・2号墳全景（発掘前）



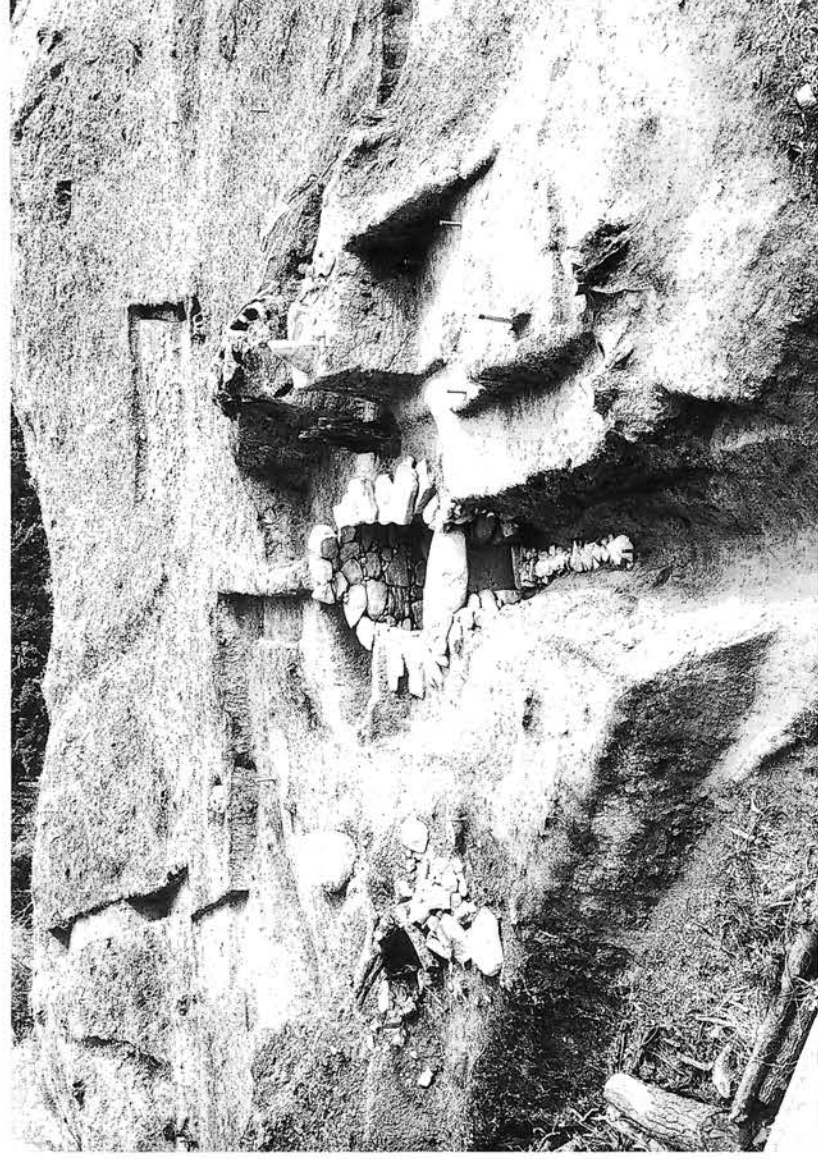
b 1・2号墳全景（発掘後）



c 1号墳後円部墳丘縦断面



d 2号墳全景（発掘前）



a 2号墳全景（発掘後）



b 3号墳石室全景



c 4号墳全景



d 4号墳石室全景



c 5号墳墳丘全景



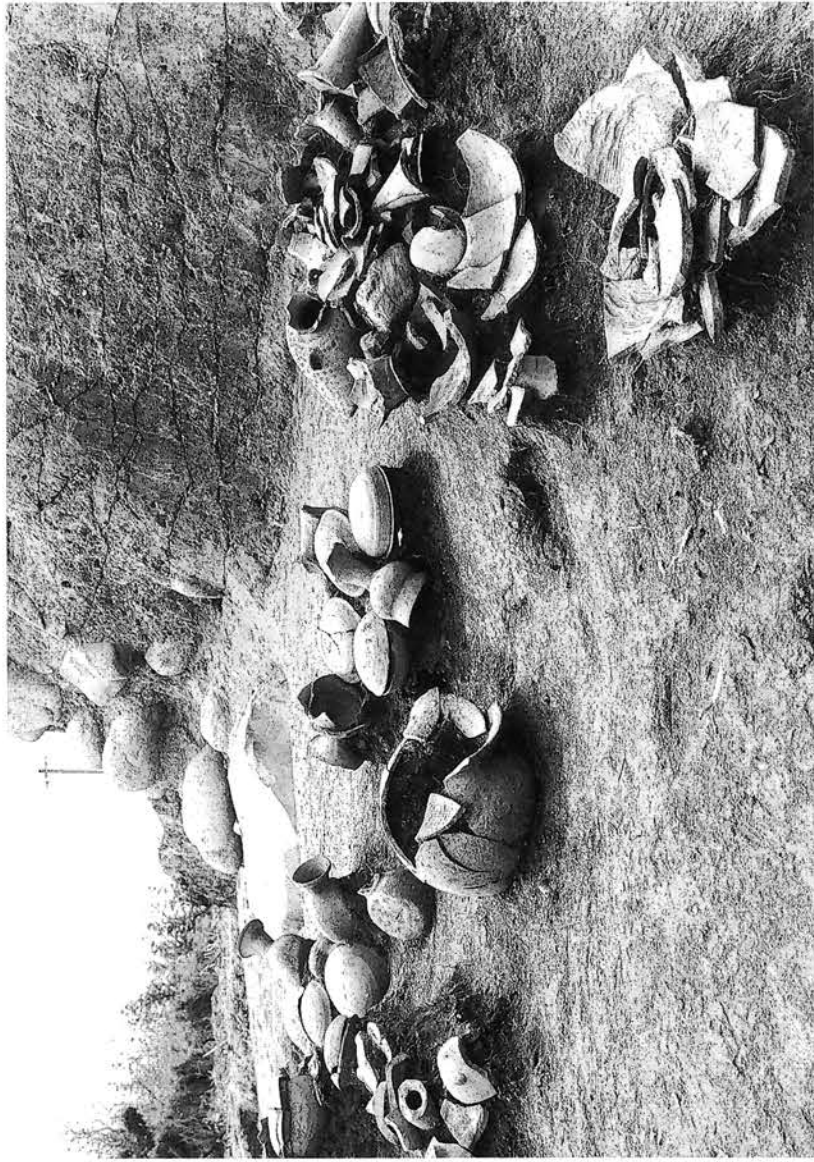
a 5・6号墳全景



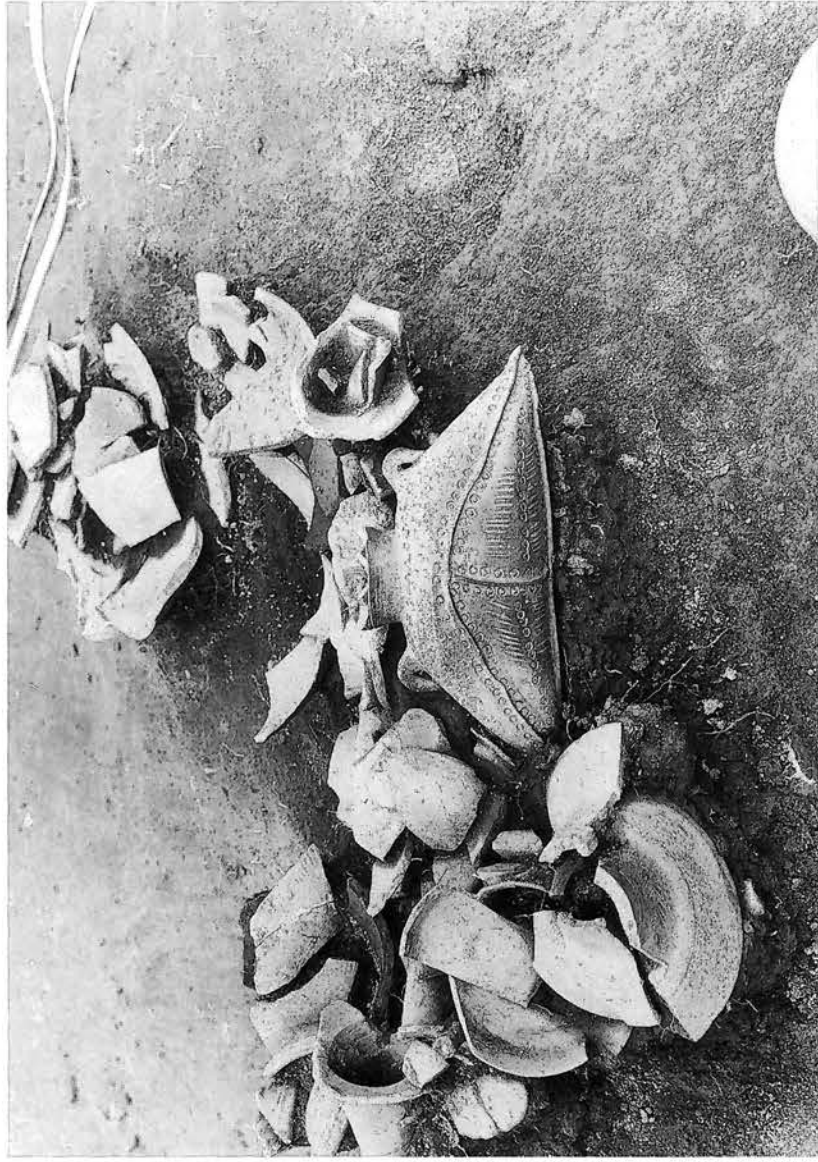
d 5号墳土器出土状態



b 5号墳全景



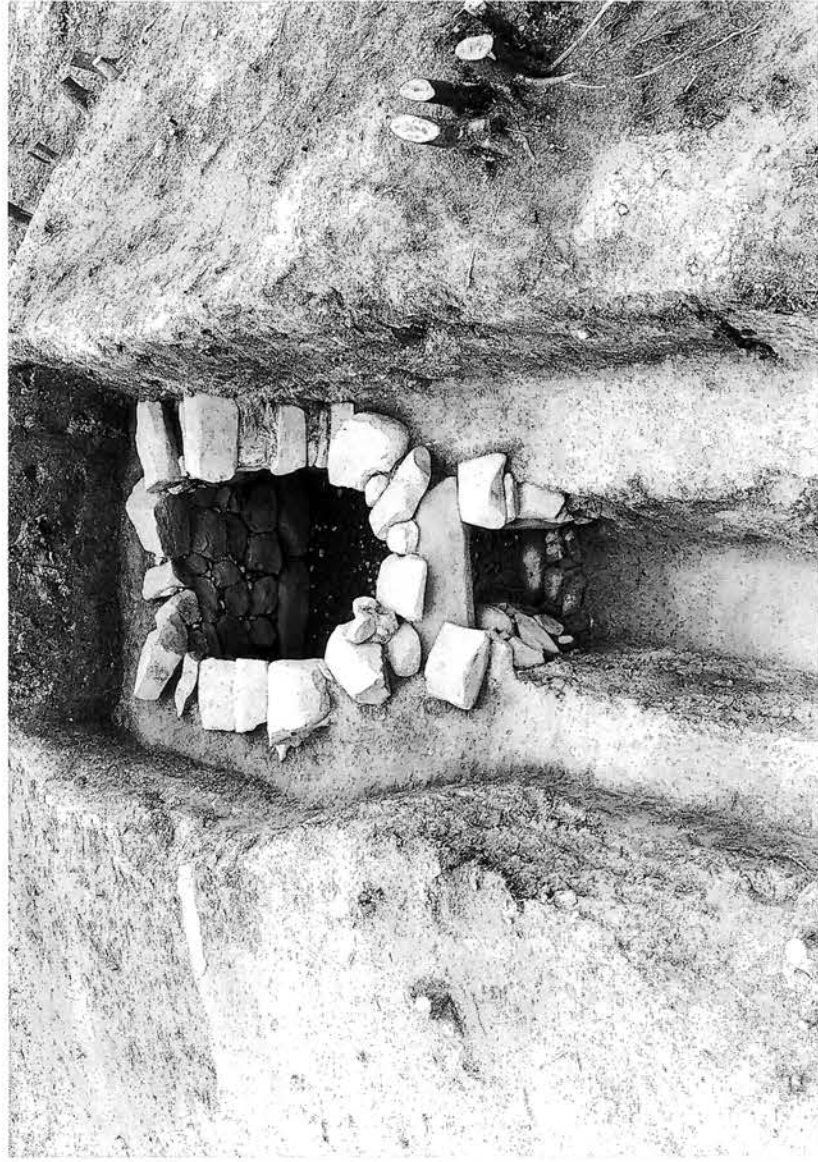
a 5号墳土器出土状態



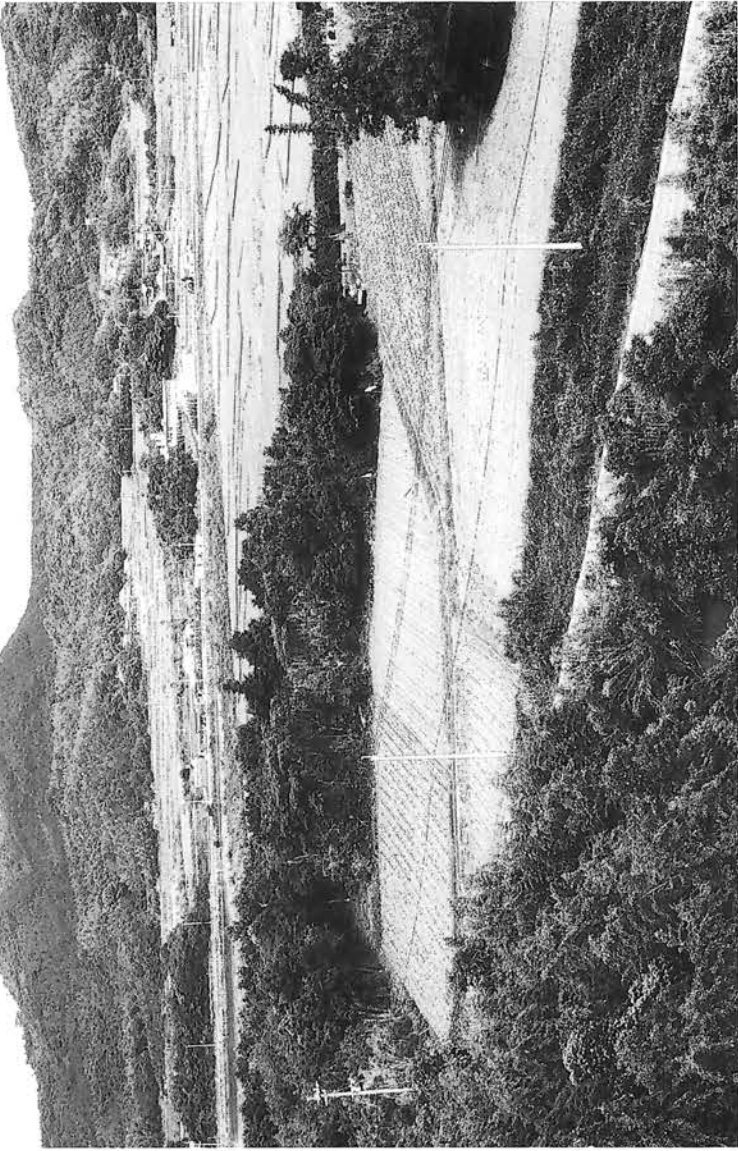
b 5号墳土器出土状態



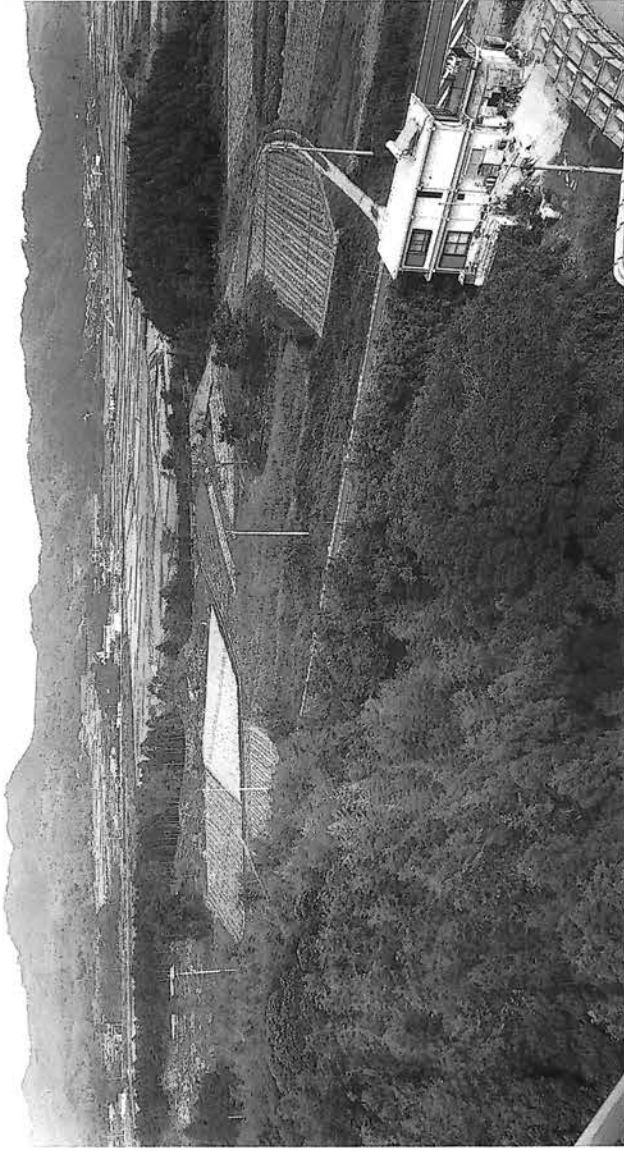
c 6号墳全景



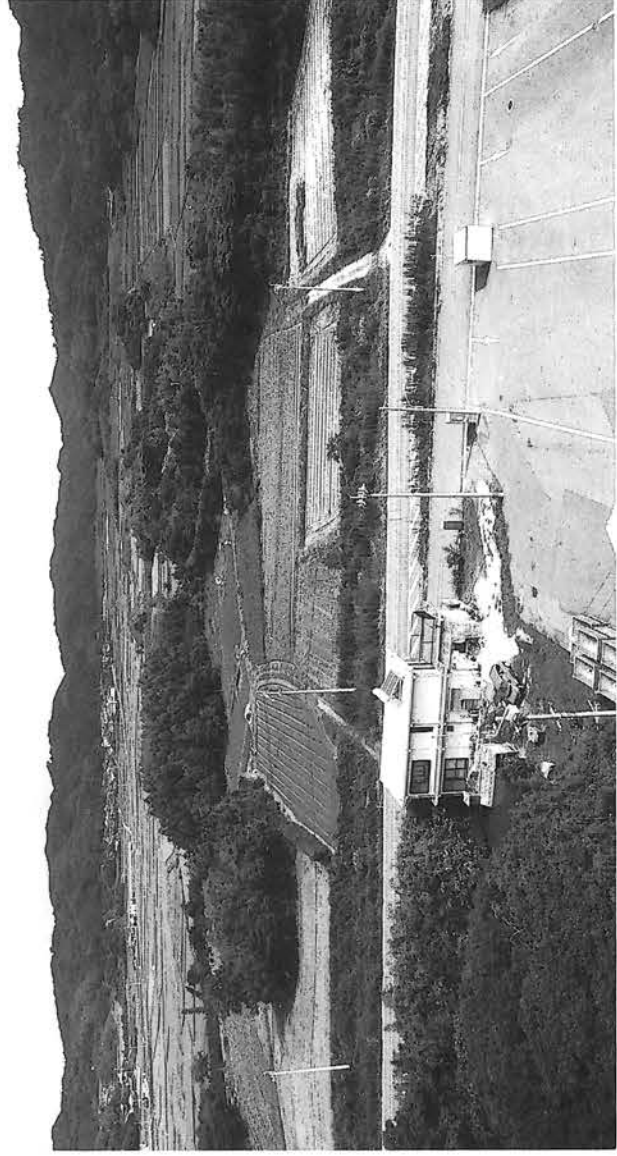
d 6号墳石室全景



c 24号墳を西南から望む 1986



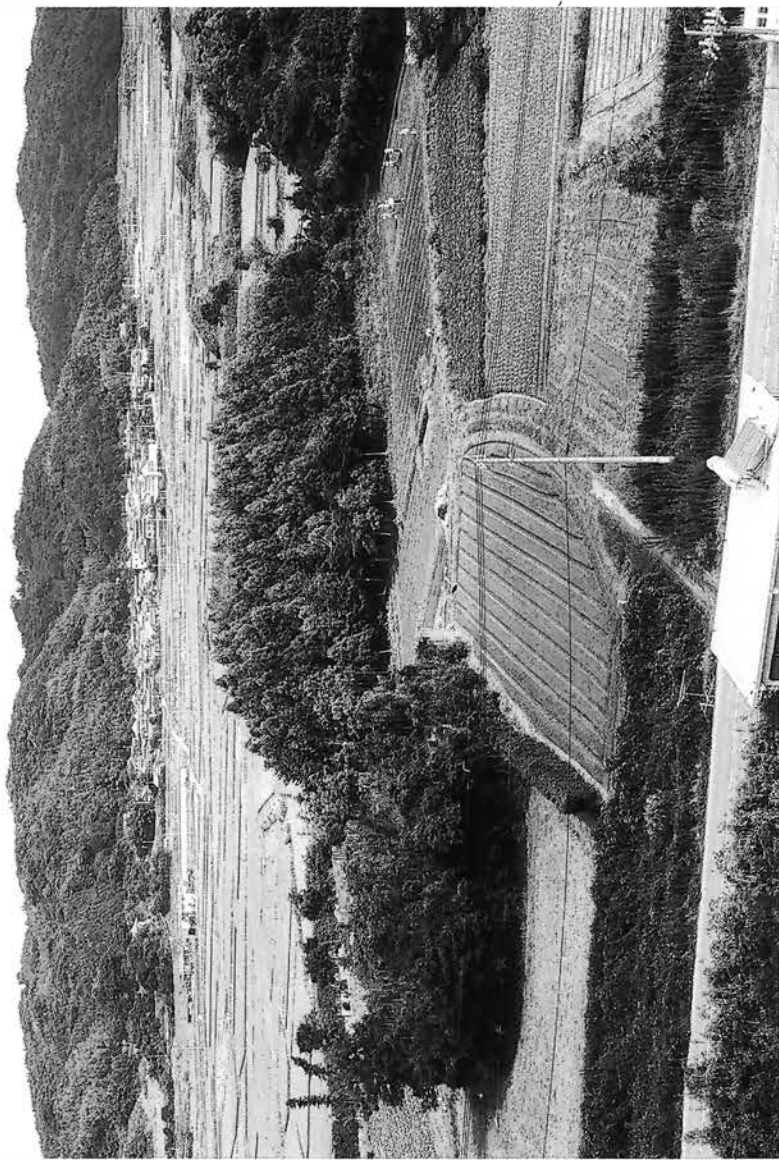
d 20・22・24号墳を西南から望む 1987



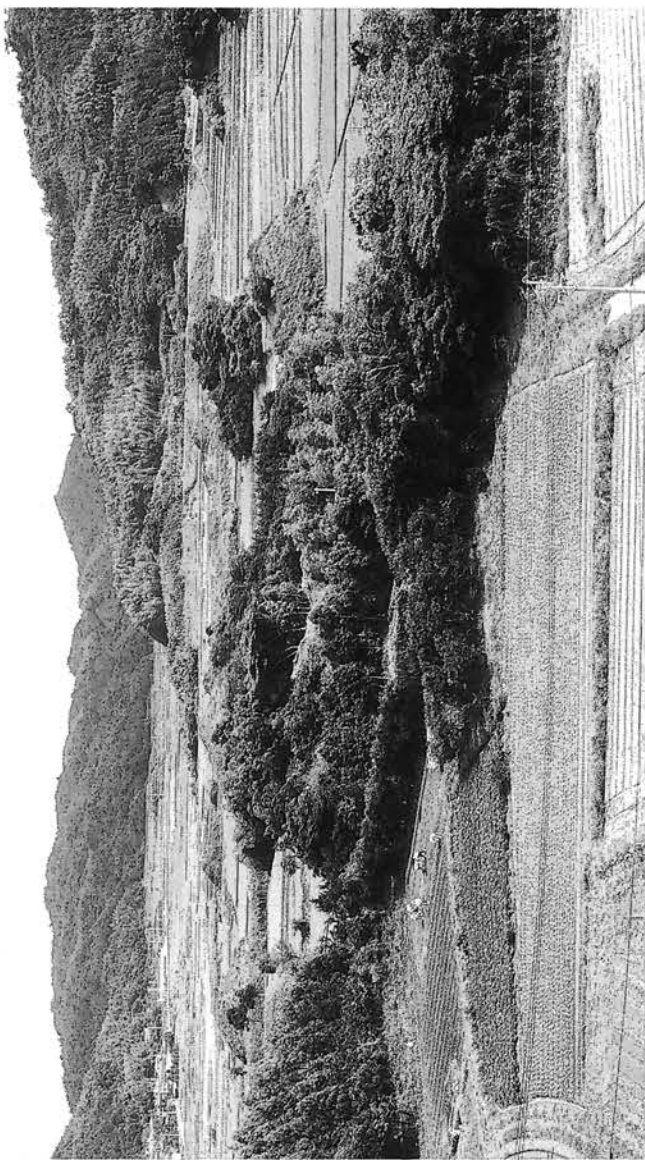
a 20・21・22号墳等を西から望む 1986



b 15号墳周辺および21・22号墳を西から望む 1987



a 20・22号墳を西から望む 1986



b 21号墳等を西から望む 1986



c 25・30号墳を北から望む 1986



d 25号墳を西北から望む



a 30号墳を北から望む 1986



b 35・36号墳を東北から望む 1986



c 40号墳を東北から望む 1986



d 新原・奴山古墳群を東南から望む 1986



a. 21号墳第1トレンチ



b. 21号墳第1トレンチ



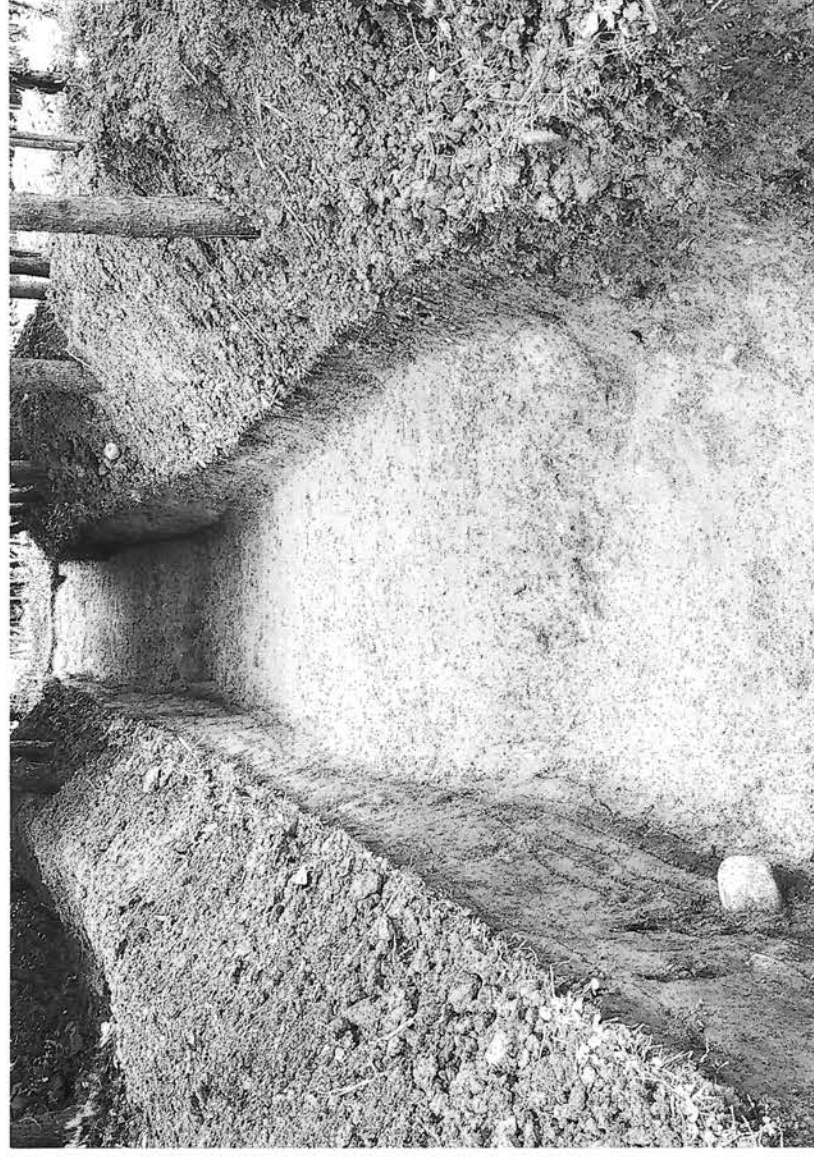
c. 21号墳第3トレンチ



d. 21号墳第4トレンチ (写真右側が上である)



c 22号墳第1トレンチ墳丘の上段



a 22号墳第1トレンチ（前方部）墳丘の2段築成



d 22号墳第1トレンチ墳丘の下段



b 22号墳第1トレンチ墳丘の上段



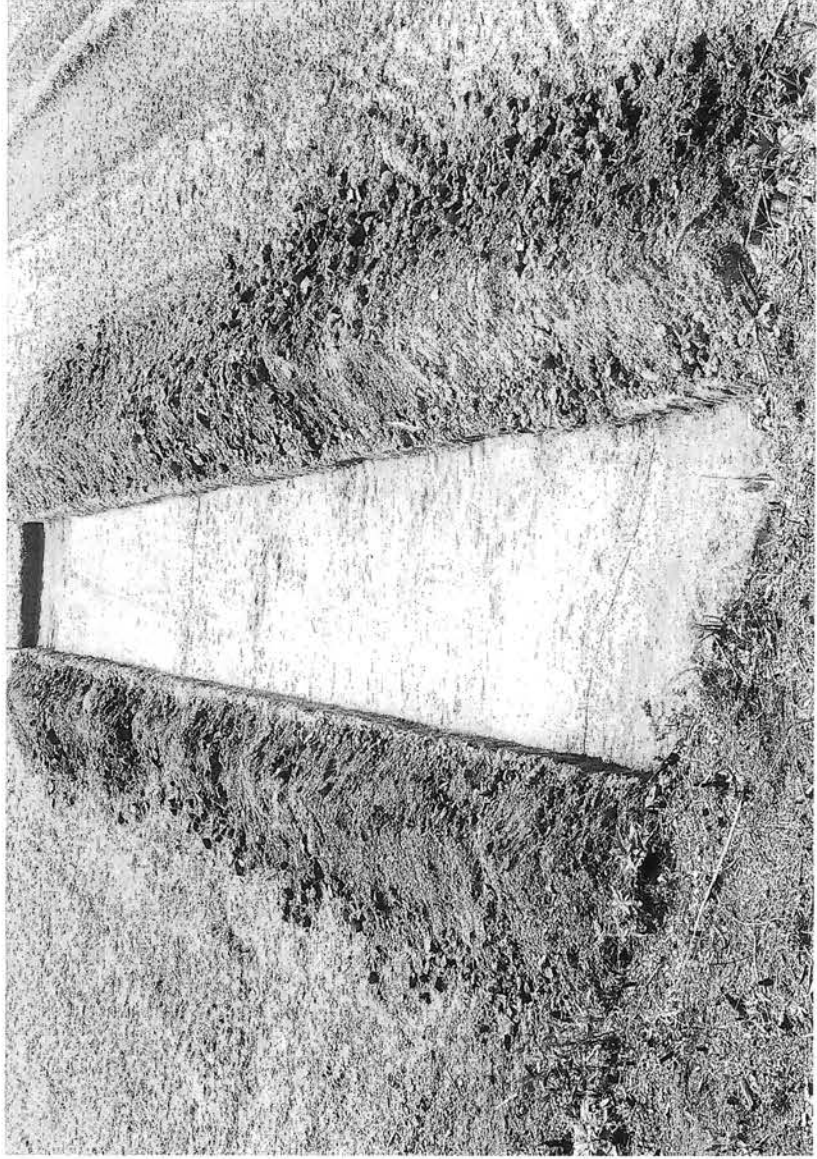
a 22号墳第1トレンチ墳丘下段



b 22号墳第4トレンチ



c 24号墳第1トレンチ



d 24号墳第2トレンチ



c. 25号墳第1トレンチ葺石の残存状態



a. 25号墳第1トレンチ周溝検出状態



d. 25号墳第2トレンチ



b. 25号墳第1トレンチ 墳丘上から（写真右側が上である）

a 7・8号墳空中写真 一九八八



b 7号墳空中写真 一九八八



c 7・8・9・10号墳空中写真 一九八八



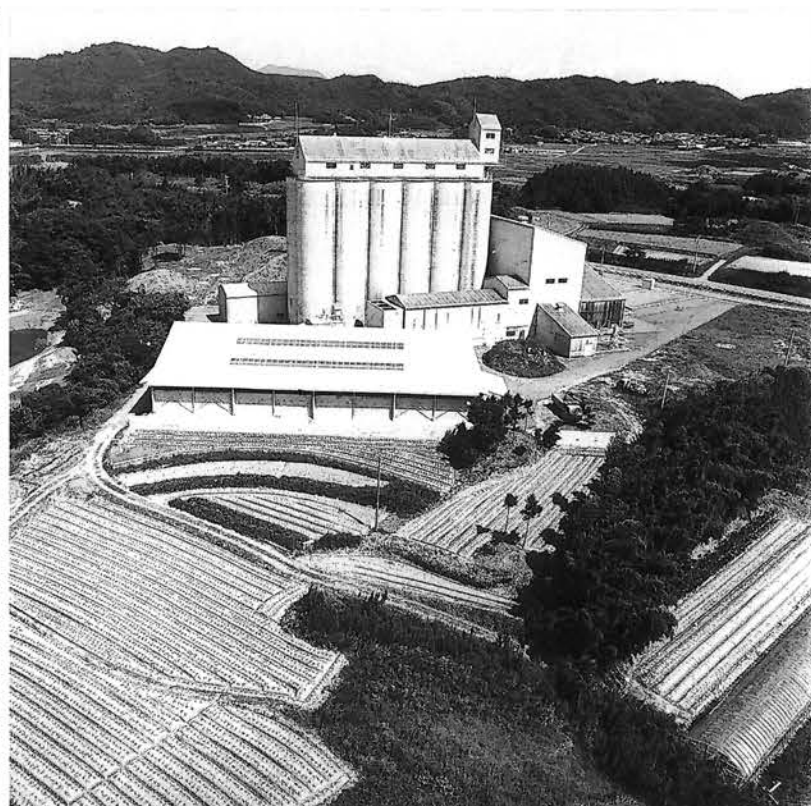
d 7号墳空中写真 一九八八



e 9・10・11号墳空中写真 一九八八



f 9・10・11号墳空中写真 一九八八



a
12・13・14号墳空中写真 一九八八



b
12号墳空中写真 一九八八



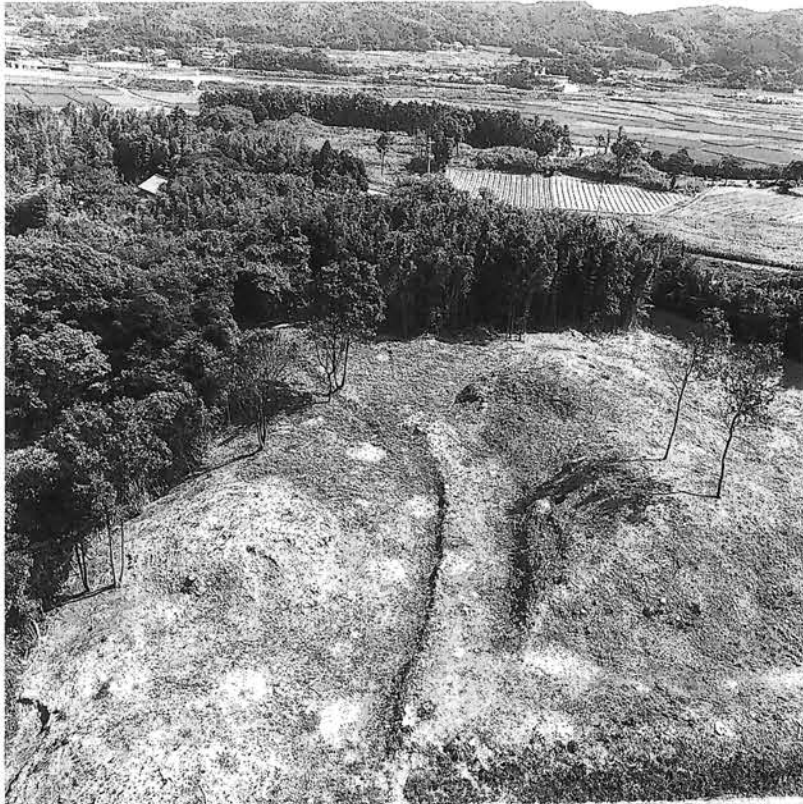
c
12・14号墳空中写真 一九八八



d
12・13・14号墳空中写真 一九八八



e
12・13・14号墳空中写真 一九八八



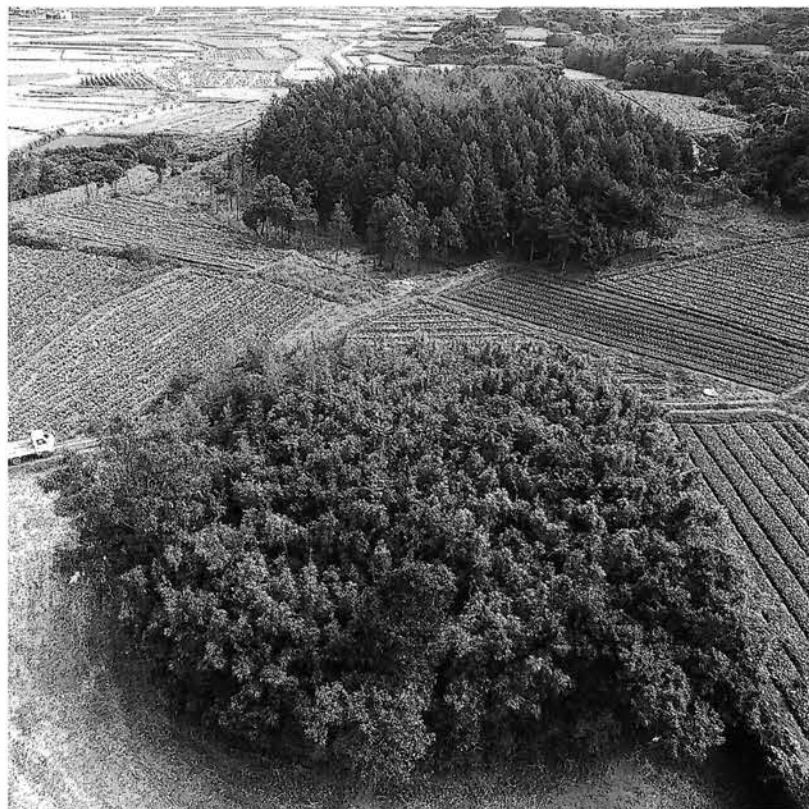
f
13・14号墳空中写真 一九八八



a
15・16・17・18・19・46号墳空中写真 一九八七



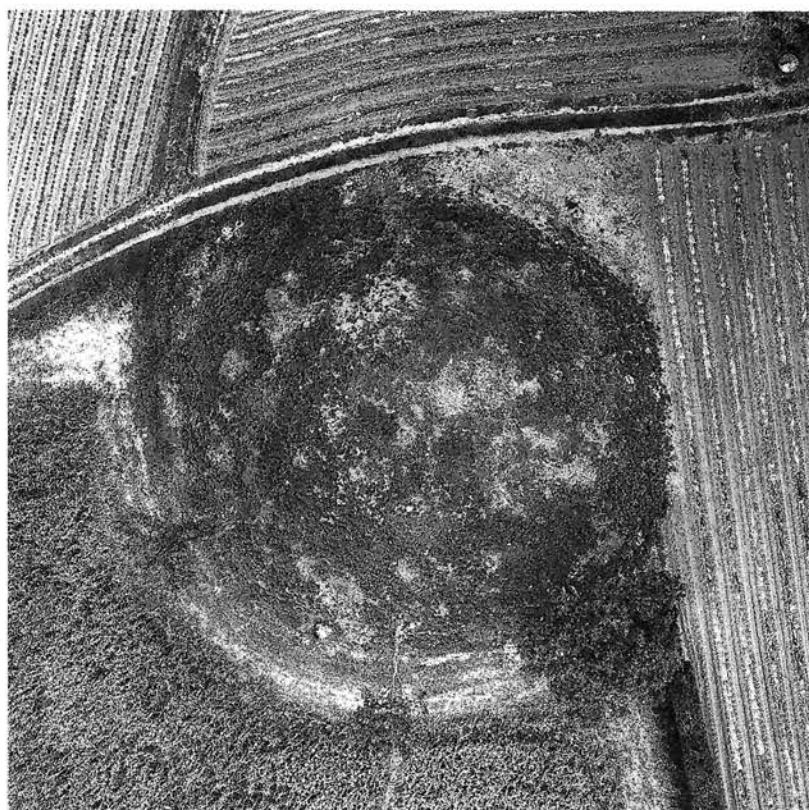
b
20・22号墳空中写真 一九八五



c
20号墳空中写真 一九八五



d
20号墳空中写真 一九八七



e
21・22号墳空中写真 一九八五



f
21・22号墳空中写真 一九八五



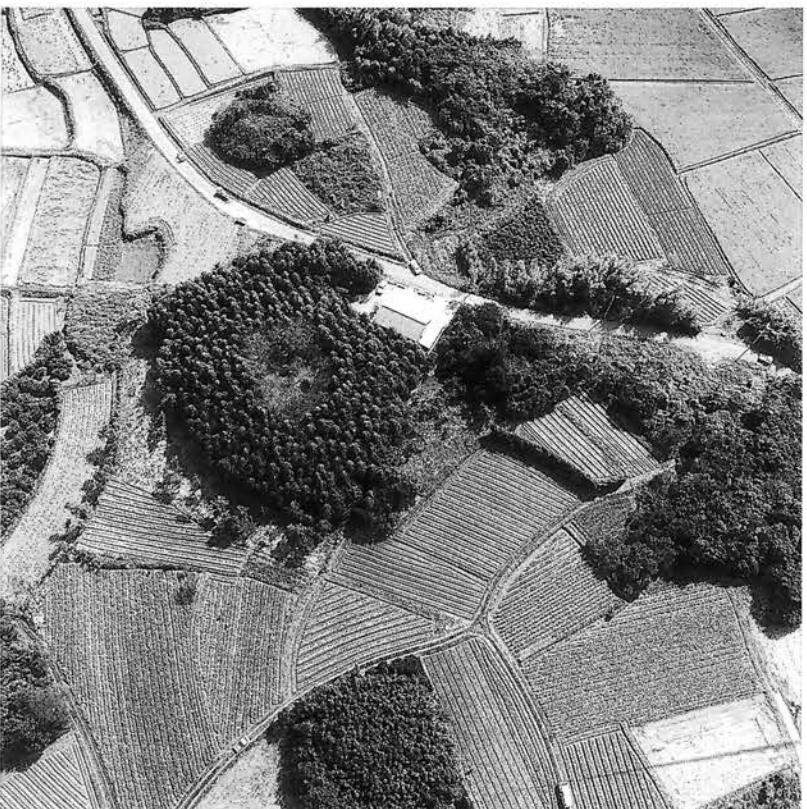
a 20・21・22号墳空中写真 一九八五



c 24号墳空中写真 一九八七



e 22・25号墳空中写真 一九八五



b 新原・奴山古墳群を西北上空から望む 一九八七



d 24号墳空中写真 一九八七



f 25・30号墳周辺空中写真 一九八六



a 25・30号墳周辺空中写真 一九八五



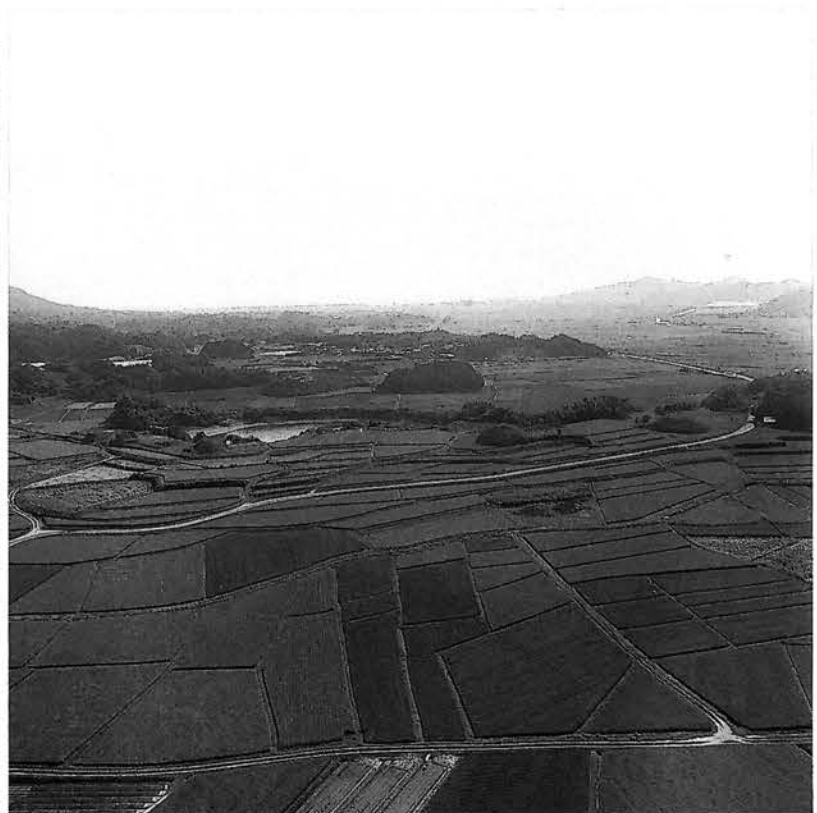
b 25・30号墳周辺空中写真 一九八六



c 25号墳空中写真 一九八六



d 新原・奴山古墳群を北上空から望む 一九八六



e 30号墳空中写真 一九八六



f 30号墳空中写真 一九八六



a
30・34号墳周辺空中写真 一九八六



b
34・35・36号墳空中写真 一九八六



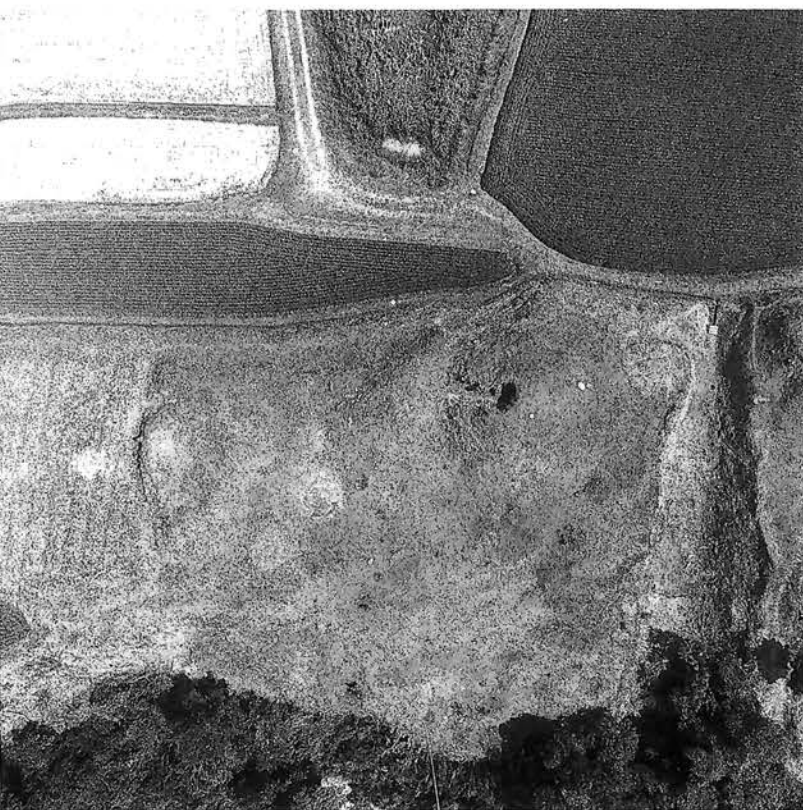
c
34号墳空中写真 一九八六



d
34号墳空中写真 一九八六



e
35・36号墳空中写真 一九八六



f
35・36号墳空中写真 一九八六



a
37・38号墳空中写真 一九八六



b
40号墳周辺空中写真 一九八六



1

c. 出土土器
1 30号墳
2~4 40号墳



2



3



2



3



4



2



3



4

新原・奴山古墳群

福岡県宗像郡津屋崎町所在
古墳群の調査報告

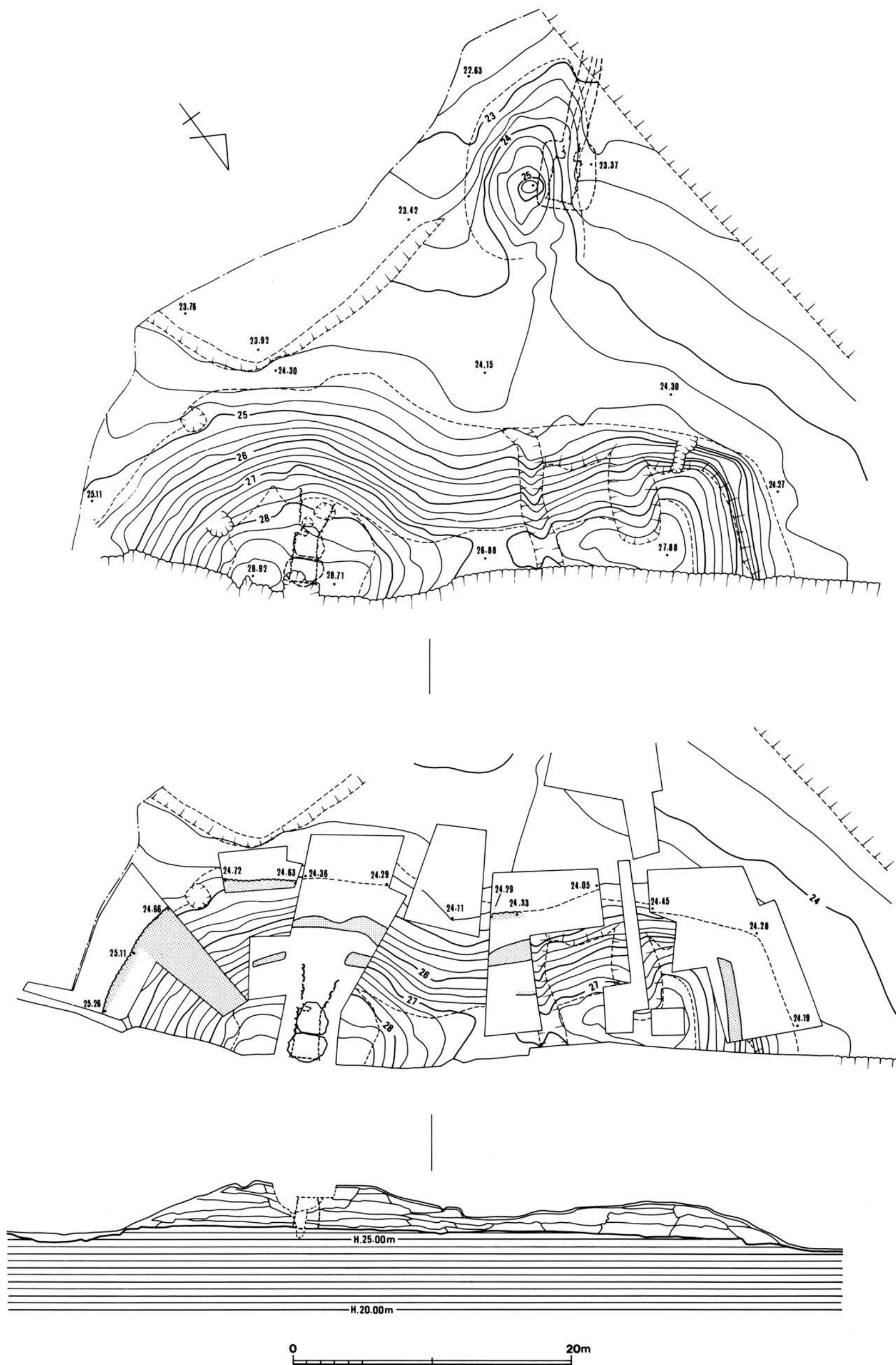
津屋崎町文化財調査報告書 第6集

1989年3月31日

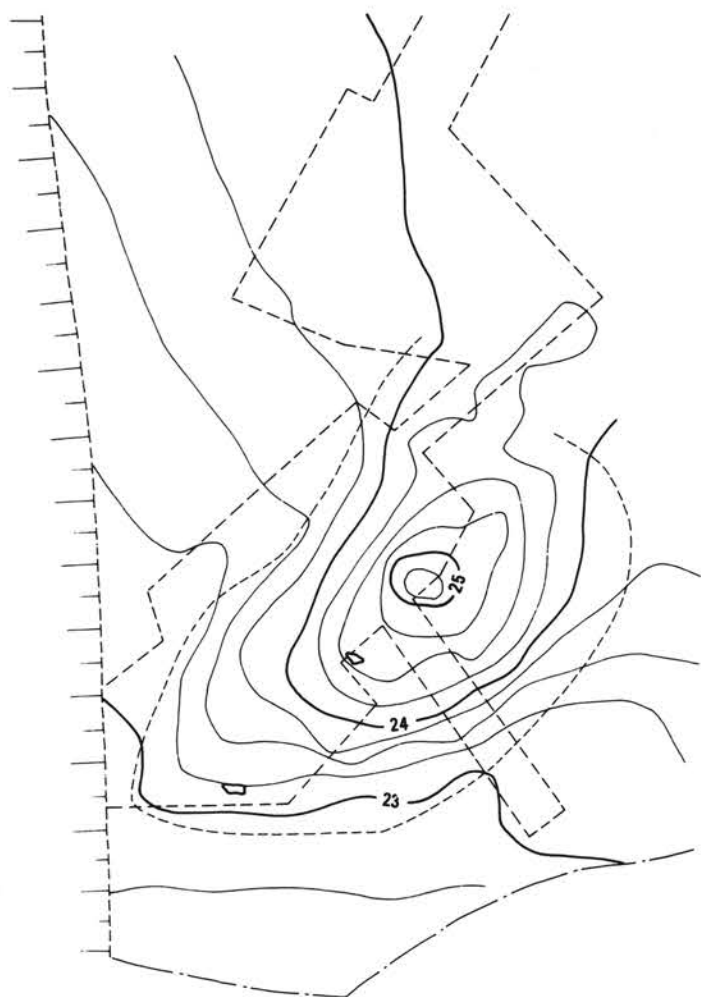
発行 津屋崎町教育委員会
福岡県宗像郡津屋崎町津屋崎
印刷 株式会社西日本新聞印刷
福岡市中央区天神1-4-1

付図1 津屋崎町 新原・奴山古墳群全体図 (S=1:1,000)

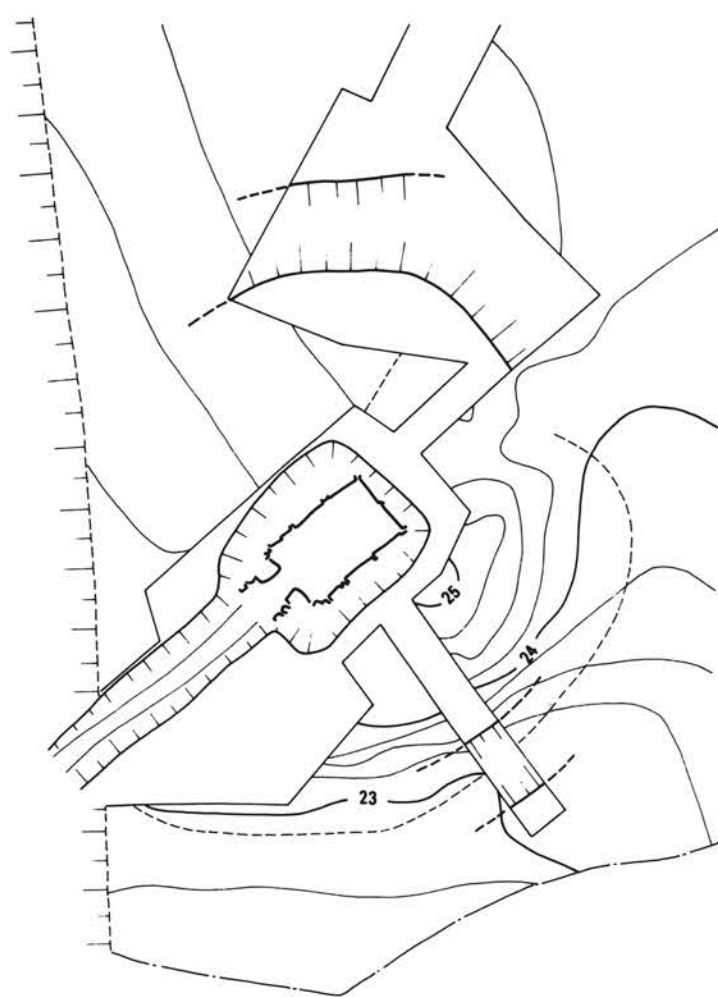




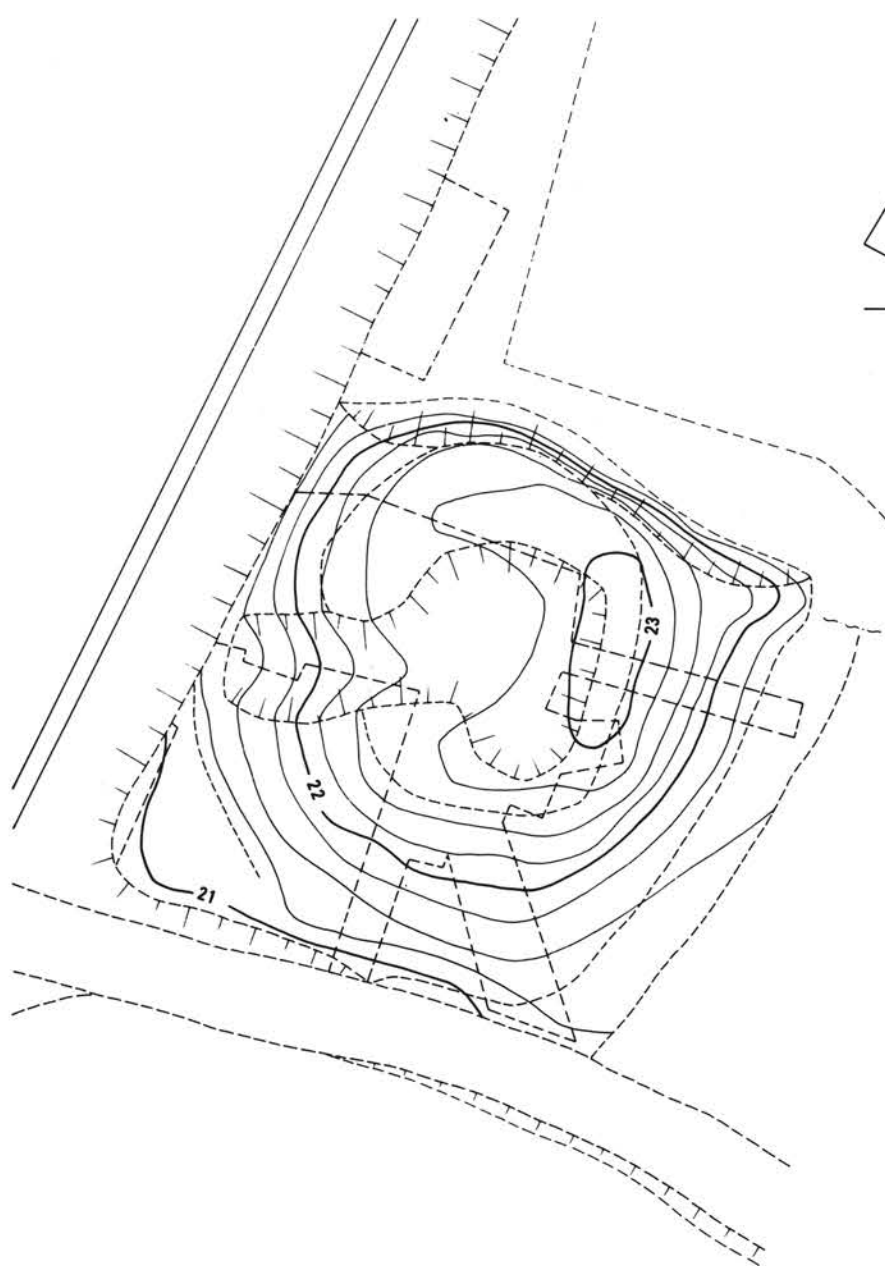
付図2 1号墳墳丘測量図(縮尺1/300)



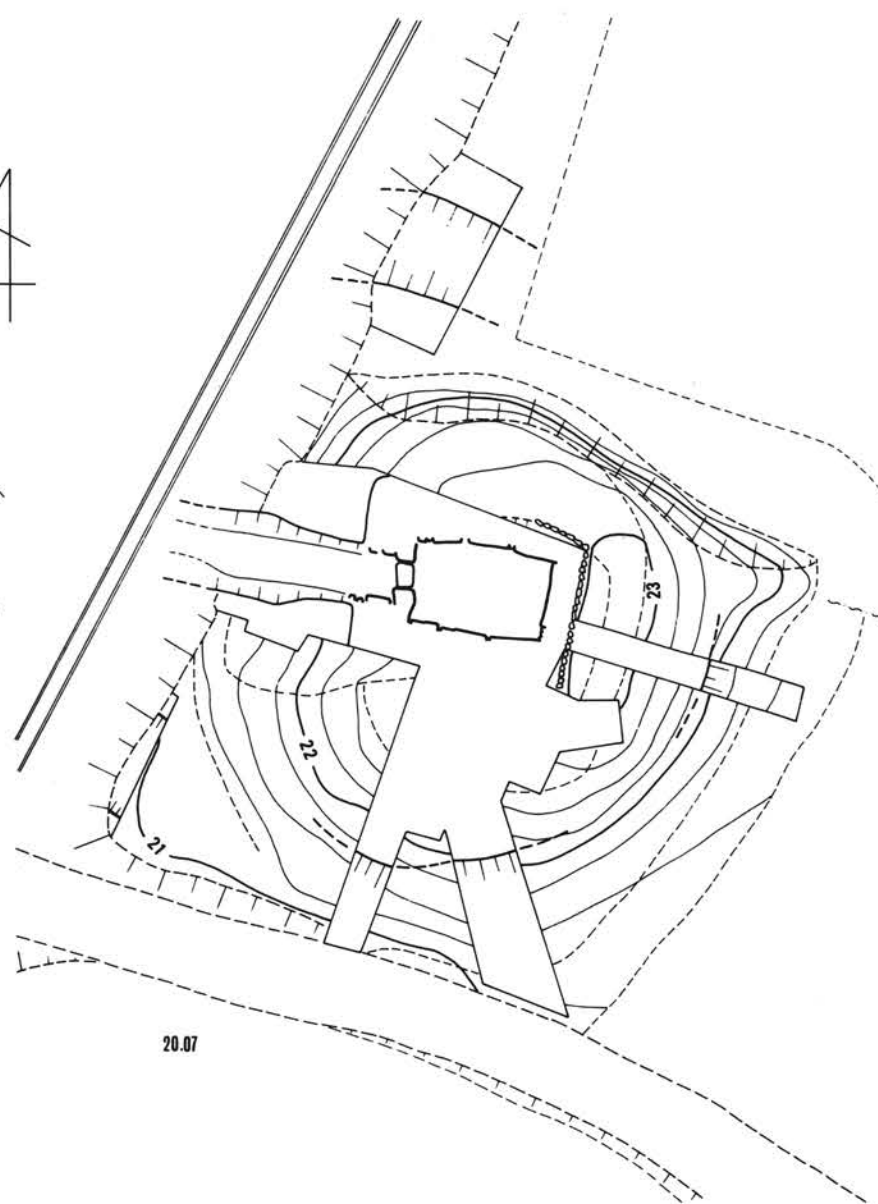
2



4



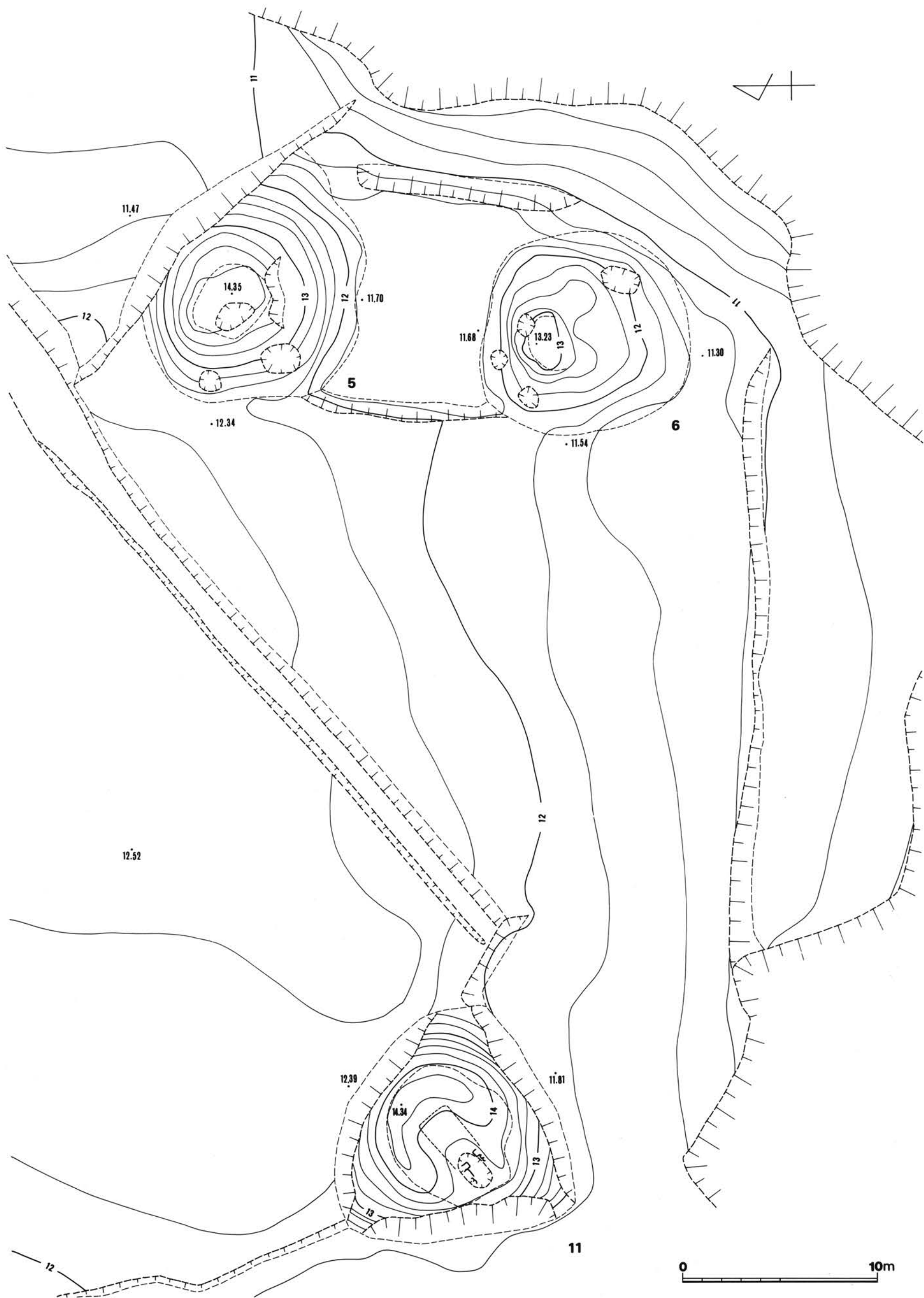
2



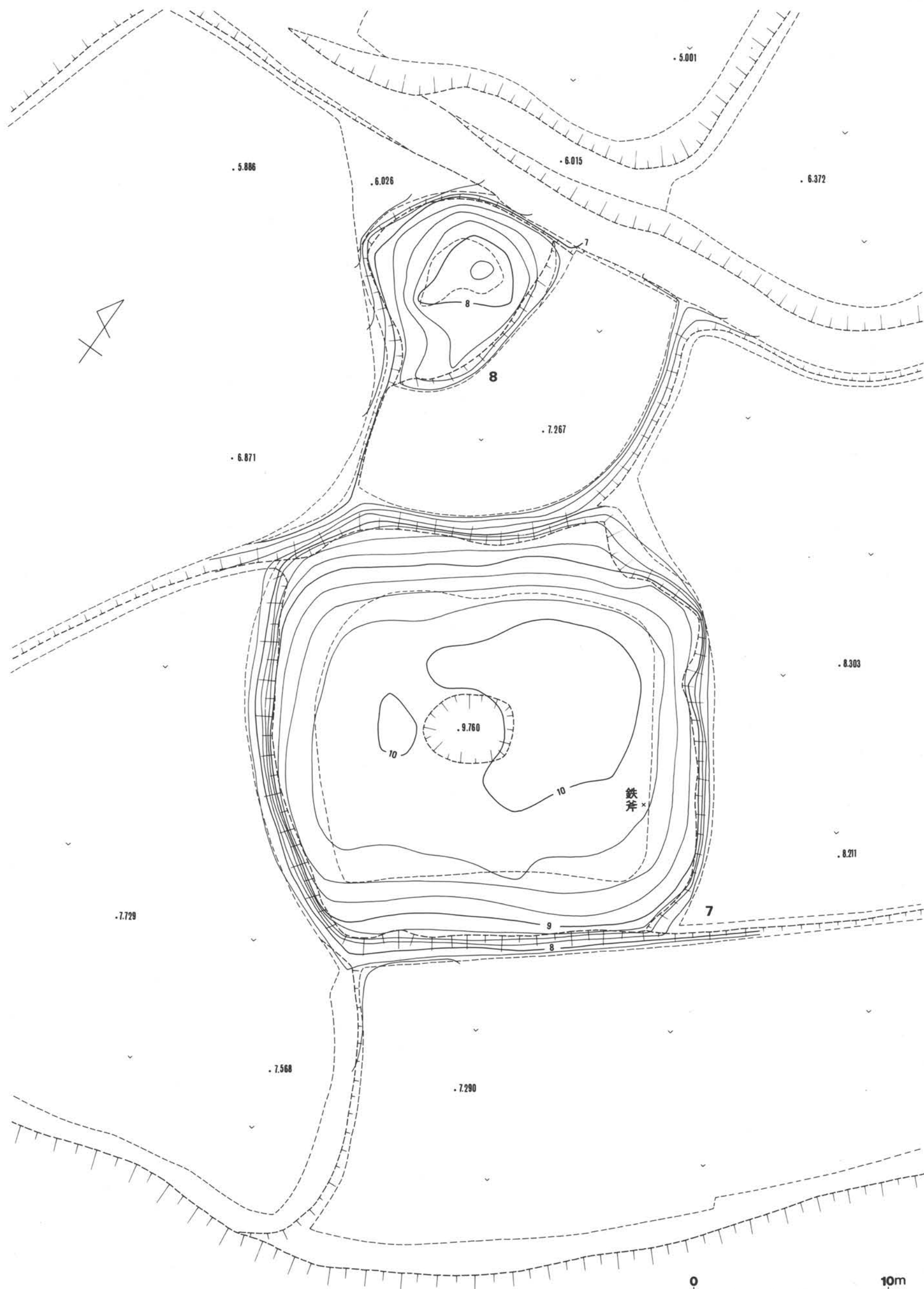
20.07



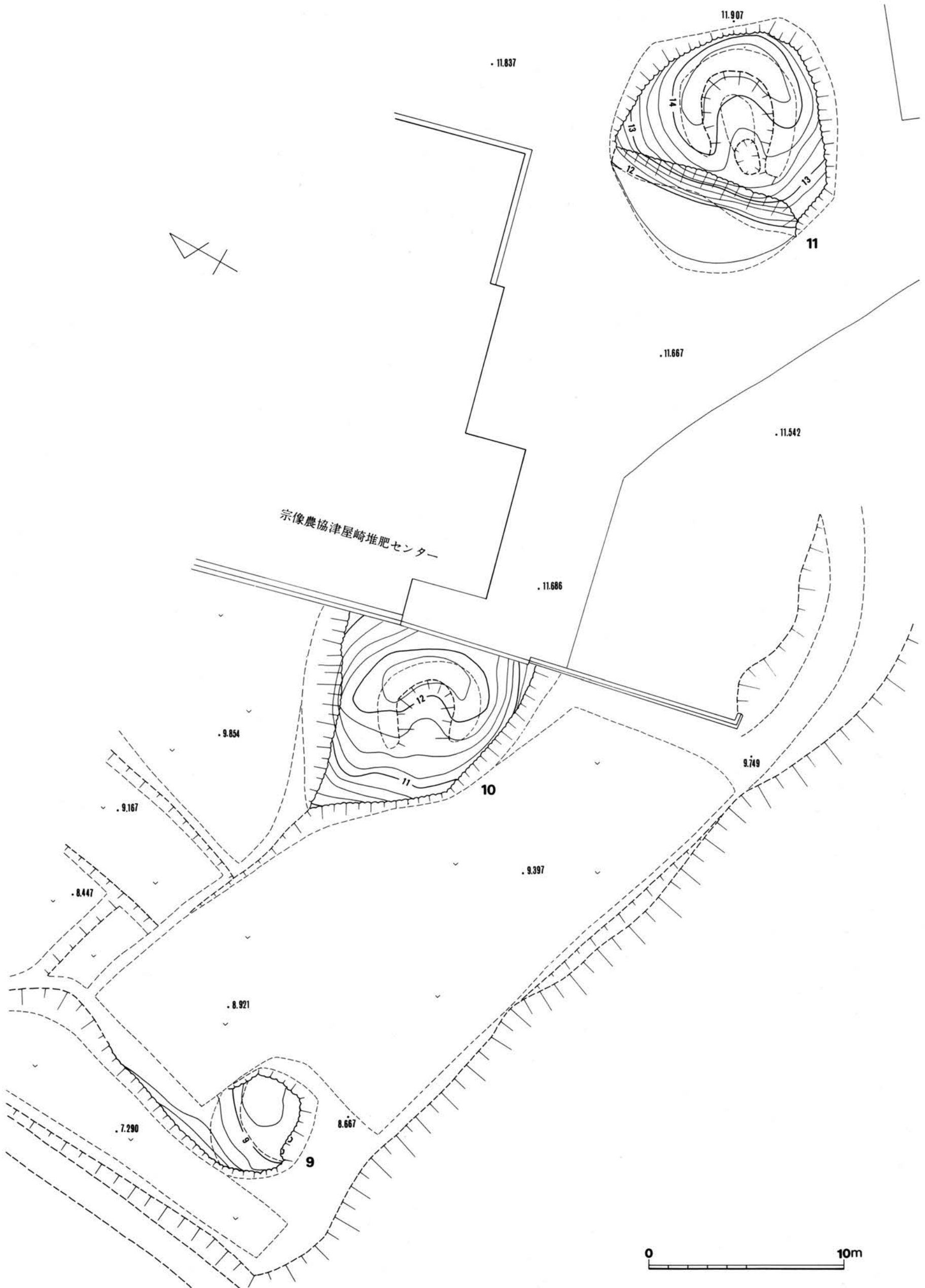
付図3 2・4号墳丘測量図 (縮尺1/200)



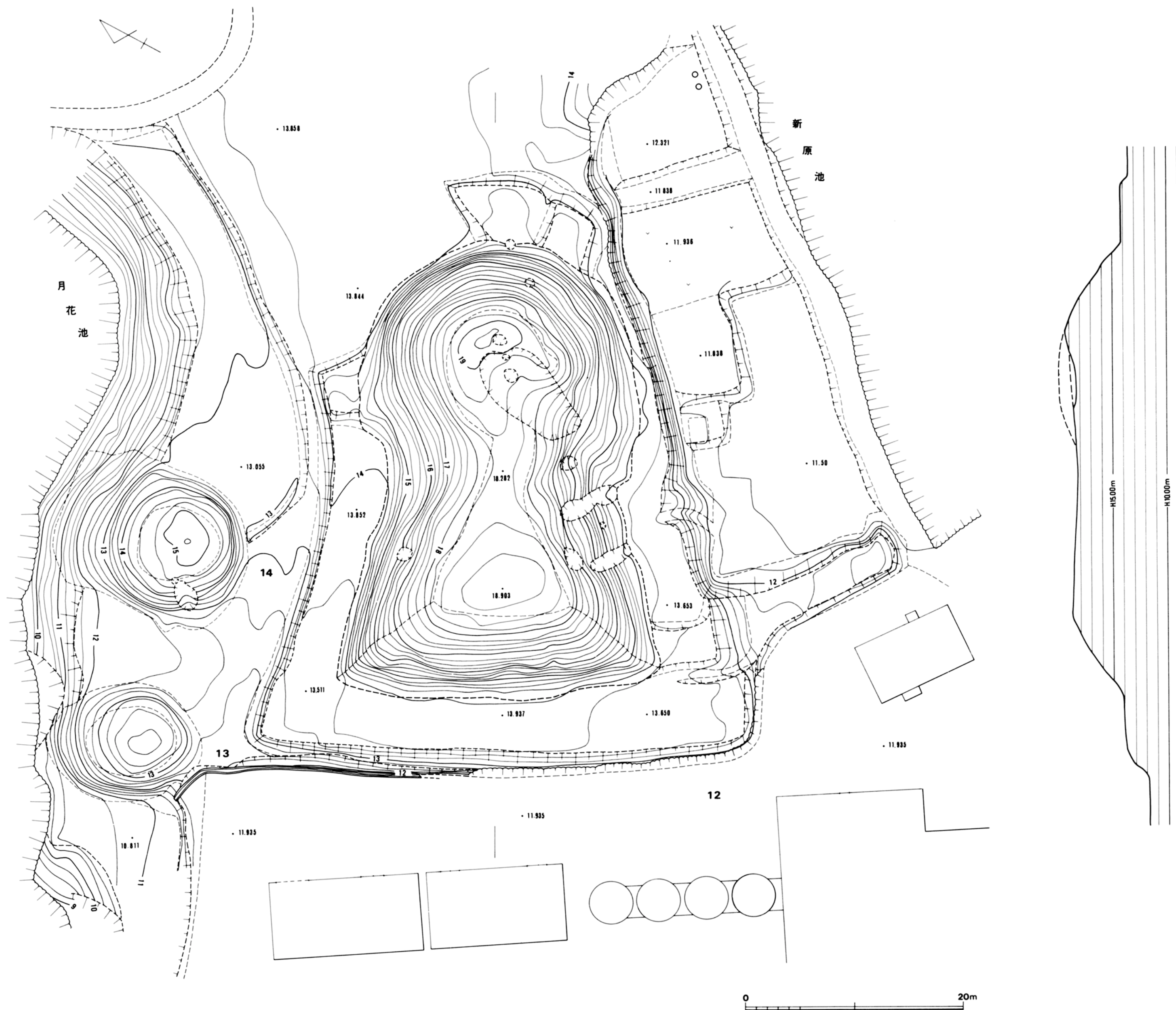
付図4 5・6・11号墳墳丘測量図（縮尺1/200）



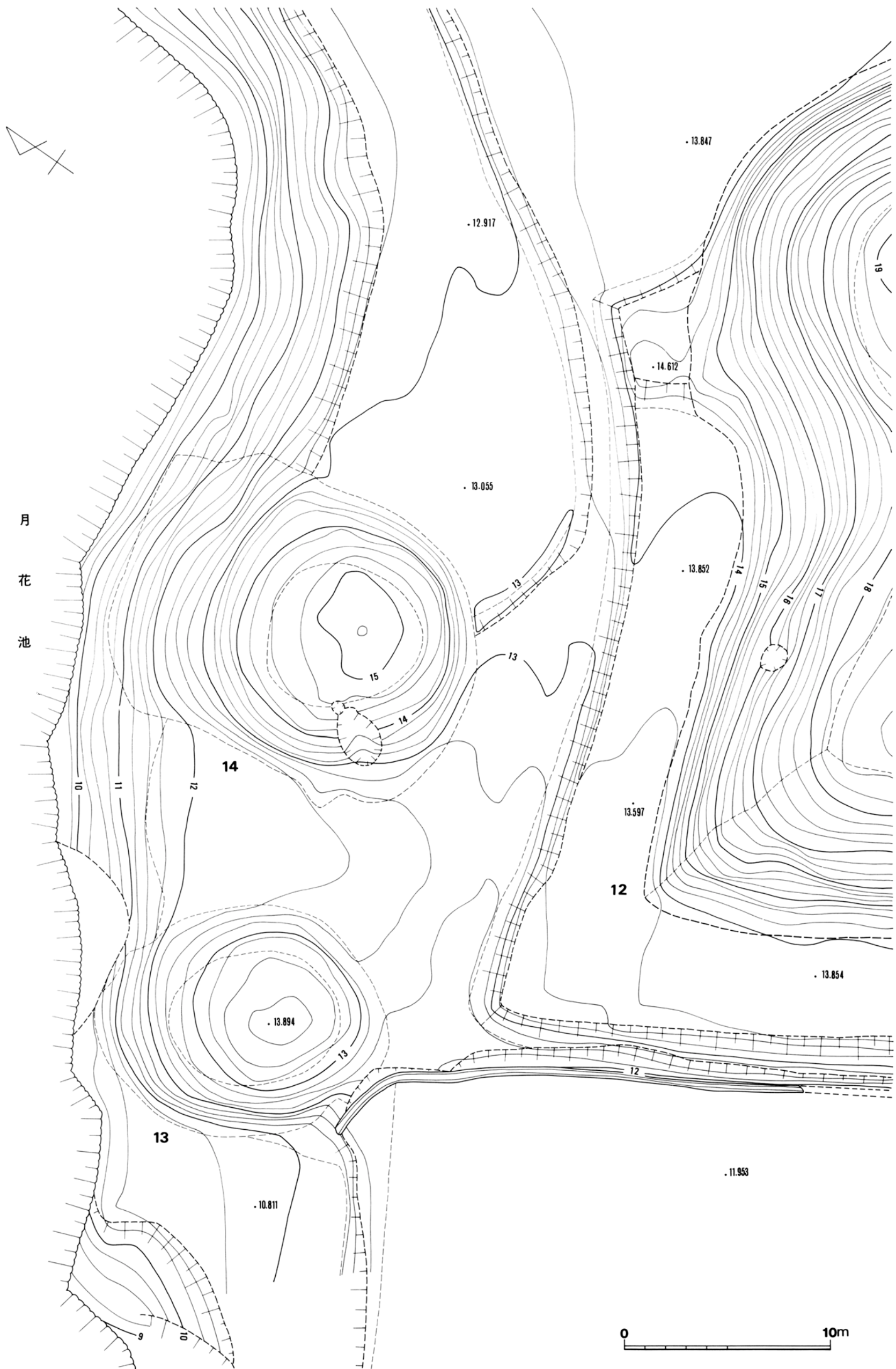
付図5 7・8号墳墳丘測量図(縮尺1/200)



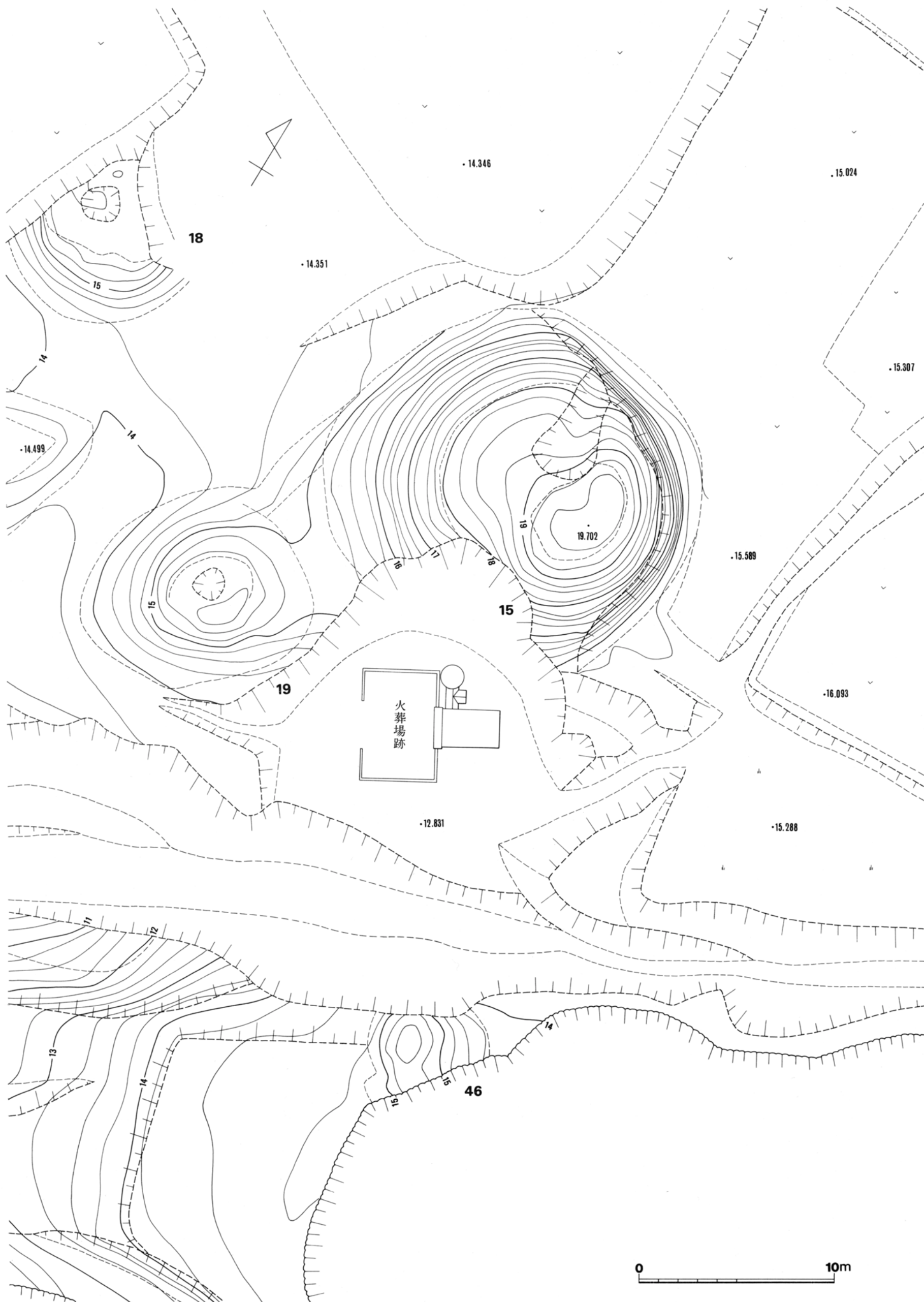
付図6 9・10・11号墳丘測量図(縮尺1/200)



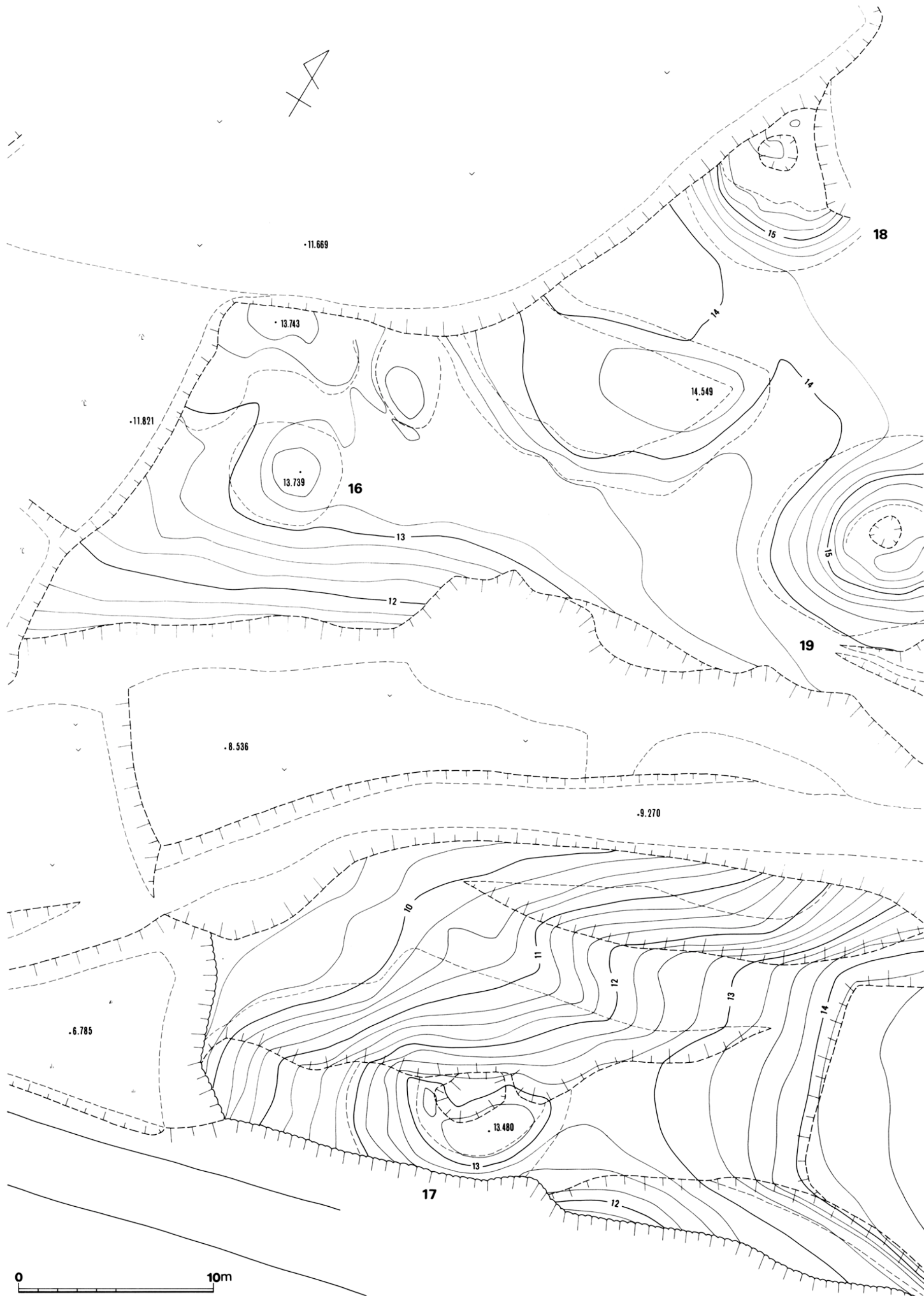
付図7 12・13・14号墳墳丘測量図（縮尺1/300）



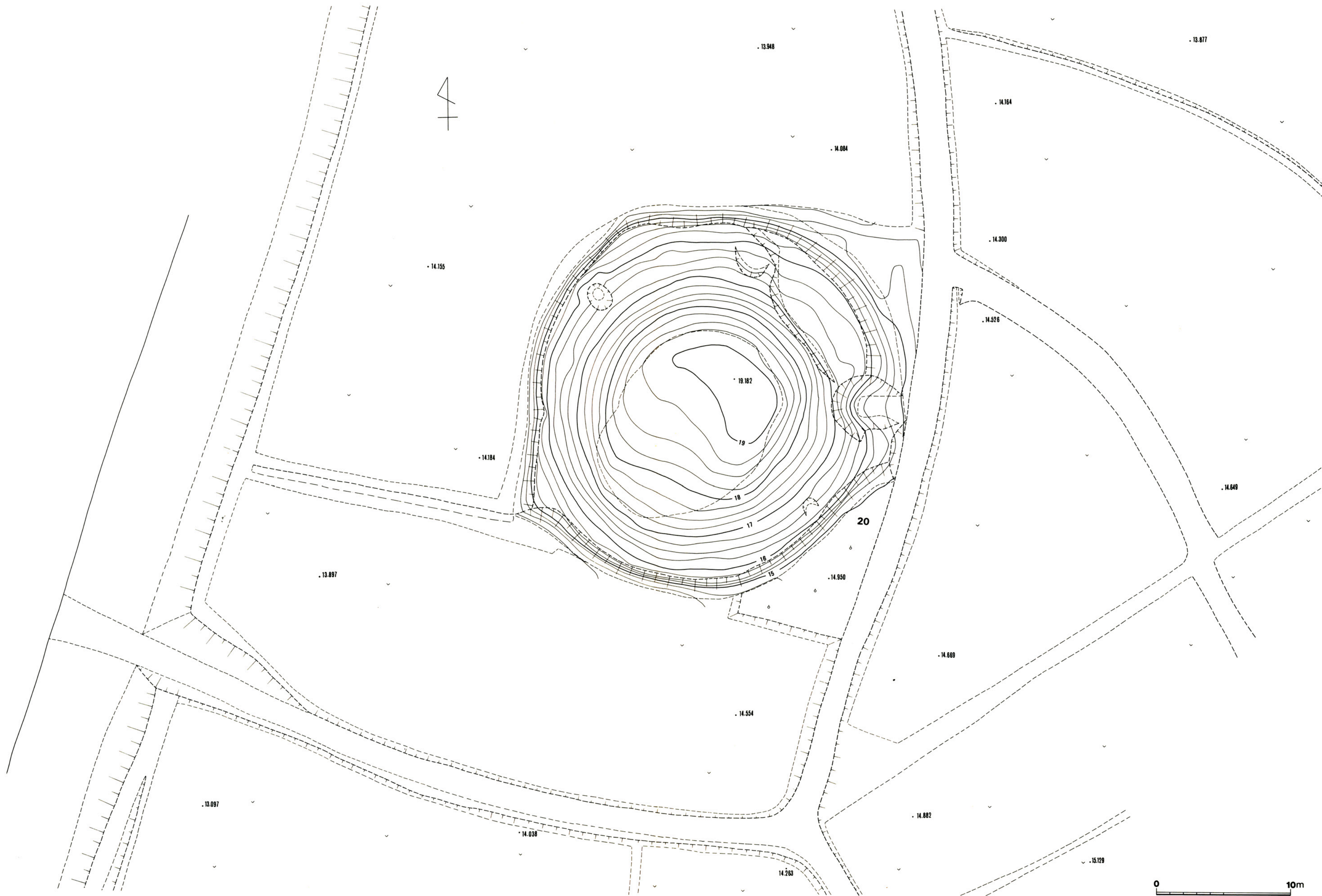
付図 8 13・14号墳丘測量図（縮尺1/200）



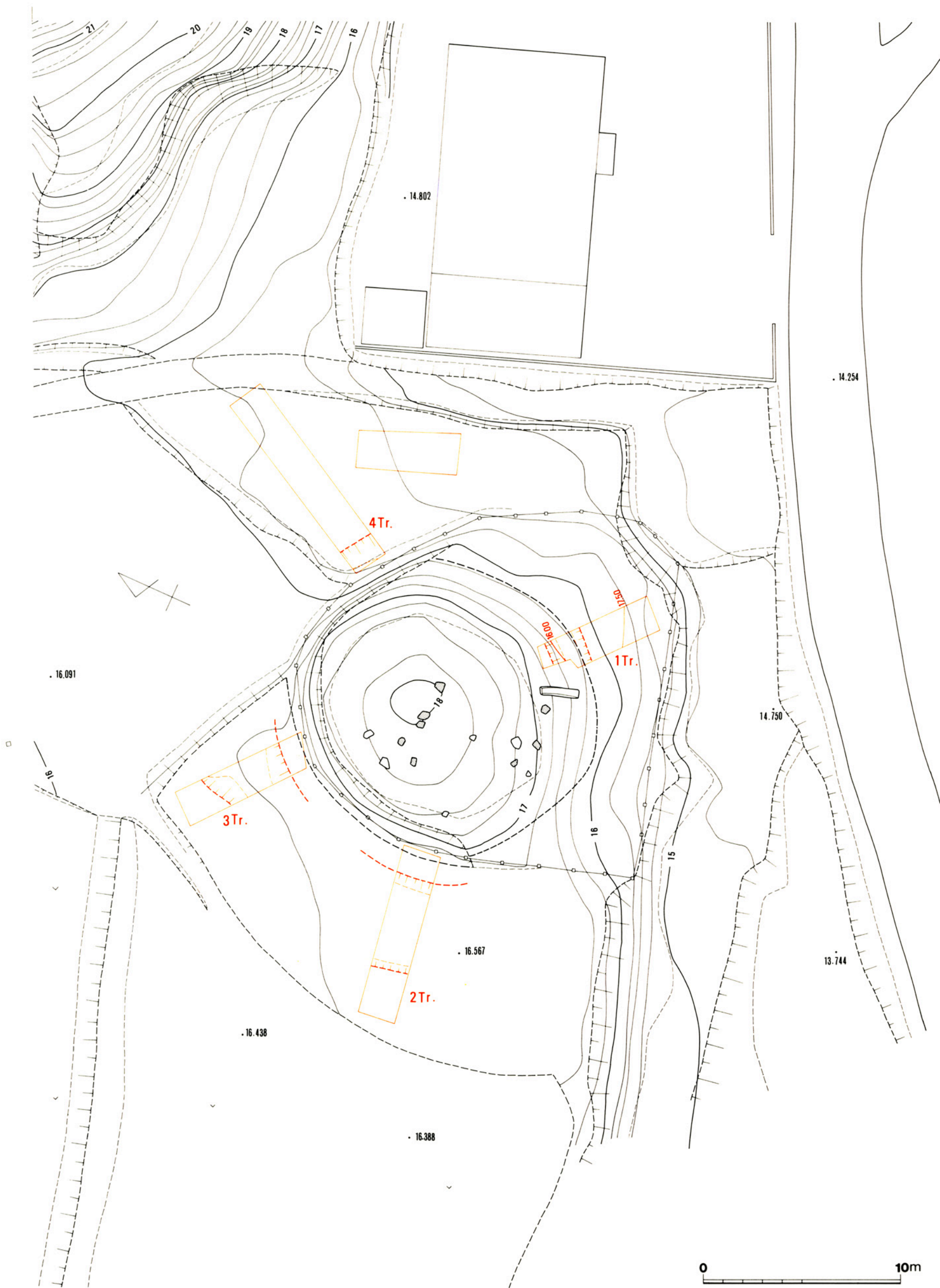
付図 9 15・18・19・46号墳丘測量図 (縮尺1/200)



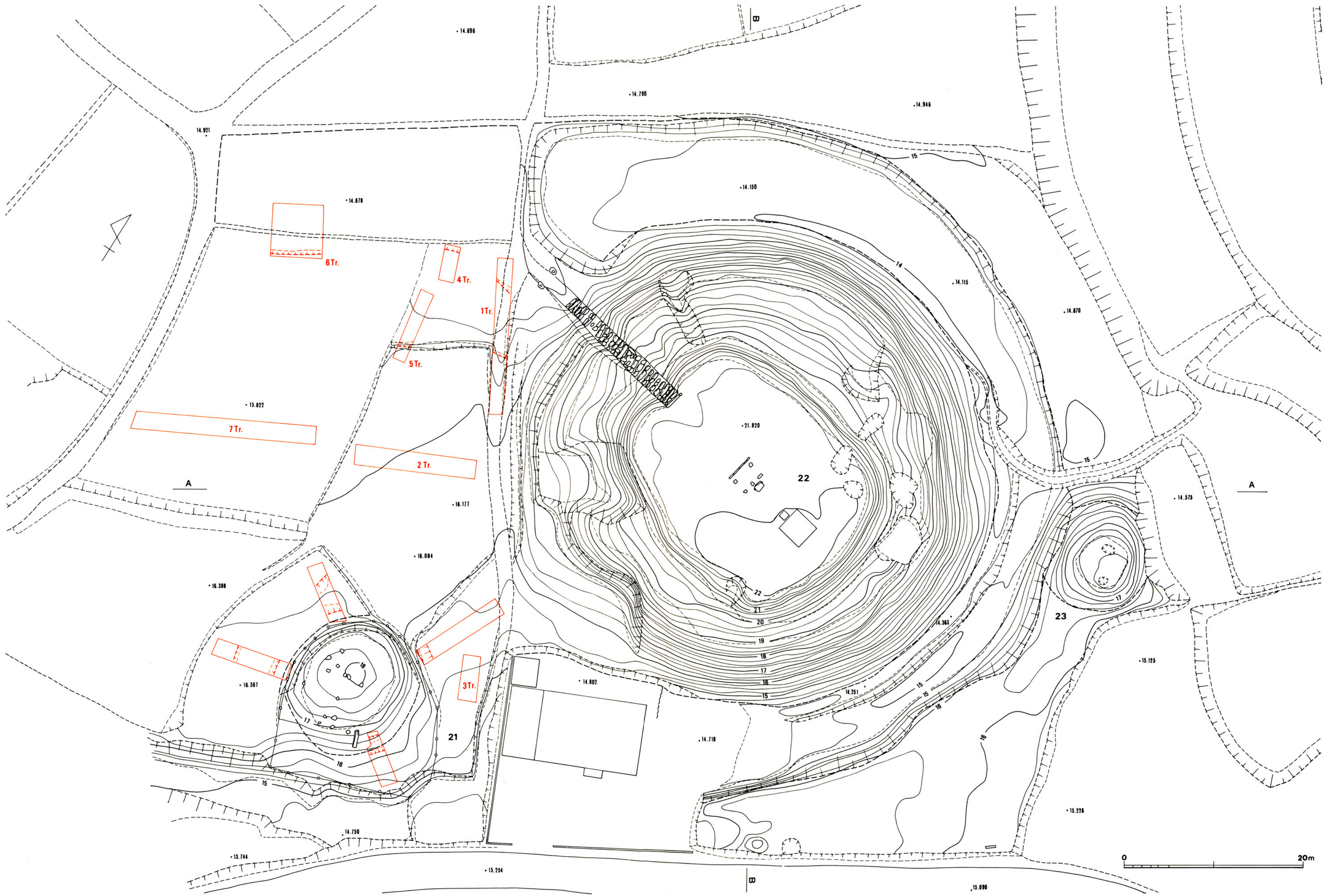
付図10 16・17・18号墳丘測量図（縮尺1/200）



付図11 20号墳墳丘測量図（縮尺1/200）



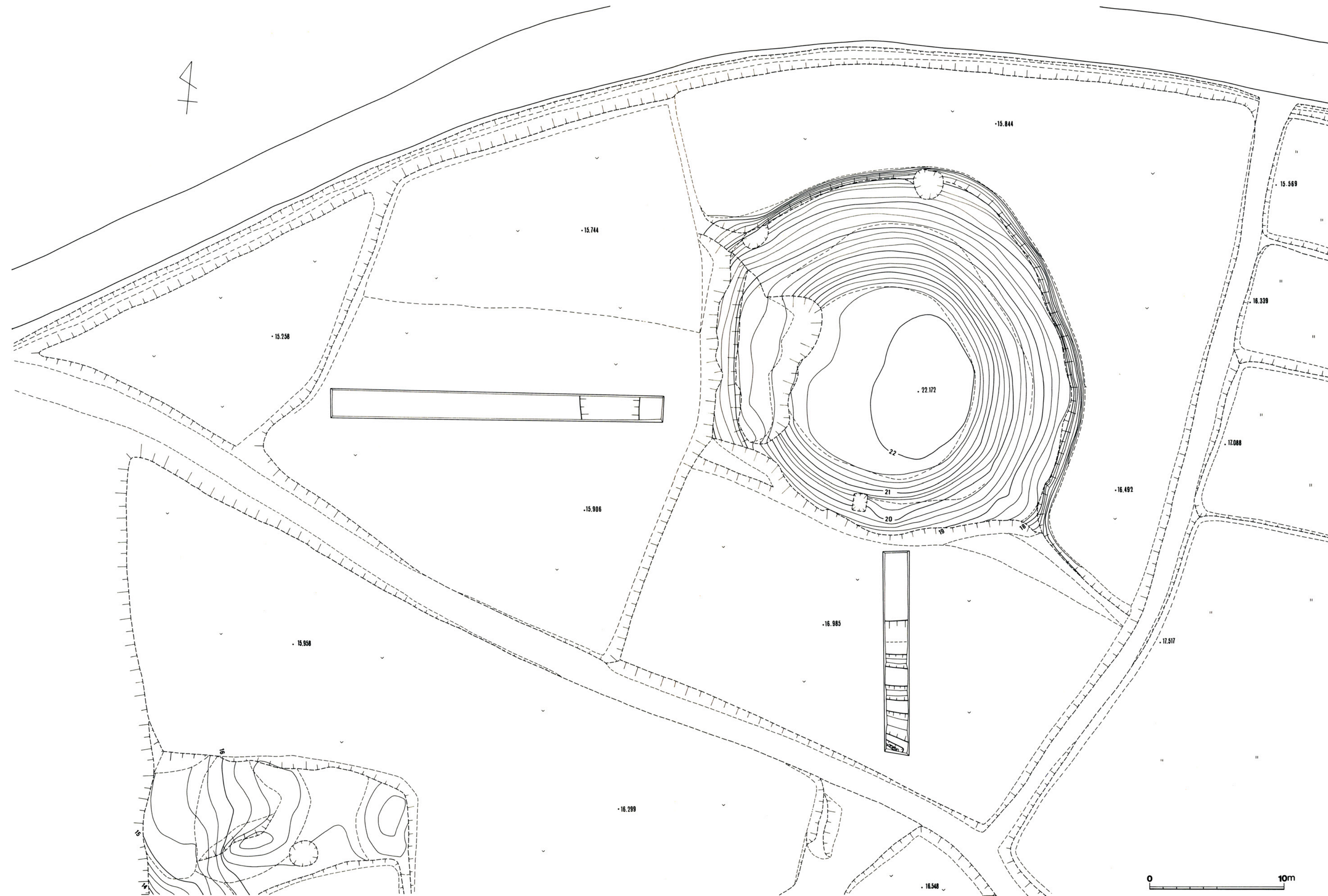
付図12 21号墳丘測量図（縮尺1/200）



付図13 21・22・23号墳丘測量図(縮尺1/300)



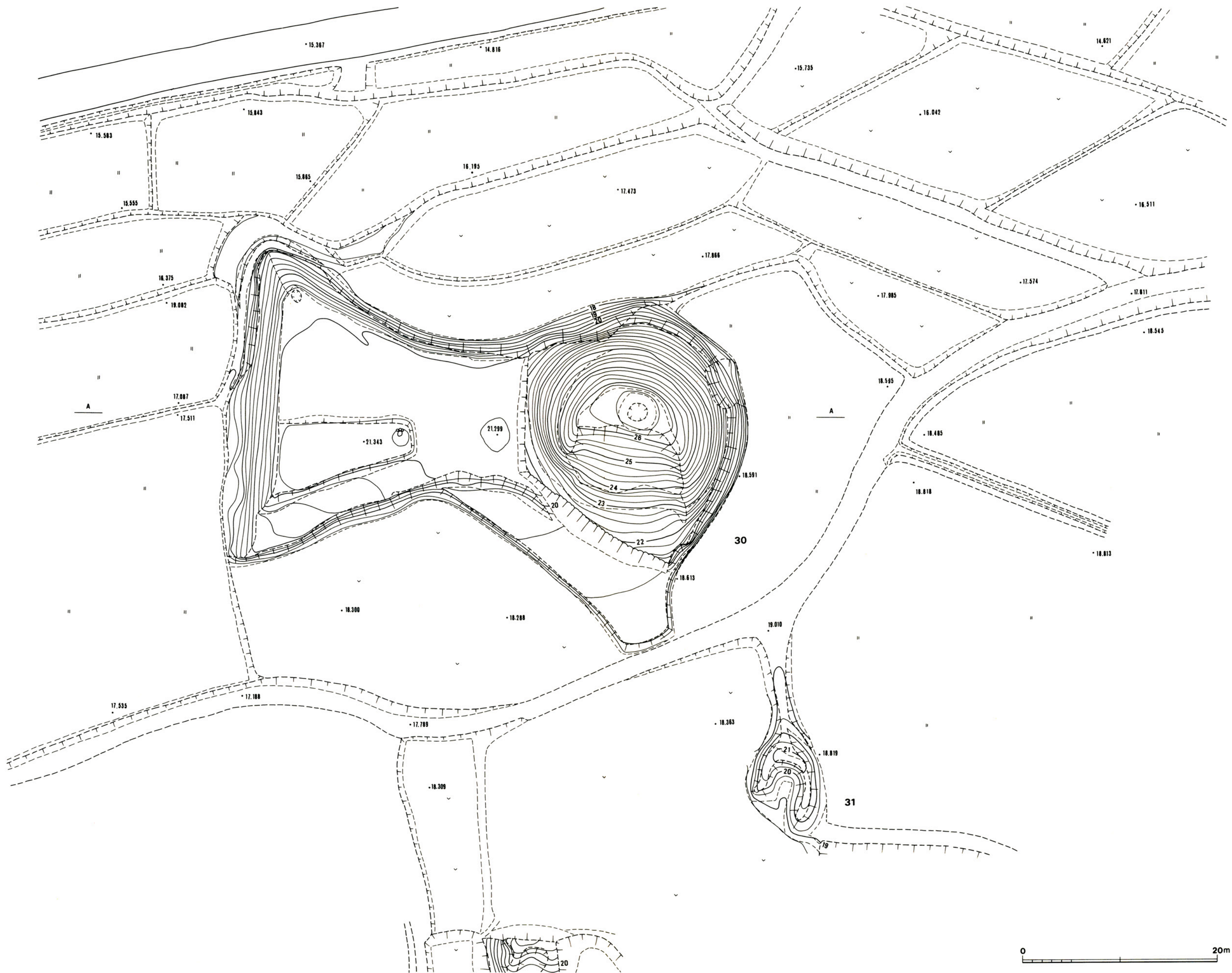
付図14 24・47・48号墳丘測量図（縮尺1/300）



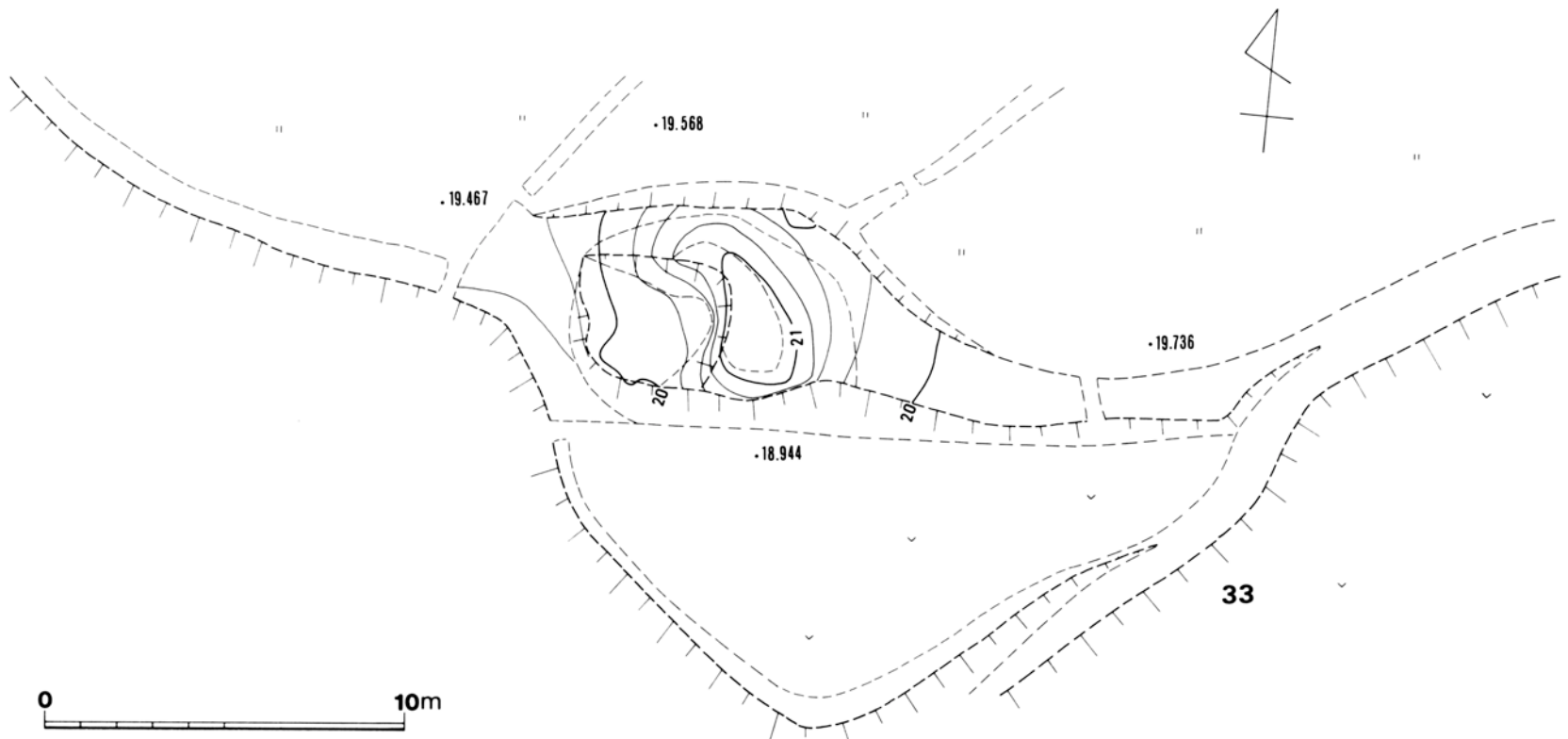
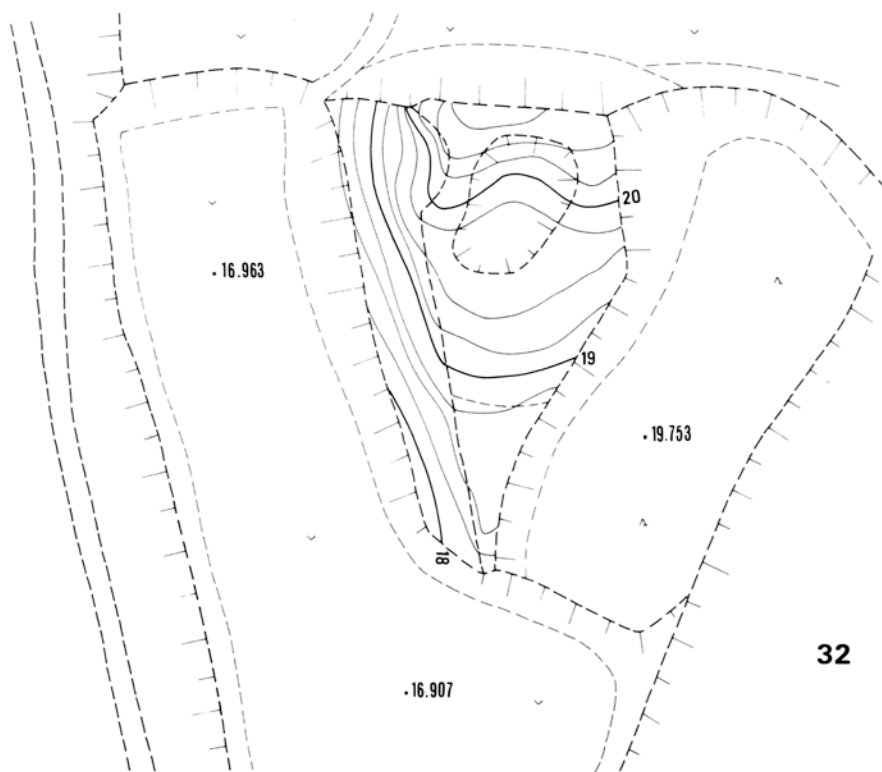
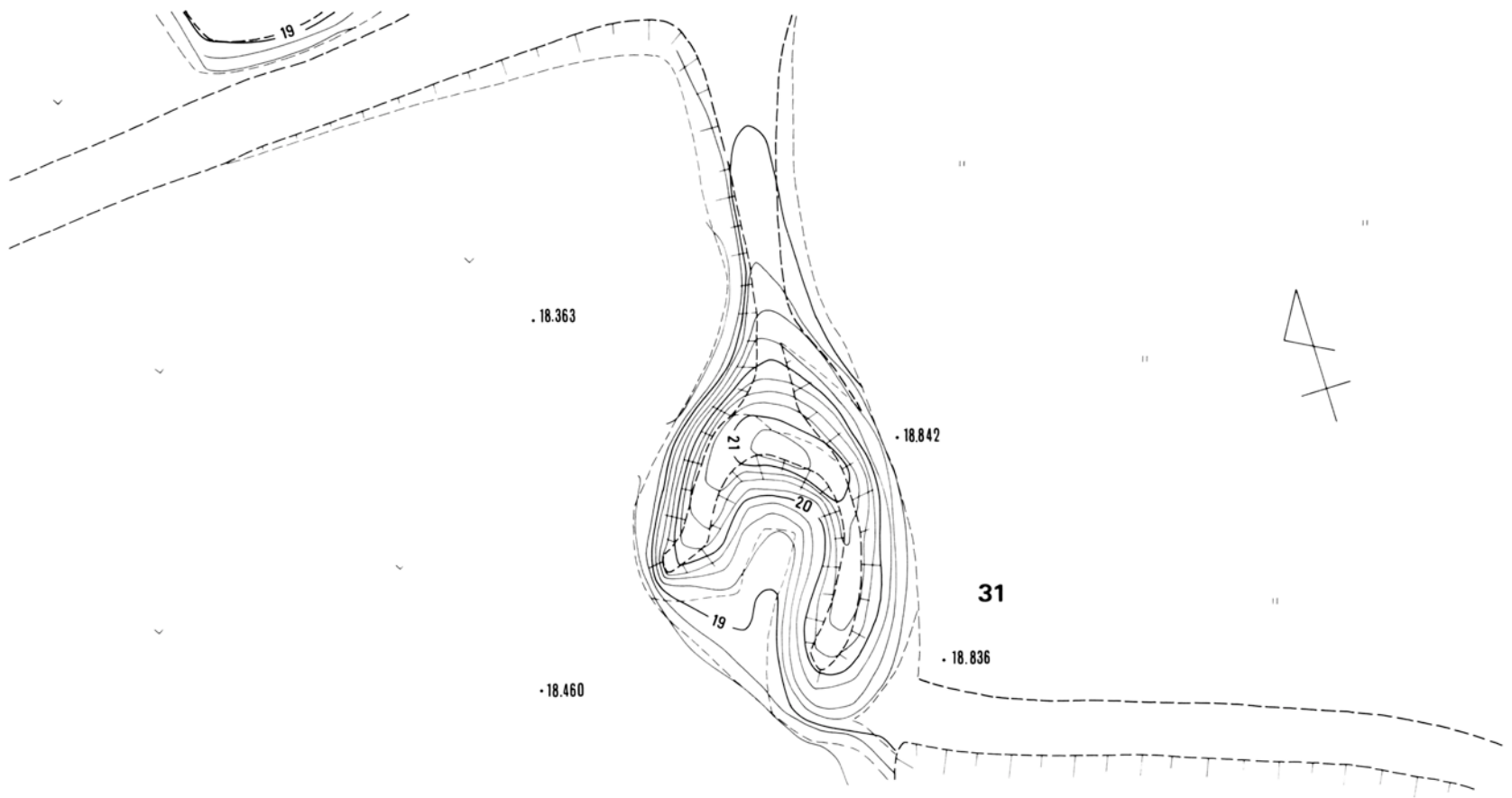
付図15 25号墳丘測量図 (縮尺1/200)



付図16 26～29号墳丘測量図（縮尺1/200）

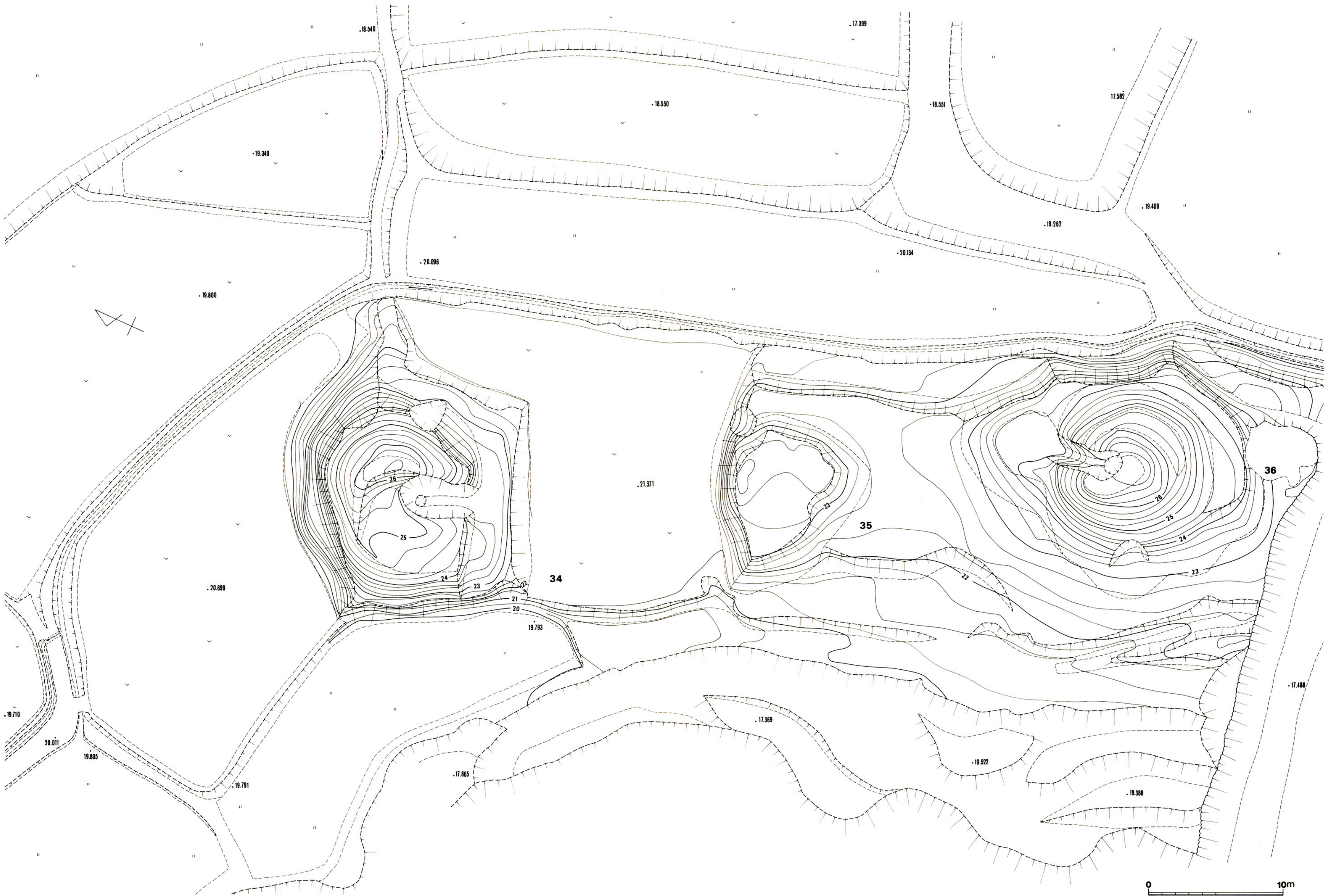


付図17 30・31号墳填丘測量図（縮尺1/300）

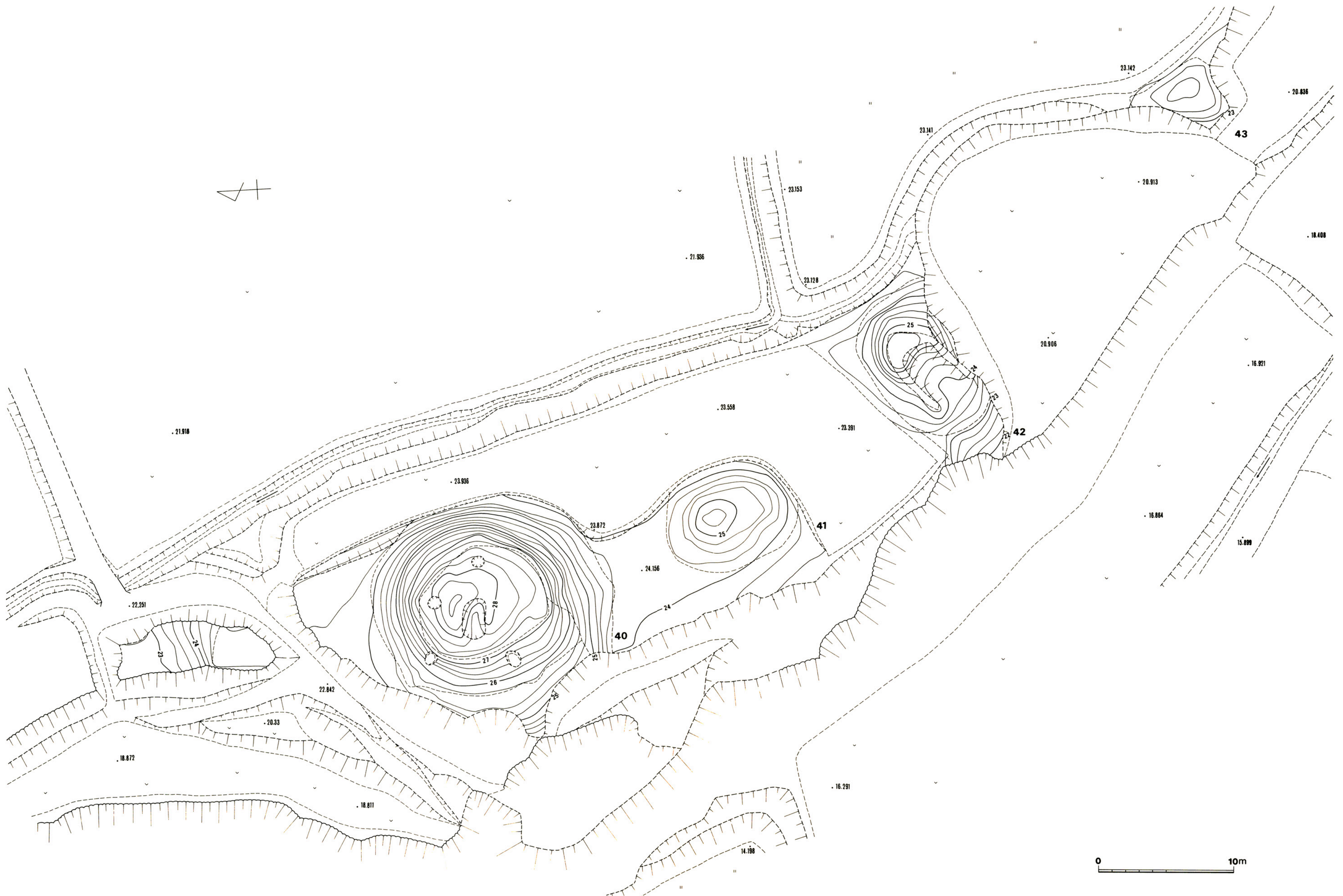


0 10m

付図18 31・32・33号墳墳丘測量図（縮尺1/200）



付図19 34・35・36号填墳丘測量図（縮尺1/200）



付図21 40～43号墳丘測量図（縮尺1/200）